

福岡市動植物園再生基本構想

平成16年10月

福岡市

福岡市動植物園再生基本構想

平成16年10月

福岡市

I. 現動物園が抱える課題

① 施設が老朽化している

- ・ 築20年以上の施設が約5割
- ・ 従来型のコンクリートと檻・柵で構成した無機質な展示空間で老朽化が目立つ

② 園路に坂道が多い

- ・ 急勾配園路が半分を超える

③ 駐車場が不足している

- ・ 295台（動植物園合計）

④ サービス機能が不十分

- ・ 休憩スペースが少ない
- ・ ゆっくり観覧するスペースがない
- ・ 知る意欲への対応が不十分
- ・ 動物園と植物園に連携が不十分

⑤ 展示・飼育施設が旧式

- ・ 展示手法が単調である
- ・ 展示・飼育空間が狭い
- ・ 動物がストレスを感じる
- ・ 見る人が可哀そうと感じる

⑥ 動物の保護・繁殖体制が不十分

- ・ 飼育室に産室や予備室がなく繁殖が制限
- ・ 動物病院や入院療養施設が狭く、十分な健康管理が困難

現況写真



単調な展示方式



隠れ場所や遊具のないパドック



単調で狭いパドック



単調で狭いパドック

II. 福岡市動物園に与えられた条件

立地条件

- ・ 市の中心部に位置している
- ・ 動物園と植物園が隣接している

地形条件

- ・ 丘陵地で地形が急峻
- ・ 市の緑の骨格を形づくる豊かな樹林

III. 再生の基本理念

（福岡市自然動物公園構想の理念の継承）

21世紀・人と動植物の共存をめざして



正面入ってすぐの急坂



動物園と植物園を結ぶ園路(急坂)



待合場所や日よけのない入口広場



狭く2階建てで使い勝手の悪い動物病院

IV. 福岡市動植物園の3つの基本的方向性

楽しさ・よろこび創出のために Enjoyment

驚き、楽しみ、学び、活動できる動植物園

- 動物種の個々の行動特性に応じた環境をつくり、生き生きとした動物の姿の発現
- 来園者に驚き・感動・発見・楽しさ・よろこびを与える展示・運営の展開
- 目の前の展示を入口として、環境学習への発展と展開
- 動植物園への愛着を育むため、市民参加・市民活動の機会増加と市民に開かれた運営

個性創出のために

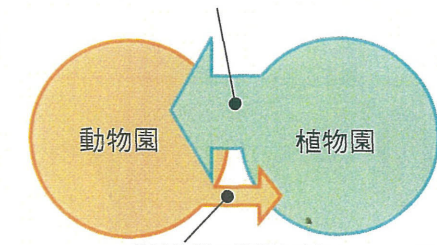
動物と植物が一体となった空間づくりと運営

Originality

- 動物園、植物園が隣接するメリットを活かした、動植物園の融合

〔動植物園融合のイメージ〕

○動物園全体に植物を積極的に導入し、動物園区域の全面的な動植物園化を図る。



○植物園の機能を確保しつつ、動植物による効果的な展示を植物園区域へ部分的に導入しながら、動植物園化を図る。

福岡らしさ創出のために

福岡の地域性や南公園の敷地特性を活かしたテーマ設定

Locality

- アジアの交流拠点都市をめざす福岡市の動植物園として、アジアを意識したテーマ設定や種の選定
- 福岡と対馬の近接性を活かしたツシマヤマネコの保護・繁殖活動の継承・発展
- 高低差のある地形や豊かな樹林を活かした、施設づくりや演出

V. 基本構想の概要

① 驚き・感動・発見を与え、動物への興味・理解を促す展示

- ・来園者に「驚き・感動・発見・楽しさ・よろこび」を与える展示を行い、それを通して野生動物への興味、ひいては野生動物との共生・環境・生態・生命への理解を促す。
- ・そのために、現場職員の創意工夫によって、動物の生き生きとした行動を引き出す施設づくり・展示運営を行う。
また、映像媒体では感じられない動物園だからこそ見せられる「気配・においなどの五感で感じるリアリティ」、「動物との近さ」に配慮した施設づくりを行う。
- ・エリア全体で生息地の雰囲気演出し、動物の生息環境への理解を促す。また、生息地での野生動物と人々の関係を解説することで、人間社会と野生動物の関係、地球環境を考える機会を提供する。



動物の行動を引き出す環境(例)



驚き・発見(例)

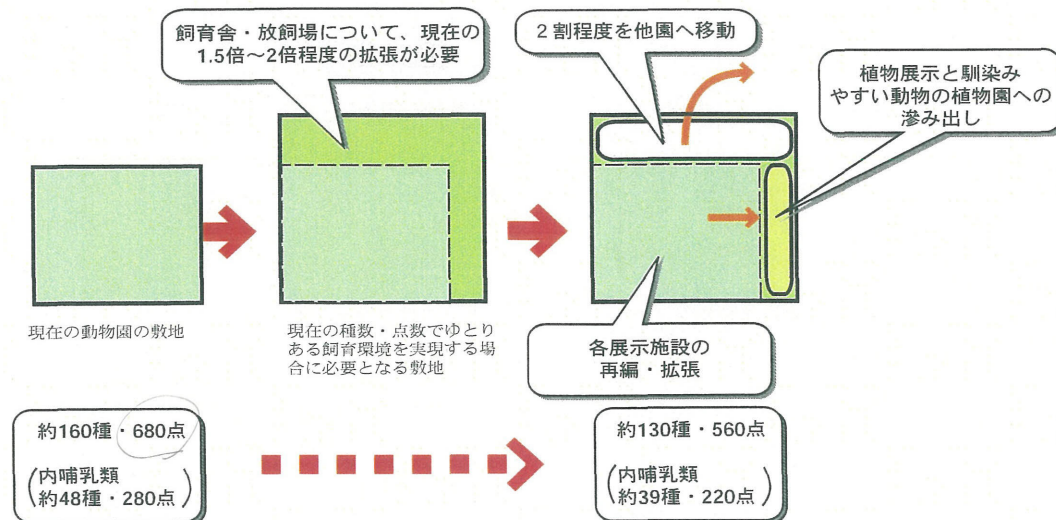


生息地演出(例)

② 動物が生き生きと暮らせる空間の確保

- ・獣舎の面積を1.5～2倍にする。
- ・植物展示と融和させやすい鳥類などについては、植物園区域での展示を行う。
- ・動物種を2割程度削減する。

*なお、一般区域(無料樹林区域)への拡張も検討したが、地形が急峻なため整備コストに対して効果が低く、さらに良好な自然樹林を開発するなどのデメリットも大きいため、拡張しない。



③ 動物園と植物園の融合

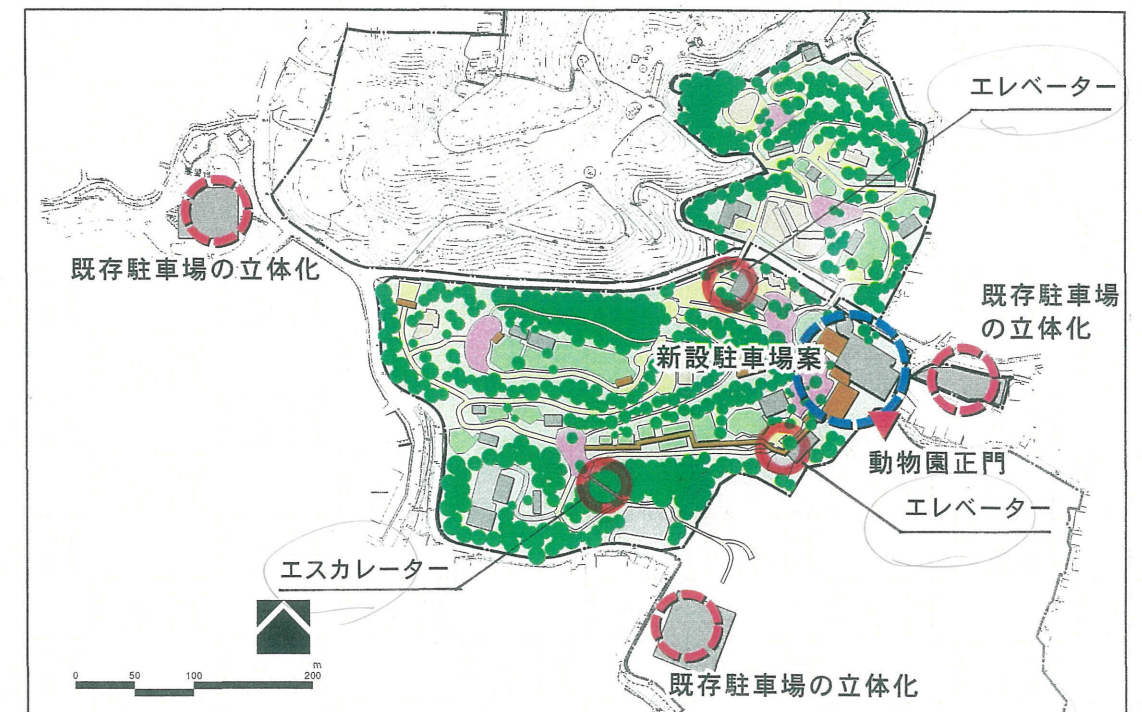
- ・園路やエリアガーデン、スポットガーデンなどに美しい花や緑を導入し、花や植物も楽しめる『ガーデン動物園』をめざす。
- ・植物園の技術を活かし、動物と植物が一体となった生息地空間の演出を行う。
- ・植物園の一部に鳥類展示等を導入し、植物と鳥類の美しさを見せるバードガーデンをつくる。
- ・運営体制も一体化し、市民サービスの向上を図る。



エリアガーデン イメージ図

④ 来園者の利便性の改善

- ・既存駐車場(3ヶ所)の立体化などで増設を図る。
- ・坂道が多い園路にエレベーター、エスカレーターを導入し、急勾配(傾斜度8%以上)の園路を3分の1以下にする。



⑤ 希少動物の保護・繁殖の充実

- ・絶滅のおそれのある種の保存、野生の動物の捕獲禁止による動物園内での繁殖の必要性から、動物園内での保護・繁殖の充実を図る。
- ・ツシマヤマネコについて、積極的に繁殖を進める。

⑥ 管理運営体制の改善

- ・現場職員が考案し、自らが演出・実施する展示やイベントを積極的に展開する。
- ・施設の再整備プロセスでも、現場職員の創意工夫により、効果的な展示やイベントができる施設づくりを進める。
- ・さらに、動植物園に不可欠な企画運営を確実に進めるために、企画、教育、広報の担当部署を創設し、企画・学習プログラムの立案・運営、PR活動、営業活動など、施設整備と一体となったソフト事業を総合的に展開する。
- ・動植物園総合管理センター、動物病院、検疫施設などの施設・組織の再配置を行う。

⑦ 概ね20年間で再整備を行う

- ・再整備では、今ある施設を取り壊して新たな施設を作らなければならないため、短期間での再整備は不可能。動物へのストレスと来園者への影響を抑えるため、概ね20年間で再整備を行う。
- ・来園者の利便性向上のための整備を優先的に着手する。
- ・第1期整備（当初10年間）では、「アジア熱帯の溪谷エリア」、「管理運営ゾーン」、「駐車場立体化」の整備を計画予定。（整備順序は基本計画時に検討・決定）

			第1期整備											第2期整備										
年度	H16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37		
基本計画	—										(見直し)													
基本設計		第1次5ヶ年整備分					第2次5ヶ年整備分					第3次5ヶ年整備分					第4次5ヶ年整備分							
実施設計		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
工事			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

VI. 構想イメージ図

ゾーン設定

- センターゾーン**：来園者サービスと環境学習機能の拠点。
- 展示ゾーン**：5つの展示エリアを設定し、展示エリア毎に休息と学習機能をもつガーデンを設ける。
- 管理ゾーン**：管理機能の集中配置により、効率的運営をめざす。

展示ゾーン内のエリア設定

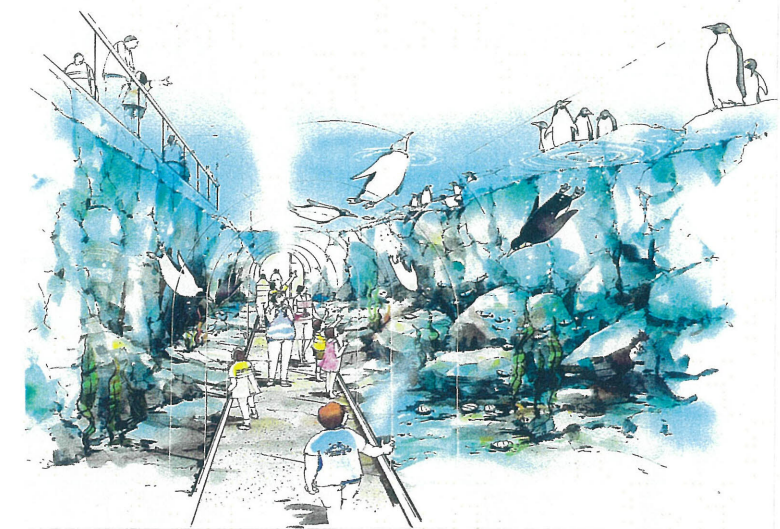
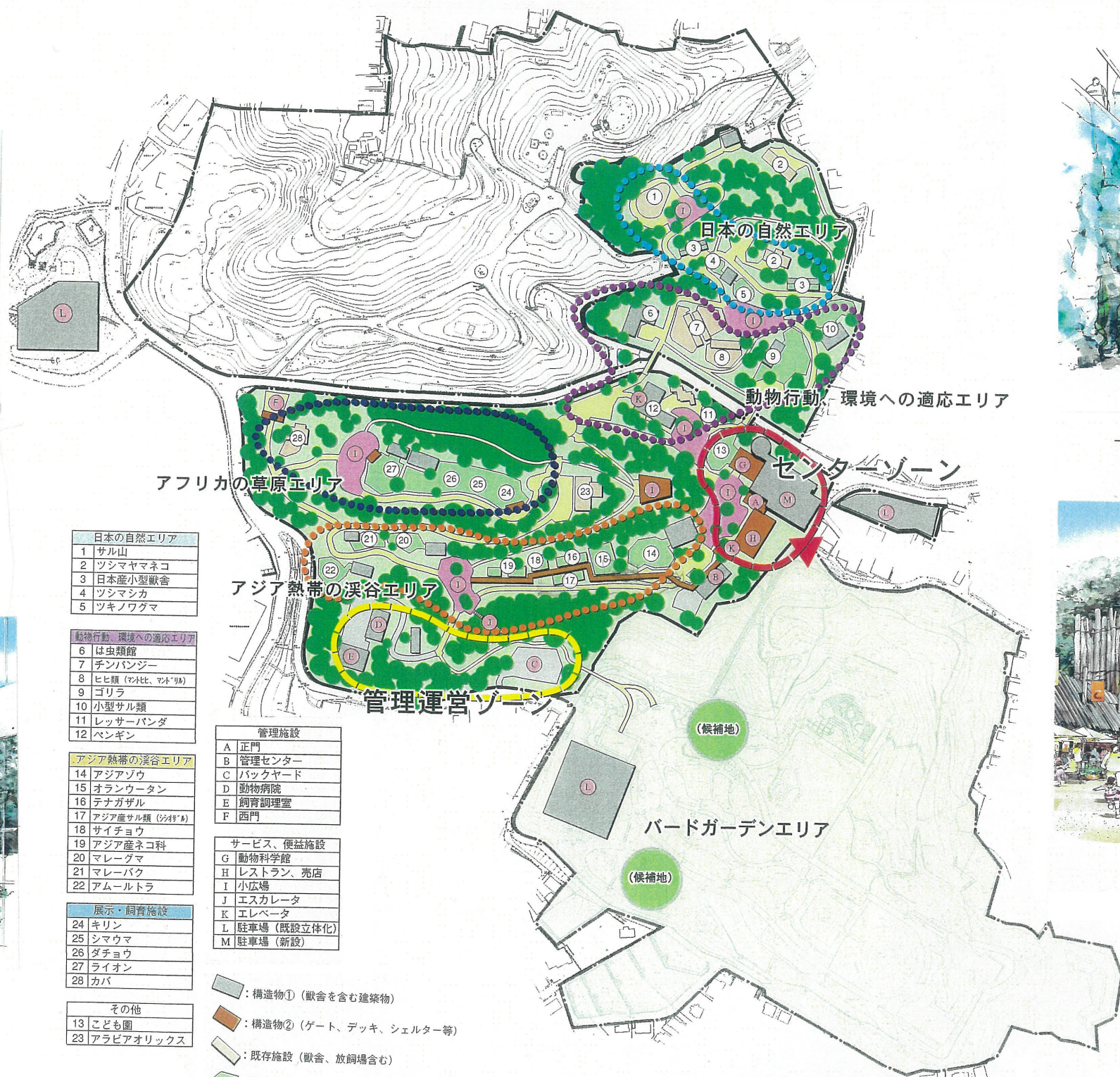
- 生息地別に設定し、エリア全体で生息地雰囲気演出するエリア
 - ・アジア熱帯の渓谷エリア
 - ・アフリカの草原エリア
 - ・日本の自然エリア
- 動物の生物的特性をテーマとするエリア
- 植物と鳥類の美しさをテーマとするエリア（植物園区域）



アフリカの草原エリア イメージ図



アジア熱帯の渓谷エリア イメージ図

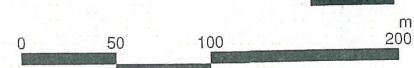


動物行動、環境への適応エリア イメージ図



センターゾーン イメージ図

ゾーニング図（*種選定・獣舎配置は今後詳細検討）



福岡市動植物園再生基本構想検討書

平成16年10月

福岡市



センターガーデン イメージパース



エリアガーデン（アジア熱帯の溪谷エリア） イメージパース



アジア熱帯の溪谷エリア イメージパース



アフリカの草原エリア イメージパース



目次

I. 構想の前提

1. 再生基本構想策定までの経緯	1
(1) 自然動物公園構想の経緯	1
(2) 福岡市政の方向性	1
(3) 福岡市の財政状況	1
2. 「福岡市動植物園再生基本構想」の目的	2
3. 「福岡市動植物園再生基本構想」の計画期間	2

II. 現状及び条件の整理

1. 南公園、福岡市動植物園の現状	3
2. 利用者の声	5
3. 動物園の課題と今後の方向性	5
4. 動物園区域の問題点	6

III. 動植物園再生の基本理念と方向性

1. 再生の基本理念	8
2. 福岡市動植物園の基本的方向性	9
3. 3つの基本的方向性と7つのアクションプラン	11

IV. 動植物園再生基本構想

1. 導入ゾーンの設定	12
2. 展示動物選定の考え方	12
3. 展示テーマの設定	13
4. 展示方法の考え方	14
5. 展示におけるストーリーの考え方	14

V. 施設整備構想

1. ゾーニング、動線	15
(1) ゾーニング及び展示エリア配置計画	15
(2) 動線計画	16
2. 展示施設	17
3. 休養施設	18
4. サービス施設	19
(1) 飲食・物販施設	19
(2) 駐車場	19
5. 管理運営施設	20
6. 希少動物の保護・繁殖に関する施設	20
7. 供給処理施設	20

VI. 管理・運営計画の方針

1. 管理・運営の考え方	21
2. 望ましい組織のあり方	21

VII. 構想推進のスケジュール

1. 事業スケジュール	22
2. 第1段階の具体的整備案	22
3. 第1段階の計画概要図	23
4. 概算工事費	24

VIII. 参考資料

I. 構想の前提

1. 再生基本構想策定までの経緯

(1) 自然動物公園構想の経緯

- 福岡市自然動物公園構想は、世界的な環境保護の潮流や動物園のあり方に関する議論、アジアの交流拠点都市をめざす本市の動物園が果たすべき役割、また、現動物園が抱える課題などを踏まえ、様々な視点から検討・議論を重ねた結果、施設の改善が急務となっている現動物園に代わり、動物の生息地環境の再現を図り、動物を野生に近い状態で飼育・展示し、環境学習機能、野生動物の保護・繁殖機能を有する新たな動物園をつくらうとしたものであった。
- 平成4年に、自然動物公園整備構想委員会からの答申を受け、予定地である地域との調整、基本構想の策定などを進めていたが、平成11年度から始めた市の大規模事業点検において、当該構想には多額の事業費が想定されるため、財政上の観点から再検討することとした。
- そして、平成11年度から3年にわたってさまざまな見直しを進めてきたが、厳しさを増す財政状況や既存資源の有効活用などの観点から、平成14年8月、これを中止し、現在の動物園を再生することとした。

※詳細は、参考資料「1. 自然動物園構想の概要」参照

(2) 福岡市政の方向性

- 今、我が国の社会経済情勢は、少子高齢化、地球規模の環境問題、経済・財政状況の厳しさなど、急激に変化しており、戦後日本の成長を支えてきた社会経済システムが、新たな段階へ転換しつつある。また、社会の成熟化などを背景として、精神的豊かさや「ゆとり」といった人間性の回復が求められ、個人の価値観、生き方にまで変革のうねりが押し寄せている。
- このような変革の時代を迎え、平成15年4月に策定した福岡市基本計画では、「自由かつ達で人輝く自治都市・福岡をめざして～九州、そしてアジアの中で～」をテーマとし、新しい福岡づくりに向け、市民参画のしくみづくり、市民の自発的な活動の支援、市民・NPO・企業・大学など、様々な主体との共働、人・モノ・情報の交流の促進、おもてなしの心あふれる快適で魅力ある美しいまちづくり、世界に開かれ未来に伸びゆくまちづくりなどに取り組んでいくことを唱っている。

【福岡市動植物園再生基本構想の策定に関わると考えられる福岡市基本計画のキーワード】

- * 豊かな心や多様な個性と創造性をもった子どもたちの育成
- * アジアの都市・地域との交流・連携
- * 環境に配慮した、新エネルギーの導入、省エネルギーの徹底、循環型システムづくり
- * 行政運営への市民参画のしくみづくり
- * 市民、NPO、企業、大学、行政による共働
- * 蓄積された社会資本や民間活力などの活用、新しい知恵やノウハウの導入
- * 専門性を有する職員の開発、民間の専門家の機動的な活用
- * 柔軟な運営、効率的な管理、サービスの充実・向上

(3) 福岡市の財政状況

- 今、市税収入は、景気の低迷や地価の下落、デフレの進行が続くなか、減少傾向にあり、将来の伸びも見込めない状況にある。
- 一方、歳出は、生活基盤や都市機能の整備のために発行した市債の償還や、少子高齢化の進行に伴う扶助費など、硬直性の高い義務的な経費が大幅に増加しており、今後もこの傾向が続くのは避けられない見通しである。さらに、市債残高は依然として増加しており、平成15年度末では1兆2,789億円になる見込みである。
- このような厳しい経済・財政状況が続くなか、今後も社会経済情勢の変化や市民ニーズに的確に対応し、新しい行政需要に対応していくためには、これまでの経済発展を前提とした発想を転換し、蓄積された様々な資源を最大限に活用しながら、事業の「選択と集中」を図っていくこと、限られた財源をより効率的・効果的に配分することが重要となっている。

2. 「福岡市動植物園再生基本構想」の目的

- 福岡市動物園は、平成15年8月に開園50周年を迎えた。福岡市では、これからの50年に向けて、動物園を中心とした動植物園の整備・運営に関する基本的なあり方について検討し、「福岡市動植物園再生基本構想」を策定する。
- その中で、動物の飼育・展示環境の狭隘性や園路が急なことなど、現施設が抱えるさまざまな課題の改善や、絶滅の危機に瀕している希少動物の保護・繁殖など、これからの動物園に求められる新たな役割への対応を図り、市民がより親しみ楽しめる、新しい時代にふさわしい動植物園への再生をめざす。

「福岡市動植物園再生基本構想」の目的

社会経済情勢の変化や福岡市政が目指すべき方向性を踏まえた上で、

現施設が抱える課題の改善

動物園に求められる新たな役割への対応

を検討し、福岡市動植物園の整備・運営のあり方を提示する。



本構想の検討範囲

本構想では、動物園の再生を中心に検討するものであるが、動物園機能の部分的な拡張、動植物園の運営上の連携や機能の融合などの可能性を含め、必要な場面では、植物園や一般公園区域を含む南公園全体であり方を検討する。

3. 「福岡市動植物園再生基本構想」の計画期間

- 再整備工事に伴う長期間の閉園については、市民の理解を得ることが難しいことから、開園・営業しながら徐々に再整備工事を進めることが必要である。また、敷地面積の制約から仮設獣舎を設けられず、新設獣舎への動物の玉突き移動を順番に行っていかなければならないことを考慮すると、再整備工事の完了には長期の年月が必要となる。
- そのため、本基本構想の計画期間を、概ね20年と設定する。

Ⅱ. 現状及び条件の整理

1. 南公園の中の福岡市動植物園の現状

(1) 南公園の概要

南公園の概要	
種別：	総合公園
面積：	294,799m ² (計画決定面積 30.2ha)
主要施設：	動物園、植物園、展望台、散策園路 等
開設年：	昭和 16 年

動物園の概要

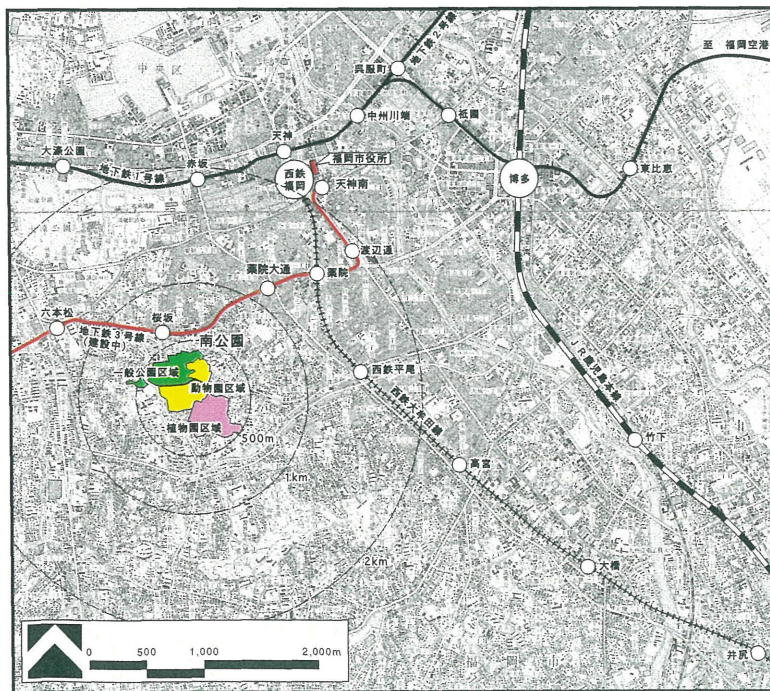
特色：	檻・柵型展示を主体とした総合動物園
面積：	103,203m ²
主要施設：	動物展示施設、動物科学館、遊戯施設、レストラン、売店、動物病院 等
開設年：	昭和 28 年 (今年度で開園 50 年)

植物園の概要

特色：	大花壇や温室、各種見本園等を備える総合植物園
面積：	111,287m ²
主要施設：	花壇、バラ園、生け垣見本園、灌木花木園、温室、緑の情報館、展望台、レストラン 等
開設年：	昭和 55 年 (今年度で開園 23 年)

動植物園の営業内容

開園時間：	9 時～17 時
休園日：	月曜日 (祝日の時は翌日)、年末年始 (12/29～1/1)
入園料：	大人 400 円、高校生 200 円 (中学生以下、障害者の方、市内居住の 65 歳以上の方は無料、30 人以上の団体は 2 割引)
駐車場：	普通車 500 円、中型車 1,000 円、大型車 2,000 円 (1 日単位)

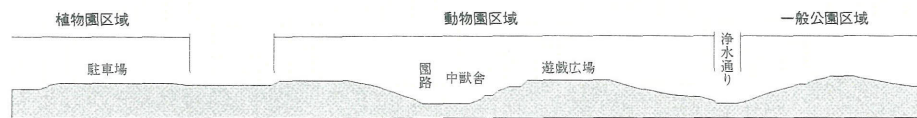


南公園の位置図

(2) 動植物園の敷地特性

[地形]

- ・3つの丘とその丘に挟まれた谷状部分により形成された、比高約42mの急峻な地形。
- ・現況園路は谷状部分と丘の等高線を沿うように設定。



尾根と谷が重なる急峻な地形 (動物園南北方向の断面)

[植生]

- ・丘の斜面部分が常緑広葉樹の大木で被われている状況。
- ・園内は、都会では得難い豊かな緑量を感じられる反面、昼間でも薄暗く動物や来園者に日照が行き渡らない等の弊害あり。

[景観 (外景観)]

- ・斜面地の常緑広葉樹による緑のマスは、都市部のまとまった緑の景観として重要。
- ・最も人の目に触れやすい浄水通りに面する部分では、コンクリート構造物が違和感のある人工的な景観を露呈。

[景観 (内景観)]

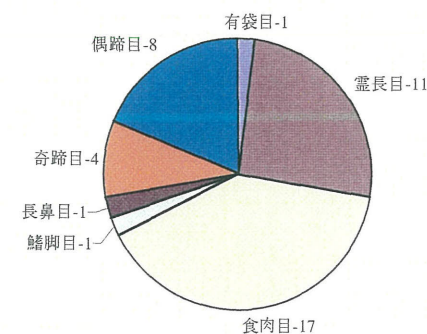
- ・薄暗いほどに成長した常緑広葉樹の樹林と、檻とコンクリートによる人工的な展示施設により、薄暗く狭い印象。
- ・園路の見通しが利かないため、順路が分かりにくいなどの弊害あり。
- ・豆汽車周辺と遊戯施設周辺は、園内の数少ない平坦地で、明るい開けた景観。

(3) 動物園の飼育・展示動物

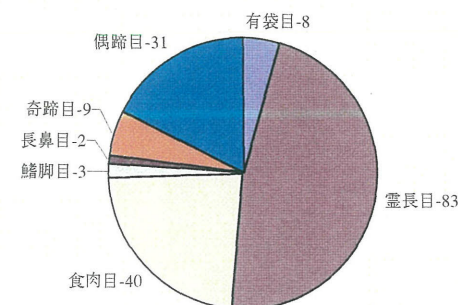
平成 15 年 5 月末現在、動物園では 160 種 672 点の動物が飼育・展示されている。

分類	動物数	種数	点数
哺乳類		49	259
鳥類		89	324
は虫類		22	89
合計		160	672

種数の構成



点数の構成



哺乳類、種数・点数の目別構成 (中～大型動物のみ、数値はそれぞれ種・点数を表す)

※詳細及び他園との比較は、参考資料「2. 動物園の飼育・展示動物」参照

(4) 動植物園の利用動向

- ・平成 14 年度の動植物園利用者数は、679,021 人。
(うち有料入園者 253,771 人、無料入園者 425,250 人)
- ・月別利用傾向は、春と秋に来園者が集中する 2 期型の利用パターン。
- ・曜日別利用傾向は、休日に集中する利用形態。
(日曜日が圧倒的に多く (33.5%) 次いで土曜日 (19.2%))
- ・中学生以下等無料入園者は、全体の約 63%。
- ・年間入園者数の推移を見ると、植物園開園とパンダの展示が重なった昭和 55 年をピークに下降傾向が止まらず推移。

※詳細は、参考資料「3. 動植物園の利用動向」参照

(5) 動植物園の経営状況

- ・経営状況は慢性的に悪い状況にあり、新規施設の建設費等の臨時支出を除いた収支は、毎年 9 億弱の赤字。(H 9～13 年度の収支率平均＝0.165)
- ・収入の内訳で最も多いのは入園料で、全体の 7 割以上を占めている。
- ・支出の内訳では人件費 (臨時職員含む) が 4 割程度を占めている。

※詳細は、参考資料「4. 動植物園の経営状況」参照

(6) 社会的条件

[法規制]

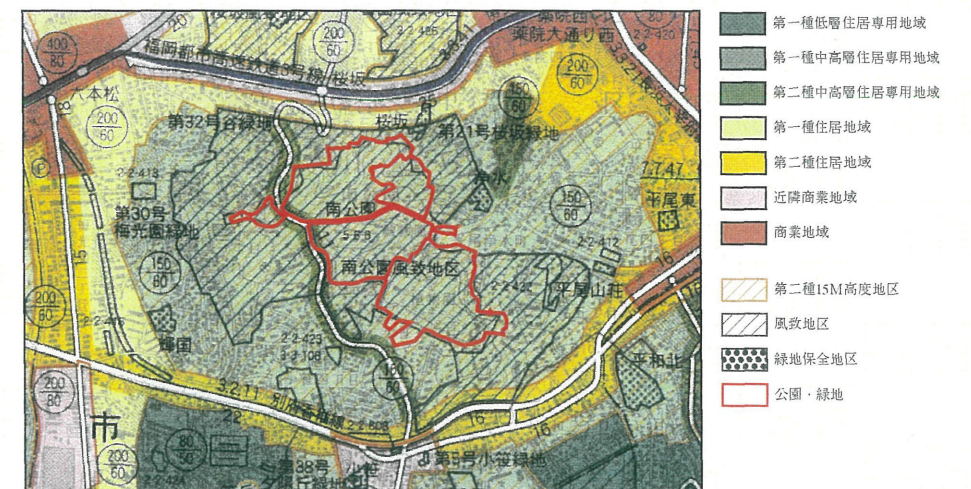
- 南公園全域および周辺地域は、都市計画 (用途地域) において第一種中高層住居専用地域に指定。(建ぺい率 60%、容積率 150%)。
- また、第二種 15 M 高度地区および風致地区にも指定されており、北側隣地境界における高さ制限 (高度地区) や、建築、宅地造成、木竹の伐採が制限される (風致地区)。

[風致地区における建築物の制限]

高さ：15 m、建ぺい率：10 分の 4 以下、外壁後退：道路界 2 m 以上隣地界 1 m 以上

[周辺土地利用]

- 南公園周辺は、マンションおよび一戸建住宅等による住宅街が形成されている。
- 周辺には南公園以外にも樹林が多く残り、都心部において緑豊かで閑静な環境となっている。



計画地周辺の都市計画 (用途地域等)

南公園現況図



動物園施設

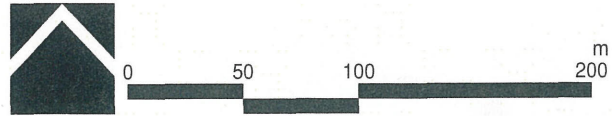
展示・飼育施設	
1	サル山
2	マントヒヒ
3	バーバリーシープ
4	ヤマアラシ
5	ツシマヤマネコ
6	キョン
7	サイチョウ、オウム
8	シロサイ
9	ダチョウ、シマウマ
10	放鳥舎
11	ゴリラ
12	マレーバク
13	チンパンジー
14	キリン
15	マレーグマ
16	ペンギン
17	シロクマ
18	レッサーパンダ
19	極楽鳥
20	オタリア
21	ガン、ハクチョウ
22	アジアゾウ
23	オランウータン
24	テナガザル
25	は虫類館
26	中獣舎
27	中獣舎
28	中獣舎
29	小獣舎
30	トラ、ライオン
31	中型猛禽類
32	小型猛禽類
33	シカ、トカラウマ
34	コウノトリ
35	カバ
36	ラクダ、ラマ
37	動物科学館
38	ワシ、コンドル
39	カンガルー
40	ゾウガメ
41	ヒツジ、ヤギ
42	クジャク
43	アラビアオリックス
44	ツル
45	インコ
46	ヒクイドリ、エミュー

管理施設	
A	動物園事務所
B	サービスセンター
C	飼育管理センター
D	動物病院
E	西門

遊戯施設	
F	豆汽車
G	遊戯施設

サービス、便益施設	
H	売店
I	レストラン
J	トイレ

※ 26：現況高さ



2. 利用者の声

(利用者アンケート「平成15年5月20日～25日実施」より)

(1) 利用者属性

- ・ 回答者の約半数は親子連れの家族。
- ・ 家族連れやカップルを構成する20代、30代の利用（それぞれ22%）が多い。
- ・ 60代以上のシニア世代の利用（23%）は、20代、30代と同程度となっている。
- ・ グループの構成人数は、2～5人がほとんどを占め（81%）、小グループでの利用が大半を占めている。
- ・ 市内、近郊市からの利用が大半を占め（82%）、身近な動植物園として利用されている。
- ・ 自家用車による来園（60%）が中心となっている。
- ・ 徒歩等による来園（徒歩、自転車、バイク：11%）も目立ち、近隣からの利用が一定量存在している。
- ・ 利用者の大半は近郊からで、1時間以内の時間で来園している。
- ・ 遠方ほど自家用車の利用率が上がり、また休日の自家用車の利用率が高い。
- ・ 休日は遠方からの利用が若干多くなるが、大きな変化はなく、やはり近隣からの利用が中心となっている。

(2) 動植物園の利用状況

- ・ 来園の目的は、動植物を見ることとしている人が約半数（54%）を占め、「動植物園」としての利用が中心となっている。また、のんびりする、なんとなくぶらりと、健康づくり、など公園的な利用をしている人々の比率（20%）も多い。
- ・ 遊園地を来園の目的としている人は少なく（1%）、計画地に来園する上での目的施設とはなっていない。
- ・ リピーターの数が多く（年1回以上：73%）、このことから近郊利用型の動植物園であることがうかがえる。
- ・ 訪問先地して、動物園を上げる人が若干多く、動植物園を満遍なく利用している人の比率が低い（14%）。
- ・ 滞在時間は、3時間までの人が大半を占めている（75%）。

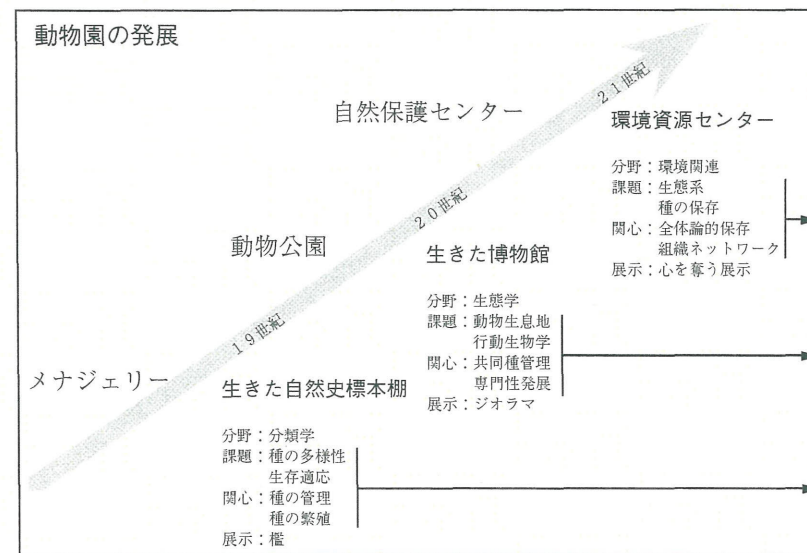
(3) 動植物園への意見・要望

- ・ 動物園の良かった点として、一般的な人気動物を上げる人が多く、動物園の一般的傾向を示している。また、豆汽車（第7位）以外の遊具は、総じて人気が低い。
- ・ 動物園の良くない点として、急坂と駐車場の少なさを上げている。
- ・ 植物園の良かった点として、主要施設となる大花壇、バラ園や温室、庭木園を上げる人が多い。
- ・ 植物園の良くなかった点としては、動物園同様の結果が出ているが、地形条件の違いから、急坂の比率が下がっている。

3. 動物園の課題と今後の方向性

(1) 動物園の課題

- 現代の動物園の社会的機能は、レクリエーション、教育、自然保護、調査研究の4つであった。
- しかしながら、近年の地球環境問題の拡大やそれに伴う市民意識の高まりが、動物園のさらなる変化を要求。近年では“環境教育”と“種の保存”という2つの大きな使命が掲げられている。
- 1980年に出版された「世界環境保全戦略」（IUCN, UNEP, WWF 1980）では、野生動物を飼育することに対する原則と勧告が述べられているが、この中では、野生動物を飼育するには、適切な方法によりその種の持つ役割が理解される場合のみ正当性があり、種の入手は、生息地内の野生動物に影響を与えず、十分に飼育管理に注意し、国際的な協力によりこれらのことを達成することが望まれている。
- 動物園の国際的組織である世界動物園機構では「世界動物園保全戦略」（WZO-IUDZGB, CSG of IUCN/SSC 1993）の中で、21世紀の動物園の進むべき方向として、動物だけにとらわれない広い視野を持った“自然保護センター”の考え方を提示している。



動物園の発展（「世界環境保全戦略」より）

21世紀の動物園は、動物中心の考え方から自然環境全般を意識した発想が求められており、従来の身近で楽しいレクリエーションの場という機能を維持しつつ、地球環境保全に資するための活動の場となるが必要となっている。

(2) 先進動物園の傾向

[多様なレクリエーションの場となる動物園]

先進動物園では、身近で楽しいレクリエーションの場であるとともに、自然や動物のテーマパークとして整備。生き生きとした動物たちと出会い、様々な仕掛けがあり、子どもから大人まで家族で楽しめるとともに、自然や動物について楽しく学べ、憩える場となっている。

[市民参加型の動物園]

市民が自分たちの動物園として、動物園を身近な存在として感じられるよう、ガイドツアーや解説員へのボランティアとしての参加、整備や運営に対する市民の寄付など、様々な形で市民参加が行われている。また、企業によるスポンサー制度も活発に取り入れられている。

[“動物”主体の展示から“動物＋生息地環境”主体の展示を行う動物園]

地球環境時代にふさわしい動物園として、動物だけではなく、その動物を取り巻く自然（生息地環境）を含めた展示が行われている。多様な植物や擬岩等を用いて、動物の生息地の風景を擬似的につくり出し、観る者の想像力を高めるとともに、動物たちとその生息環境との関係を理解できるような展示が行われている。

[動物が幸せに過ごせる動物園]

飼育されている動物の体の健康だけではなく、心の健康までもを含めた豊かな飼育環境を整備することが進められている。広い飼育舎や運動場、動物が遊ぶための遊具の整備、エサを得るために努力が必要な装置・給餌方法の導入、植物やジャングルジム等により空間的複雑さをつくり出すなど、様々な工夫が取り入れられている。

[希少種の保護・繁殖に取り組む動物園]

動物園で飼育されている多くの動物は、絶滅の危機に瀕しており、先進的な動物園では、世界の動物園と協力し、希少種の保護・繁殖や、野生への復帰を目指す、種の保全のための活動を進めている。

[地球環境を考える動物園]

動物や自然の仕組み、環境問題への興味が沸き、考え、理解できるよう、展示面での工夫とともに、サインやガイドツアー、多彩なイベント、様々な学習プログラムや解説員の配置などによって、動物の生態や、環境破壊が動物にもたらす影響など、動物を見るだけでは読みとれない情報を提供している。

※詳細は、参考資料「5. 利用者アンケート」参照

※現代動物園までの歩みについては、参考資料「8. 動物園の歴史」参照

4. 動物園区域の問題点

(1) 利用者の視点から見た問題点

※次ページ図参照

[歩きづらい]

- ・急峻な地形を縫うように配置された急勾配な園路は、高齢者や身障者、ベビーカー利用者等にとっては非常に歩きづらい。
- ・鬱蒼とした樹林やカーブの多い園路では、先が見通せず展示順路も分かりにくい。
- ・案内板も十分整備されているとは言い難い。

[園内でゆっくりできない]

- ・夏の炎天下や急な雨の時に休む場所が少なく、疲れたときにゆっくりできる場所が少ない。
- ・お弁当を広げる広場なども少なく、一日のんびり過ごすことができず動物を見ることだけに終始。

[自動車で来づらい]

- ・公共交通機関はバスに限られるが、休日の利用人数に比べると駐車場の台数が少ない。
- ・駐車場待ちの時間を考えると自家用車で来園することを躊躇してしまう。

現況駐車場の利用状況

通年（311営業日）				日曜・祝日（67日）			
動物園駐車場		植物園駐車場		動物園駐車場		植物園駐車場	
満車日	141	71	41	満車日	57	45	32
満車日率	45%	23%	13%	満車日率	85%	67%	48%
				平均満車時刻	10:16	11:13	11:37

[植物園との一体的利用がしづらい]

- ・隣接する植物園は、同じ入園料で楽しめるが、植物園までの道のりが遠くて急勾配なため、一日で両方を利用することが難しい。

[展示が魅力的でない]

- ・狭い敷地に無理に配置された動物展示施設は、檻や柵で仕切られたコンクリートの箱形建屋が多く、魅力に欠ける。
- ・動物の動きにもストレスや異常が感じられ、見ていて楽しくない。
- ・動物の配置もテーマ性に欠ける。

[レストラン、売店が魅力的でない]

- ・画一的なメニュー・商品とサービスの質が、魅力に欠ける。

[知る意欲や参加する気持ちに応える施設、プログラムが用意されていない]

- ・動物を見ることによって育まれる、動物や自然環境についてもっと知りたい欲求に応えるための、施設や機会が用意されていない。

(2) 動物の視点から見た問題点

[飼育室、放飼場が狭い]

- ・産室や予備室がない飼育室や狭い放飼場では、健康的で繁殖までを考慮した飼育環境を実現不可能。

[動物がストレスを感じる飼育環境となっている]

- ・檻や柵で仕切られたコンクリートの箱形建屋や、十分な広さのない放飼場では、野生環境における動物本来の行動や群内でのコミュニケーションを十分行うことができず、動物にストレスを与える環境となっている。

[健康管理施設が不十分である]

- ・治療、解剖、検疫を行う動物病院や、傷病獣の入院、飼育を行う施設が狭く、動物の十分な健康管理が行えない。



左：正門入ってすぐの急坂 右：北園の入り組んだ園路



左：待合い場所や日除けのない入口広場 右：お弁当を食べるスペースがない広場



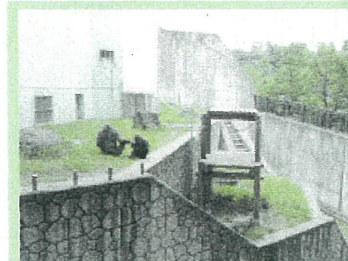
左、右：動物園と植物園を結ぶ唯一の園路、坂がきつく薄暗い



左：単調な展示の中獣舎 右：動物を見下ろす（動物の背中しか見えない）



左：休憩所、軽食堂 右：売店



左：隠れるところや遊具のないパドック 中：単調で狭いパドック 右：動物病院、狭い上に2階建てで使い勝手も悪い



(3) 管理運営者の視点から見た問題点

[動物園と植物園の組織が分離している]

- ・一つの有料施設として管理されている動物園・植物園管理事務所が別組織・別建物となっており、運営上の連携が十分図られていない。
- ・運営上の類似機能が重複しており合理的な組織形態となっていない。

[管理諸施設が狭い]

- ・管理事務所や作業バックヤード（工作所、ゴミ集積所 等）の面積が狭く、充実した管理運営が困難。

[将来に不安の残る糞尿処理方法となっている]

- ・農家への引き取りとなっている糞尿処理方法では、持続的な処理に対して不安。

[不十分な安全管理となっている]

- ・園外周の逃亡防止フェンスの不備や、安全に作業するには十分でない猛獣飼育舎の狭さなど、万が一の時の安全管理が不十分。

[入園料に偏った収入源、赤字経営となっている]

- ・収入源は入園料に偏重しており、年間約9億円の赤字（動植物園）。

[希少動物の保護・繁殖への対応が不十分である]

- ・ツシマヤマネコについては、保護繁殖への取組みが成果を挙げているが、その他については、希少な野生動物を飼育している施設として、十分な保護・繁殖への対応が行われていない。

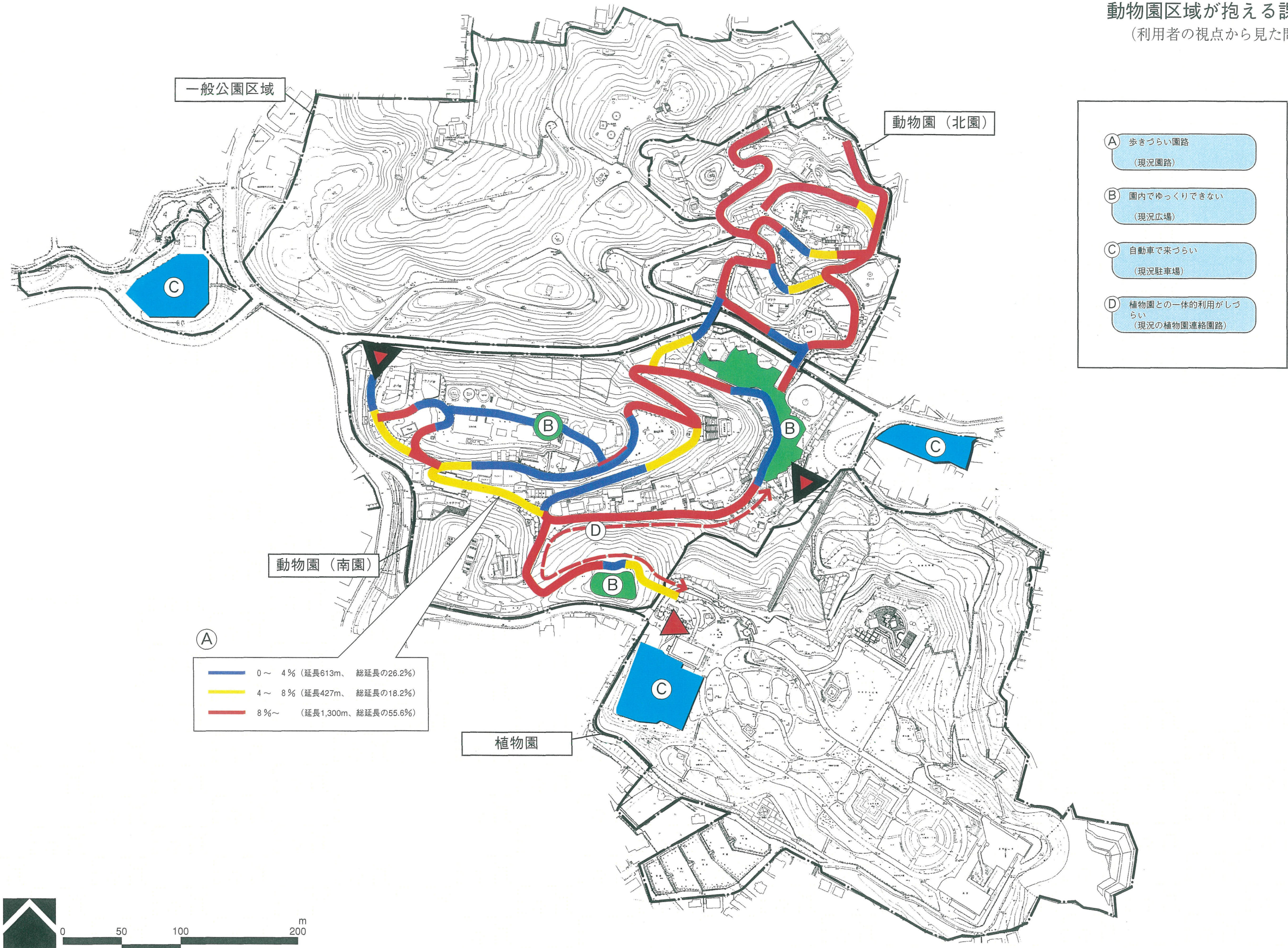
動物園区域で飼育している絶滅危惧種

（ワシントン条約で絶滅のおそれがあるとされている種及び国内希少野生動植物種）

ツシマヤマネコ※	ヒョウ	ホオアカトキ
ゴリラ	アジアゾウ	フンボルトペンギン
オランウータン	シロサイ	オジロワシ
チンパンジー	マレーバク	アンデスコンドル
マンドリル	アラビアオリックス	シロビタイムジオウム
ダイアナモンキー	レッサーパンダ	オオバタン
シロテテナガザル	マレーグマ	ニホンコウノトリ
トラ	ニホンツキノワグマ	キンミノバト

※印は、国内希少野生動植物種を示す

動物園区域が抱える課題 (利用者の視点から見た問題点より)



Ⅲ．動植物園再生の基本理念及び方向性

1．再生の基本理念

[基本理念]

21世紀・人と動植物の共存をめざして

福岡市動植物園再生基本構想の策定にあたっては、福岡市自然動物公園構想の基本理念である「21世紀・人と動植物の共存をめざして」を継承するものとする。

[考え方]

- 福岡市自然動物公園構想は、世界的な環境保護の潮流や動物園のあり方に関する議論、アジアの交流拠点都市をめざす本市の動物園が果たすべき役割、また、現動物園が抱える課題などを踏まえ、様々な視点から検討・議論を重ね、平成9年3月に構想された。そして、21世紀、さらに遠い未来まで、人も動物も植物も地球のかけがえのない一員として共存し続けることを骨子として「21世紀・人と動植物の共存をめざして」を基本理念として掲げた。
- 福岡市自然動物公園構想については断念せざるを得なかったが、その背景にあった精神や理念は今日でも色褪せるものではなく、福岡市の動物園が目指すべき理想を的確に表現しており、現動物園の再生においても、尊重すべき精神であり、理念であると考えられる。
- よって、福岡市動植物園再生基本構想の策定にあたっては、福岡市自然動物公園構想の基本理念である「21世紀・人と動植物の共存をめざして」を継承するものとし、現動物園のあり方を検討していく中でその具現化を目指す。
- なお福岡市自然動物公園構想では、動物園が果たすべき役割として、
 - ・ 広域的リクリエーションの場
 - ・ 環境学習と自然体験の場
 - ・ 生息地環境再現の場
 - ・ 国際交流の場

背景

・ 少子高齢化の急速な進行や、環境問題の地球的広がりなど、社会経済情勢の大きな変化
 ・ 社会の成熟化などを背景とする、個人の価値観・生き方の大きな変化

・ 豊かな心や多様な個性と創造性をもった子どもたちの育成、また精神的豊かさや「ゆとり」といった人間性の回復が求められている。
 ・ 真の豊かさの意味を問い直し、地球環境に配慮した暮らしの実現が求められている。
 ・ 市民の自発的な活動の支援、また行政経営における市民参画のしくみづくり、市民・NPO・企業・大学など様々な主体との共働が必要となっている。

福岡市動植物園が果たすべき役割

・ 市民が、動植物たちと出会い・ふれあい、楽しみ・安らぐ場
 ・ 市民が、自然や動植物とのつきあい方・楽しみ方を、学び・体験する場、地球環境について考える場
 ・ 市民が、様々なかたちで活動、参加する場
 ・ 野生動植物を守り、育む場

基本理念

21世紀・人と動植物の共存をめざして

2. 福岡市動植物園の基本的方向性

① 動物園がめざすべきあり方（課題）

誰もが、いつでも・快適に・楽しく利用できる動植物園へ

利用しづらい園路や、やすらぎや休息の空間となる広場の不足、容量の足りない駐車場など、市民が動植物園を利用するうえで障害となっている課題を改善し、なおかつ動植物園で行う様々な企画や動植物園の今を伝えるニュース等の情報発信を積極的に行う事により、誰もが、快適に、楽しく利用できる動植物園へと再生する必要がある。

様々な場面で市民参加を受け入れる動植物園へ

ガイドボランティアなど、運営への参加をはじめ、様々な場面での市民参加の機会を増やすとともに、市民オーナーシップ創設など、自分たちの動植物園として、市民の愛着が育まれるような動植物園へと再生する必要がある。

動物の側に立った発想を持った動物園へ

貴重でかけがえのない野生動物を飼育している責務を受け止め、飼育下にある野生動物の幸福な暮らしを真剣に考え、また、自然界の野生動物群が健全に生き続けられるために果たすべき役割をも考える動物園へと再生する必要がある。

地球環境を感じ、考える動植物園へ

身近な生活から自然や生きものの気配が失われ、大きくは地球環境の危機が叫ばれている現状を踏まえ、生きている野生動物を飼育する動物園として、これら野生動物を媒介としつつ、動物や自然のみならず、地球環境についても「市民に何を伝えるか」を考え、植物園と連携しつつ様々な視点から情報を提供する動植物園へと再生する必要がある。

効率的で健全な運営を行う動植物園へ

これからの動植物園のあるべき姿をめざし、市民ニーズや新しい役割に的確に対応していくために、厳しく先の見えない財政状況を踏まえ、蓄積された資源やノウハウを最大限に活用しながら、効率的かつ効果的に施設の整備・維持、組織の整備・運営を行う動植物園へと再生する必要がある。

② 福岡市動植物園に与えられた条件

立地条件

- ・ 「アジアの交流拠点都市」をめざす福岡市の中心部に位置する都市型の動植物園である。
- ・ 南公園（総合公園）の中に位置し、動物園と植物園が隣接している。

地形条件

- ・ 丘陵地に位置し、動物園の敷地面積約 10ha のうち、平坦地は 4 割程度。
- ・ 全体的に急峻な地形となっており、最大高低差は約 40m。
- ・ 福岡市の緑の骨格を形づくる豊かな樹林がある。

利用者アンケート

- ・ 市民に身近な動植物園として公園的な利用がなされており、リピーターも多い。

③ 底流をなす再生の基本理念 (福岡市自然動物公園構想理念の継承)

21世紀・人と動植物の
共存をめざして

④ 福岡市動植物園の3つの基本的方向性

驚き、楽しみ、学び、
活動できる動植物園

動物と植物が一体となった
空間づくりと運営

福岡の地域性や南公園の
敷地特性を活かしたテーマ設定

楽しさ・よろこび創出のために Enjoyment

驚き、楽しみ、学び、
活動できる動植物園

- 動物種の個々の行動特性に応じた環境をつくって動物の生き生きとした行動を引き出し、また、見せ方を工夫することにより、来園者に驚き・感動・発見・楽しさ・よろこびをもたらす展示・運営を展開する。
- 目の前の展示からの感動・発見を通して、また、市民に様々な体験・学びの機会を提供することによって、動植物への興味、ひいては野生動物との共生・環境・生態・生命への理解を促し、環境教育機能の発揮をめざす。
- 市民が様々なかたちで動植物園の活動・イベント等に参加できる機会を提供し、市民が愛着を持って“我々の動植物園”と感じられる、市民に開かれた運営をめざす。

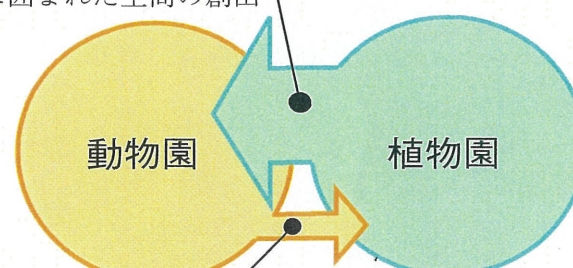
個性創出のために Originality

動物と植物が一体となった
空間づくりと運営

- 動物園、植物園が隣接するメリットを活かし、動植物園の融合を大きな特色とした再生を図り、動物・植物の本来のあるべき姿や生態的なつながり、より快適で楽しい雰囲気が感じられるような新しい発想の動植物園づくりを目指す。

[動植物園融合のイメージ]

- 動物園全体に植物を積極的に導入し、動物園区域の全面的な動植物園化を図る。
 - ・ 動物展示への植物の導入
 - ・ 豊かな植物に囲まれた空間の創出



- 植物園の機能を確保しつつ、動植物による効果的な展示を植物園区域へ部分的に導入しながら、動植物園化を図る。
 - ・ 植物展示と融合し相乗効果を高める動物（鳥など）の導入等

植物園の評価とあり方

来園者アンケート結果によると、各園の利用者層には違いが見られる等、植物園へのニーズは確実にある。

今後、融合にあたっては、花々による修景や都市緑化の啓発等、現在の機能を維持しながら、市民の憩いの場としての機能を一層向上させるため、植物展示と融合し、相乗効果を高める動物（鳥など）の導入など、新たな魅力の創出を図ることが求められる。

福岡らしさ創出のために Locality

福岡市の地域性や南公園の
敷地特性を活かしたテーマ設定

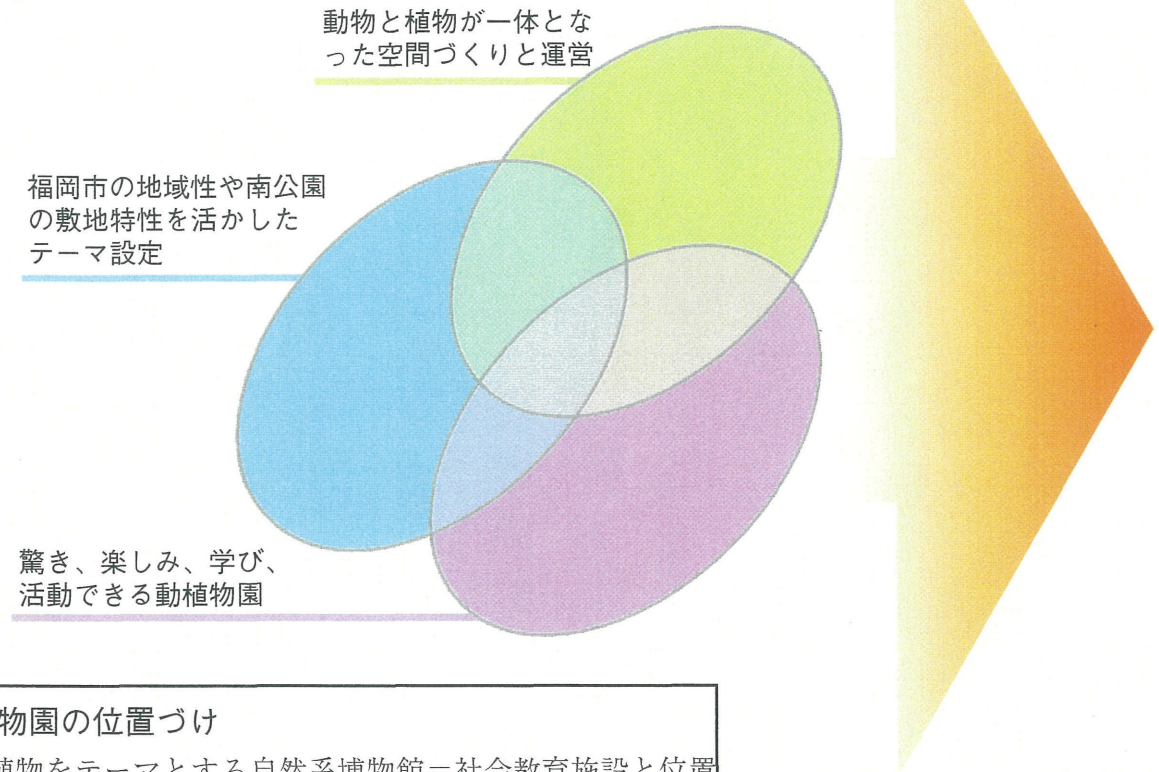
- アジアの交流拠点都市をめざす福岡市の動植物園として、展示動物の選定や、グローバルな視点で取り組む環境教育や種の保存については、アジアを意識したテーマ設定を行う。
- 福岡と対馬の近接性を活かして、これまで取り組まれ、成果を挙げてきたツシマヤマネコの保護・繁殖活動を、引き続き福岡市動植物園の種の保存の中心的取り組みとして、継承・発展させていく。
- 高低差のある地形や豊かな樹林を活かすことができる、立体的な施設づくり、動植物が一体となった施設づくりを行うことにより、動物が本来持つ自然な行動を引き出したり、自然の中での動物たちとの出会いを演出する。

3. 3つの基本的方向性と7つのアクションプラン（再生の方向性）

～21世紀・人と動植物の共存をめざして～

今後、新しい福岡市動植物園の理念やビジョンを
分りやすく表現する愛称やキャッチコピーを市民
から募集する。

福岡市動植物園の3つの基本的方向性



福岡市動植物園の位置づけ

生きた動植物をテーマとする自然系博物館＝社会教育施設と位置付ける（動物園は、昭和30年に博物館相当施設（文部省告示第108号に指定されており、その後、昭和55年に動植物園として、展示物及び名称の変更がなされている）。

※経営の考え方

社会教育施設と位置付けることから、経営的には独立採算まで追求しない。
ただし、厳しい財政状況を踏まえ、動物サポーター制度など入場料以外の収入対策を講じ、現在の収支率（16.5％）の向上（目標＝20％）をめざす。

再生の方向性
（7つのアクションプラン）

再生内容（例）

1. 多様な展示手法の導入

- A 豊かな樹林や高低差のある地形を活用した展示施設の導入
- B 生息環境の雰囲気伝える展示や環境エンリッチメントなど、多様な展示手法を導入

- C 植物を様々な場面に活用し、個性豊かな展示を展開

※環境エンリッチメント
動物の心身の健康を維持し、ストレスを和らげるために行われる、遊具の導入等、飼育環境を豊かにする手法

2. 歩きやすく快適な園内環境の整備

- D エレベータ・エスカレータ等によるバリアフリー化
- E 園内にバランス良く配置された、休憩のための小広場の設置

- F ユニバーサルデザインに基づいたわかりやすいサインの導入

運営面 ガイドやヘルパー（ボランティア）による学校団体等への案内や、観覧が不自由な方へのお手伝い

3. 来園者サービスの向上

- G 民活等の導入により、充実したサービスを提供するレストラン売店の統合・再配置
- H 立体化や新設などによる、駐車場の増設

運営面 市民の参加したいニーズに応えるためのボランティア活動等のサポート

4. 飼育環境の改善

- J 飼育環境改善のため、飼育舎の拡張や、環境エンリッチメントの実施

5. 環境学習機能の強化

- K ボランティア活動や環境学習の拠点としての機能を付加し、動物科学館を再生・拡充

運営面 環境学習施設としての機能強化を図る教育啓発部門の新設

6. 希少動物の保護繁殖への取り組み

- L 希少動物の保全活動の現状と取り組みを訴えるツシマヤマネコを活かしたシンボル展示の設置

7. 運営管理の充実

- M 動植物園の融合を図り、管理機能を集約する総合管理事務所の設置
- N 飼育管理機能を最適化する、バックヤードの統合拡充と再配置
- O 糞や水のリサイクル等、環境に配慮した処理施設の導入

- P 園全体の安全性向上を図る外周柵の再整備

運営面 柔軟な資金確保が図れる、里親（サポーター）制度などの導入や料金体系の再構築

運営面 動植物園の融合を図り、合理的運営を進めるため、動物園と植物園の組織体系を再構築

具体的対応策

- 動物数を削減しゆとりを創出（2割程度削減）
- 飼育舎・放飼場の拡張（1.5～2倍拡張）
- 立体的な施設づくりによる敷地の有効利用
- 遊戯施設の整理・縮小

IV. 動植物園再生基本構想

1. 導入ゾーンの設定

(1) センターゾーン

来園者の入退園機能や、正門として必要となる駐車場、バスロータリー、レストラン・売店、用具貸し出しコーナーなどのサービス機能、動植物科学館、こども園などの環境学習機能などを集中し、アクションプランで掲げた「来園者サービスの向上」「環境学習機能の強化」を図る拠点ゾーンとして設定する。(環境学習機能のソフト展開や、その展開を図る上で必要となる動植物科学館に導入する諸機能・諸室については、参考資料P資21～資22を参照)

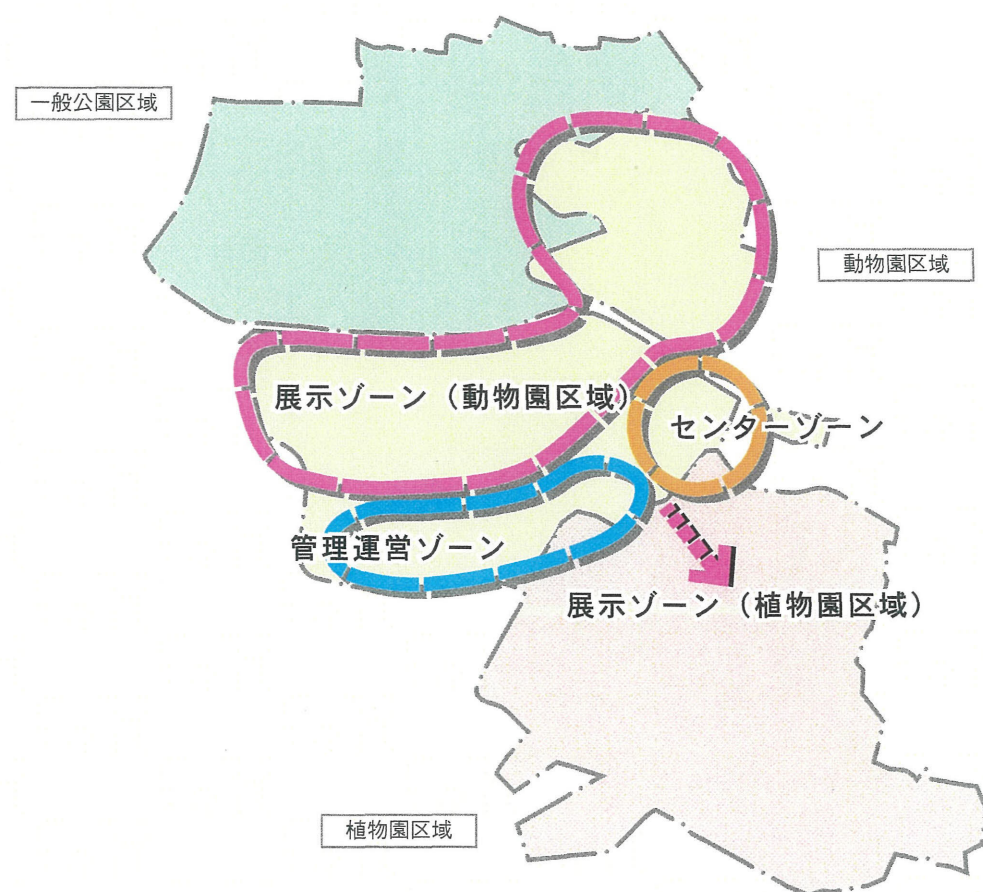
(2) 展示ゾーン

従来から動物展示を行っているエリアを、本構想でも展示ゾーンとして位置づけ、再生の方向性にふさわしい展示内容へ再生する。

また、ゆとりある動物飼育環境の実現や、植物展示との融合をより積極的に図るため、植物園区域の一部も展示ゾーンとして設定する。

(3) 管理運営ゾーン

拡充が望まれる動物病院、調理棟、糞・ゴミ処理施設、工作室などに加え、作業ヤードや管理用車両駐車場などにフレキシブルに利用できるバックヤード的スペースなどを集中的に配置し、管理機能や連携の強化、効率的でリサイクル可能な運営を目指す。



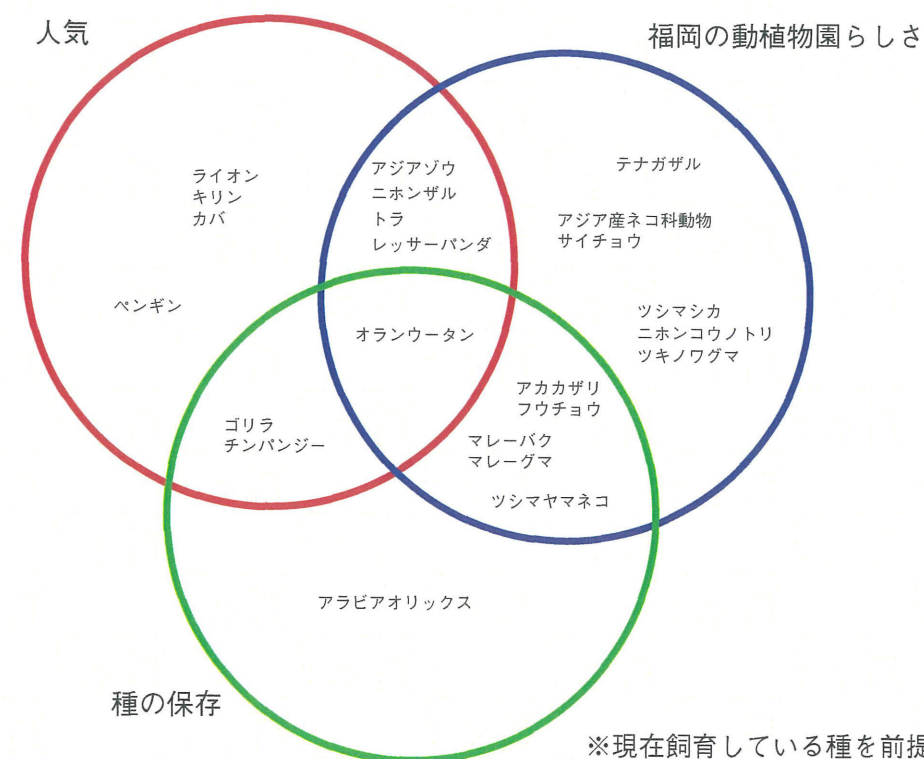
ゾーニング図

2. 展示動物選定の考え方

(1) 展示動物の種の選定に関する基本的な考え方

● 動物種の選定方針を以下の通り定める。

- 市民に親しまれている動物を展示するという視点から、利用者アンケートの結果などを参考に、ゾウやキリンなど人気の高い動物については、地形や面積の許す限り優先的に選定する。
- 高低差のある地形や豊かな樹林がある「福岡の動物園らしい」動物を展示するという視点から、急峻な地形に適応した動物や樹上で生活する動物、アジア・日本・九州の動物を優先的に選定する。
- 国際的な希少種の保存に関する活動に貢献するという視点から、本市動物園が種の保存に関わっている動物、今後その役割を担うべき動物については、優先的に選定する。



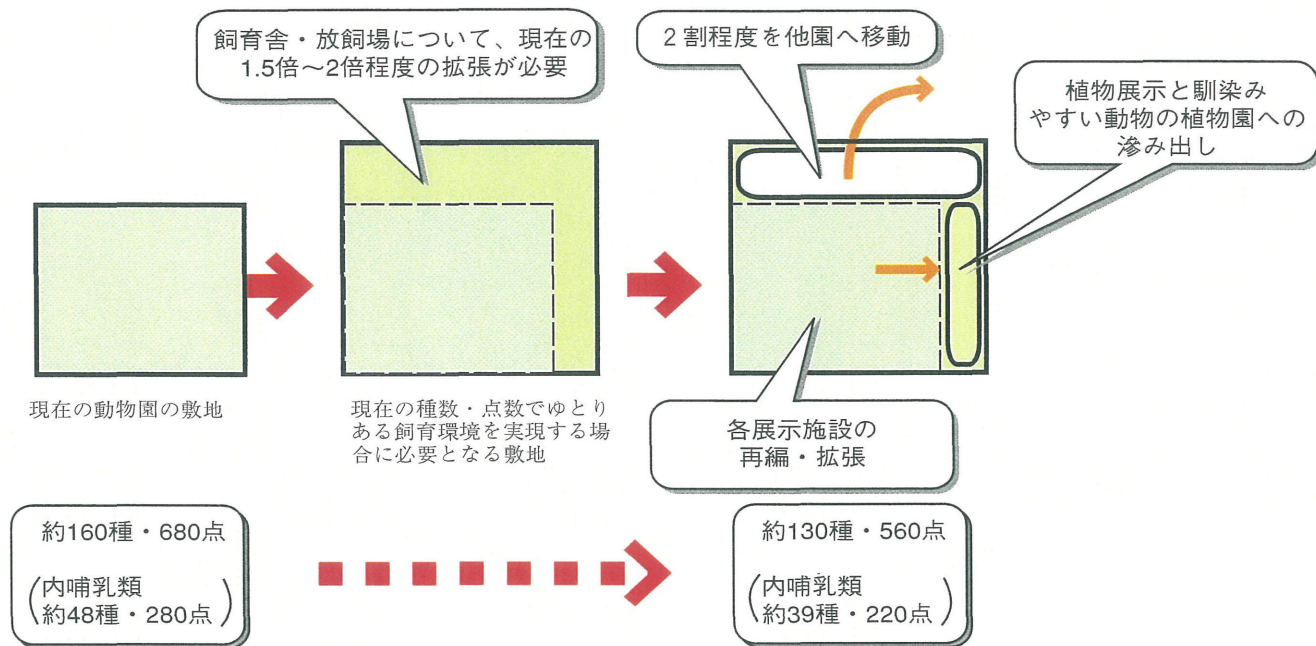
※現在飼育している種を前提に選定した例

展示動物選定の考え方模式図

- 尚、P2に示す計画期間のとおりに、再整備工事の完了には、長期の年月が必要となるため、具体的な展示動物の選定にあたっては、現在の飼育動物種の状態（年齢、飼育点数等）や施設の新しさ・古さにはこだわらず、あるべき姿を検討する。

(2) 展示動物の種数・点数に関する基本的な考え方

- 飼育舎や放飼場の再整備にあたって、魅力的な展示、動物の健康や繁殖に配慮した展示を実現するため、現施設に比べ1.5倍から2倍程度の面積拡張を行う。そのため、現在の動物園の敷地のみでは対応できなくなることから、鳥類など、植物園展示と融和しやすい動物の植物園への移転を行い、併せて、2割程度の飼育動物については、他園への移転を検討する。



展示動物の種数・点数の考え方

- 一般区域への拡張については、検討した結果、次の理由から行なわない。
 - ①一般区域は地形が急峻で園路のバリアフリー対応が困難であり、急勾配で歩きにくい園路をさらに増やす結果となる。
 - ②一般区域は地形が急峻で費用対効果が低い。
 - ③植物園への拡張によって敷地不足が補える。
 - ④良好な自然樹林を伐採しなければならない。
 - ⑤連絡橋を設ける必要があり、良好な緑の道路景観を阻害する。

(3) その他、留意すべき考え方

- 現在飼育している国際親善動物は残す。
- 海の中道海浜公園の動物の森、マリンワールドとの役割分担を考慮する。
- 多くの種が絶滅の危機に瀕している状況から、野生動物を新たに捕獲する必要がある種は避ける。
- 世界の動物園における展示動物供給の状況を長期的な視点から検討することにより、将来、展示動物を維持できるかを十分精査し、維持が困難な種は避ける。

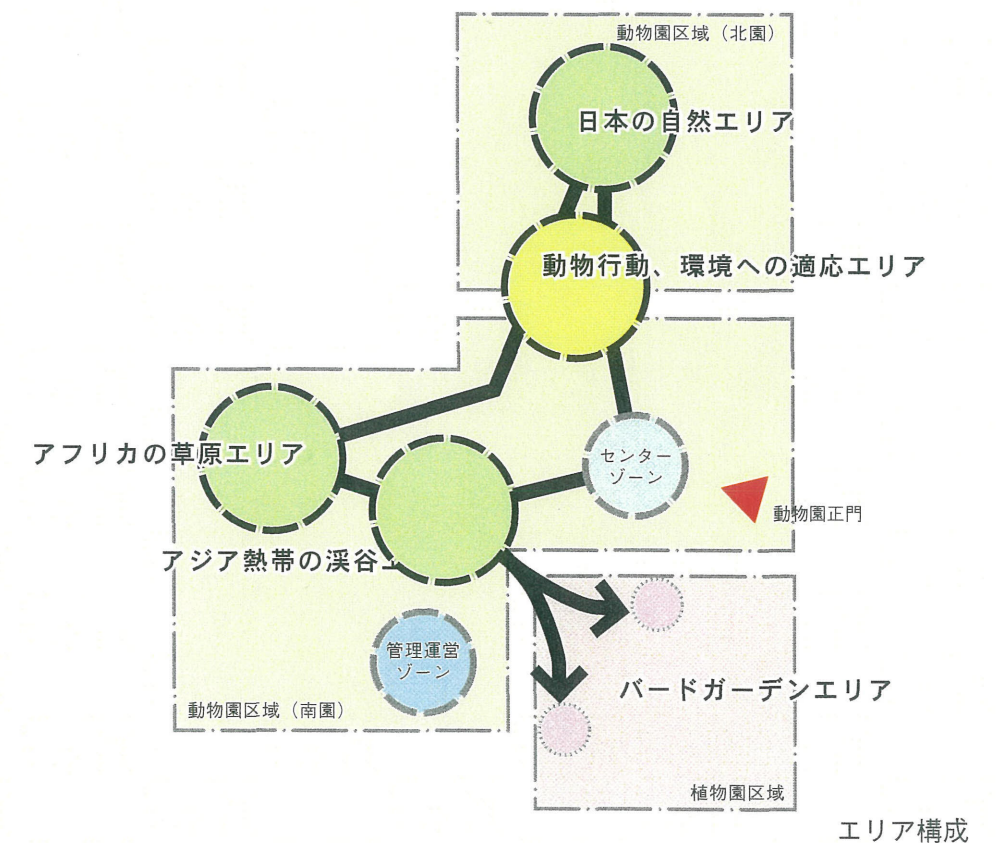
3. 展示テーマの設定

(1) 基本方針

- 自然環境の多様性、動物の行動特性や生息地環境との関わり方などが理解しやすいテーマを設定する。
- 高低差や平面的な広がりなどの地形、豊かな樹林など、計画地の空間特性を最大限活用できるテーマを設定する。

(2) エリア別展示テーマの設定

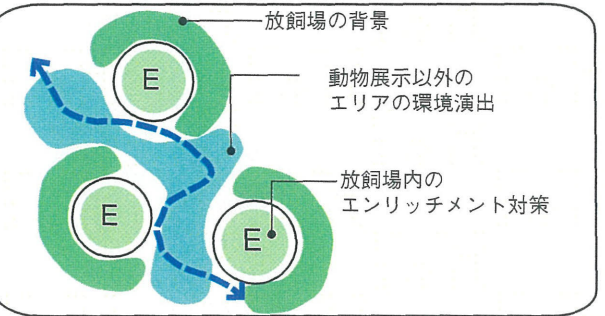
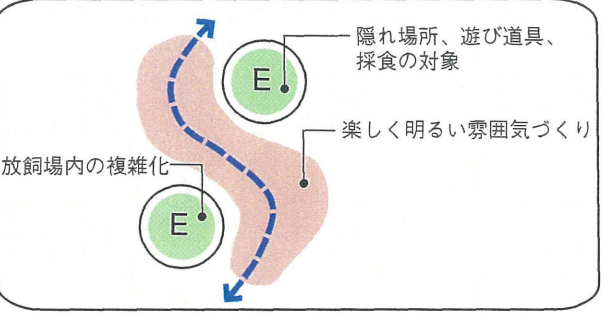
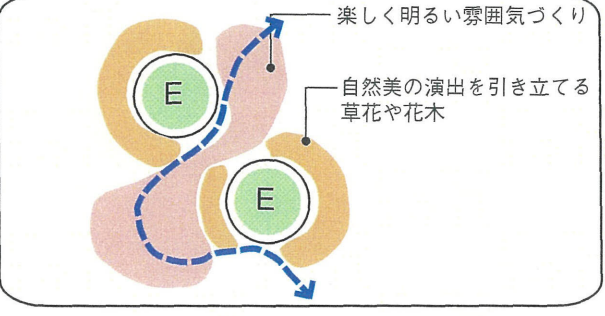
- 主に生息地環境をテーマとするエリア
 - ・アジア熱帯の溪谷エリア
 - ・アフリカの草原エリア
 - ・日本の自然エリア
- 動物の生物的特性をテーマとするエリア
 - ・動物行動、環境への適応エリア
- 植物と鳥類の美しさをテーマとするエリア
 - ・バードガーデンエリア



※ なお、具体的な種および点数については、基本計画において設定する。

4. 展示方法の考え方

本園の展示方法については、動物と植物の融合というテーマ展開の中で、植物と動物をどのように組合せ、何を伝え伝えていくかという展示の目的や手法について、次の表にまとめる。

ゾーン・エリア	展示の目的	展示方法	植物の役割
日本の自然エリア アジア熱帯の溪谷エリア アフリカの草原エリア 動物行動、環境への適応エリア	【生息地環境を見せる】 動物と植物が共存していることを感じとり、その環境が人間の生活と関わりあっていることを知ることで、地球環境に興味を持ち、考える	【環境の雰囲気伝える展示】 生息地環境の雰囲気づくりによって、環境と動物の関わりを示す 【環境エンリッチメント】 風景に違和感をもたらさない素材を用い動物の生き生きした行動を引出す	【生息地環境の雰囲気づくり】 ・ 放飼場の背景 ・ 放飼場内のエンリッチメント対策 ・ 動物展示以外のエリアの環境演出 
	【動物の行動と適応を見せる】 動物の自然な行動や生態を最大限引き出す仕組みを展示空間に取り入れることにより、市民が動物の持つ能力や体の仕組みを理解する	【環境エンリッチメント】 人工的な装置などにより、動物の行動レパートリーを最大限に引出す	【飼育環境を多様化する】 ・ 放飼場内の複雑化 ・ 隠れ場所、遊び道具、採食の対象 【園路沿いの修景】 ・ 楽しく明るい雰囲気づくり 
バードガーデンエリア	【植物と鳥類の美しさを見せる】 植物と鳥類により生み出される美しい空間に浸り、自然環境の「美」の世界を経験することにより、自然へのあこがれや尊さを感じる	【ガーデンとしての演出】 生息地の環境をモチーフに、造園的な修景を凝らすことにより、人間にとって美しく感じるガーデンを創出	【美しさを引立て合う修景】 ・ 放飼場やケージを取り囲んで、美しい鳥類と一体となって自然美を演出する草花や花木 【園路沿いの修景】 ・ 楽しく明るい雰囲気づくり 
センターゾーン 小広場 園路周辺	【ガーデン化した園内を見せる】 植物園で培われた技術を用い、花々に囲まれた美しく快適な空間を園内各所に配置することにより、市民が何度来ても楽しめる	【ガーデンとしての演出】 豊かな花々と樹木に囲まれた、明るいくつろぎ空間を創出	【空間の主役】 ・ 視覚的に人々を楽しませる修景要素として ・ 四季を感じさせ、季節の話題を提供する 【快適な環境を創出】 ・ 緑陰や防風など、快適な休息空間を創出 (E) : 動物展示

5. 展示におけるストーリーの考え方

(1) エリアごとのストーリー

目的：各エリアで設定した生息地の雰囲気をどのように伝えるか？

- 土や岩、植物や水、展示施設と園路との空間構成の工夫、地域の特徴的な意匠を用いたデザインの採用などにより、生息地の雰囲気をエリア全体で演出する。
- エリアの入口・出口に、メッセージ（自然の多様性や大切さ、自然と人の暮らしとのつながりなど）を発信するパネル展示などを配置する。

(2) 各動物ごとのストーリー

目的：自然の中での暮らしぶりや行動特性など動物の持つ特色をどのように伝えるか？

- 動物の自然な動作（立上がる、羽ばたく、泳ぐなど）を引き出すために必要な空間、隠れ家、遊び場などを備えた豊かな空間を構築する。
- 動物の行動の特色を最大限引き出す飼育施設（遊具など）を導入する。
- 特徴的な行動、習性を観察するために最も適した観察ポイントを設定する。

V. 施設整備構想

1. ゾーニング、動線

(1) ゾーン及び展示エリア配置計画



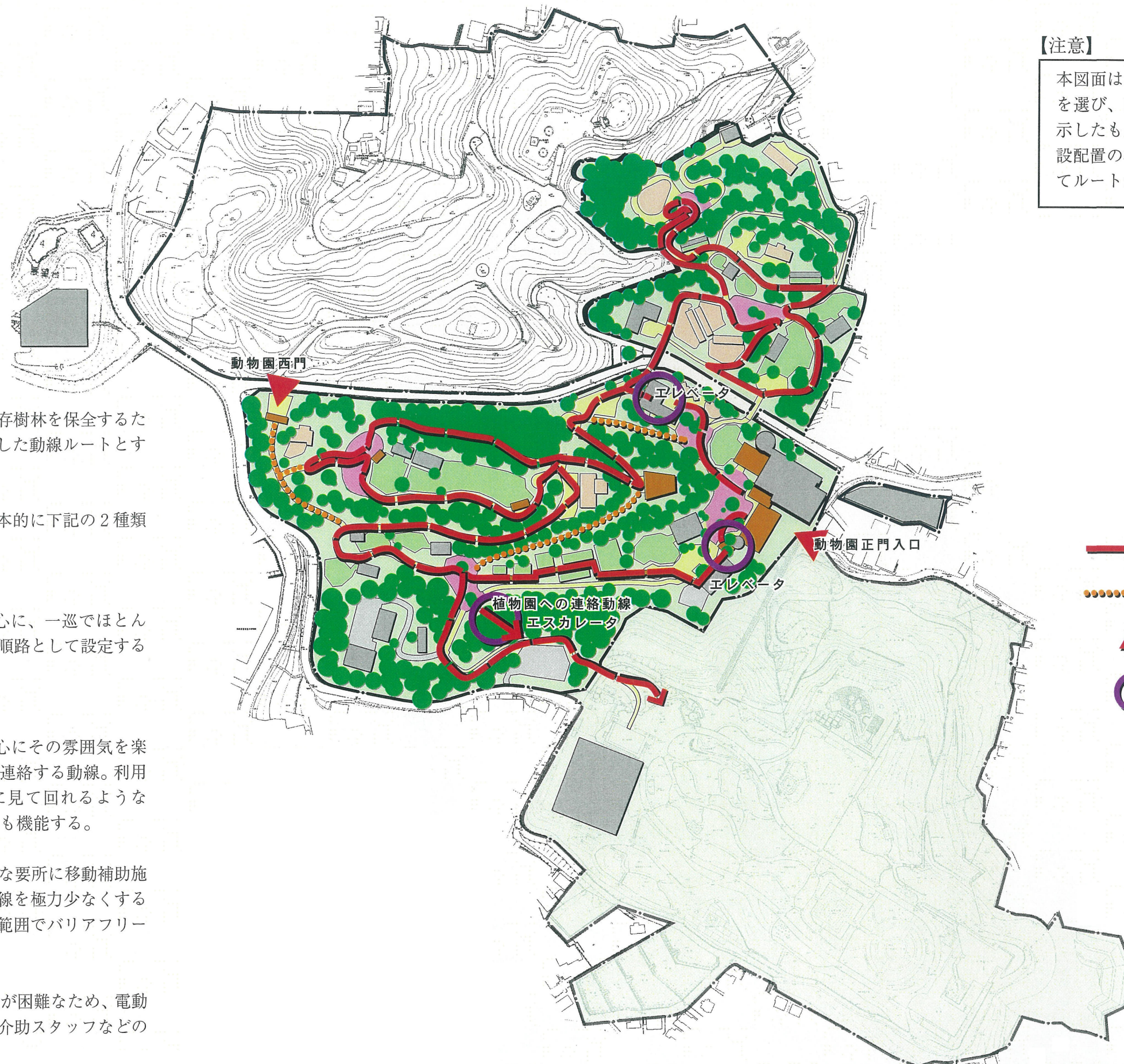
【注意】

本図面は、前述のゾーニング及び展示テーマエリアについて、実際の敷地に当てはめてみたものであるが、図面に表示している各施設は、現在飼育している動物種から仮に種を選び、現地地形に沿って、配置、スペース配分してみた「たたき台」であり、決定事項では無い。従って、今後各施設の検討を重ねる中で、配置が変動することは十分考えられる。

(2) 動線計画

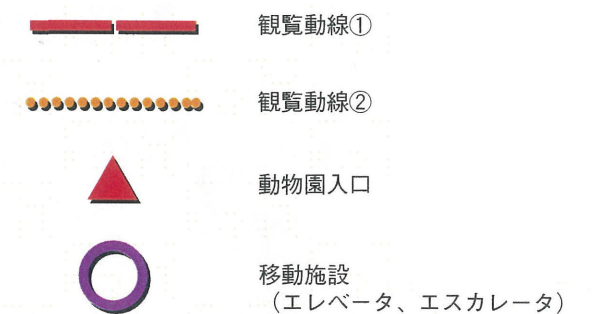
動線配置の考え方

- 大規模な造成を避け既存樹林を保全するため、現況の園路を活用した動線ルートとする。
- 観覧動線の構成は、基本的に下記の2種類を設定する。
 - 観覧動線①：
動物展示の観覧を中心に、一巡でほとんどの動物が観覧できる順路として設定する主動線。
 - 観覧動線②：
植物展示の観覧を中心にその雰囲気を楽しみながら主動線間を連絡する動線。利用者がエリアを選択的に見て回れるようなショートカットとしても機能する。
- 動線上で高低差が大きな要所に移動補助施設を設け、急勾配の動線を極力少なくすることによって、可能な範囲でバリアフリー化を図る。
- 完全なバリアフリー化が困難なため、電動カート、電動車椅子、介助スタッフなどの導入を検討する。

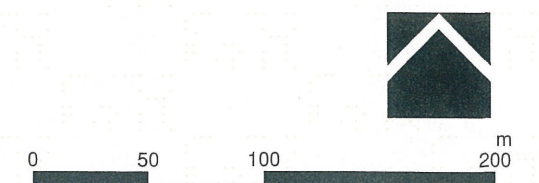


【注意】

本図面は、現在飼育している動物種から仮に種を選び、配置した獣舎を基に、動線の考え方を示したものである。従って、今後獣舎等の各施設配置の検討を重ねる中で、施設配置と連動してルートが変更する事は十分考えられる。



動線計画図



2．展示施設

各展示エリアのテーマ、展示方法及び配置の考え方について次の表にまとめる。

エリア名	テーマ	展示方法	配置
アジア熱帯の溪谷エリア	アジアの自然環境とそこで生息する動物を知り・学ぶための展示として、生物の多様性に富み、特徴的な動物が多く生息する最も魅力的な環境の一つである“熱帯雨林”をテーマとして取り上げる。	「アジアの熱帯雨林」の環境の多様性、そこで生息する動物の行動特性（樹上生活等）等を的確に伝えるため、生息地環境再現型の展示方法を取り入れる。また、樹上の動物との棲み分けや多様な植物環境を伝えるため、水辺の展示も行う。環境再現においては、緑量感を出す常緑樹やヤシ類、ツル性植物等の特徴的な植物を導入し、演出を図る。	緑豊かな森林であり、樹上で生活する動物が豊富に生息する熱帯雨林の環境を表現するため、本園の敷地特性である豊かな樹林や敷地の高低差を最大限活用できる正門西側の谷状地に配置する。
アフリカの草原エリア	人気動物が集中しているアフリカ産動物を集約し、その種と環境との関わりを表現するためサバンナをテーマとして取り上げる。	「熱帯アジアの溪谷ゾーン」とまったく異なる自然環境であるサバンナエリアを、「熱帯アジアの溪谷ゾーン」と比較しながら体感してもらうため、ここでも生息地環境再現型の展示方法を取り入れる。 生息地環境再現においては、マメ科の木本やイネ科の草類を中心に導入し、サバンナの乾燥した雰囲気演出する。	最も平坦地が確保できる現こども園付近にサバンナを配置する。
日本の自然エリア	ツシマヤマネコをシンボルとして、郷土の自然とそこで生息している動物との関わりを展示することにより、身近な自然環境の大切さ、それを守る上での動物園の役割などを伝えることをテーマとして取り上げる。	ここでは、生息地環境を体感するよりも身近な自然の大切さを直接的に訴えかけることを重視し、人による解説やパネル等による説明を、動物展示とともに重点的に取り入れる。	現在、ツシマヤマネコ繁殖施設があり、比較的静かで人為的影響の受けにくい北園北側に配置する。
動物行動、環境への適応エリア	野生動物の運動能力や環境への適応力、形態や行動の特性などを来園者にわかりやすく伝えることをテーマとして取り上げる。	動物の行動特性を考慮し、かつ環境エンリッチメントに配慮した遊具や、様々な適応の姿を解説的に比較しながら展示する方法を取り入れる。	生息地環境再現型の様にまとめたエリアが必要でないため、高低差が大きくまとまった敷地が確保しにくい北園とそこに接する南園北側を中心に配置する。
バードガーデンエリア	植物園における展示をベースに、美しい鳥類と季節の花々、美しい樹林などにより自然の美しさを強調する。	生息地の環境をモチーフとして、造園修景の技術を凝らしたガーデンとしての演出を行うとともに、鳥が生活している自然な姿を観察できるような展示を行う。	新しい市民ニーズに合わせて、今後、植物園全体のあり方を見直すなかで、動物（鳥類）展示の取り入れ方及び配置を、以下のような視点で検討する。 ① 植物と動物（鳥類）が融和した展示ができる ② 植物園の機能を維持・向上できる ③ 動物園からの観覧動線上連続性を持てる ④ 観覧園路のバリアフリー対応が可能である。

※アラビアオリックスについては、上記のいずれのエリアにも属さないが、施設として新しく、また絶滅が危惧されている動物であることから、本構想では、既存施設で継続的に飼育するものとして取り扱っている。

※各エリアの展示イメージについては、参考資料「10. 展示施設イメージ」にて例示

3. 休養施設

(1) 小広場

誰でもが気軽に利用できる快適な展示観覧空間を実現するため、また、季節の花々に囲まれた楽しいガーデン動物園を演出するため、園内各所に小広場を設ける。

小広場は、その機能や配置により、次の3種類とする。

●センターガーデン

動物園エントランス部分となるセンターゾーンに設ける、団体の集合・離散などに活用されるガーデンで、入園時の気持ちの高揚を図る華やかで明るい雰囲気 연출を行う。

(大規模：園内1ヶ所/1000m²程度)

●エリアガーデン

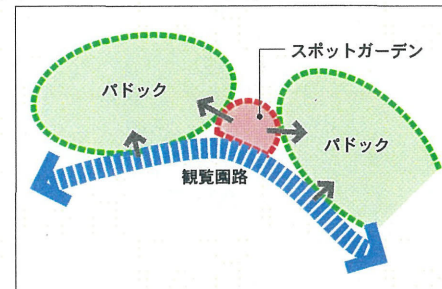
各展示エリアの入口や中央部分に設ける、観覧途中での休憩などに活用されるガーデンで、各エリアの展示テーマにあわせた空間演出や、生息地の植物情報の展示などを行う。

(中規模：園内5ヶ所/600～800m²程度)

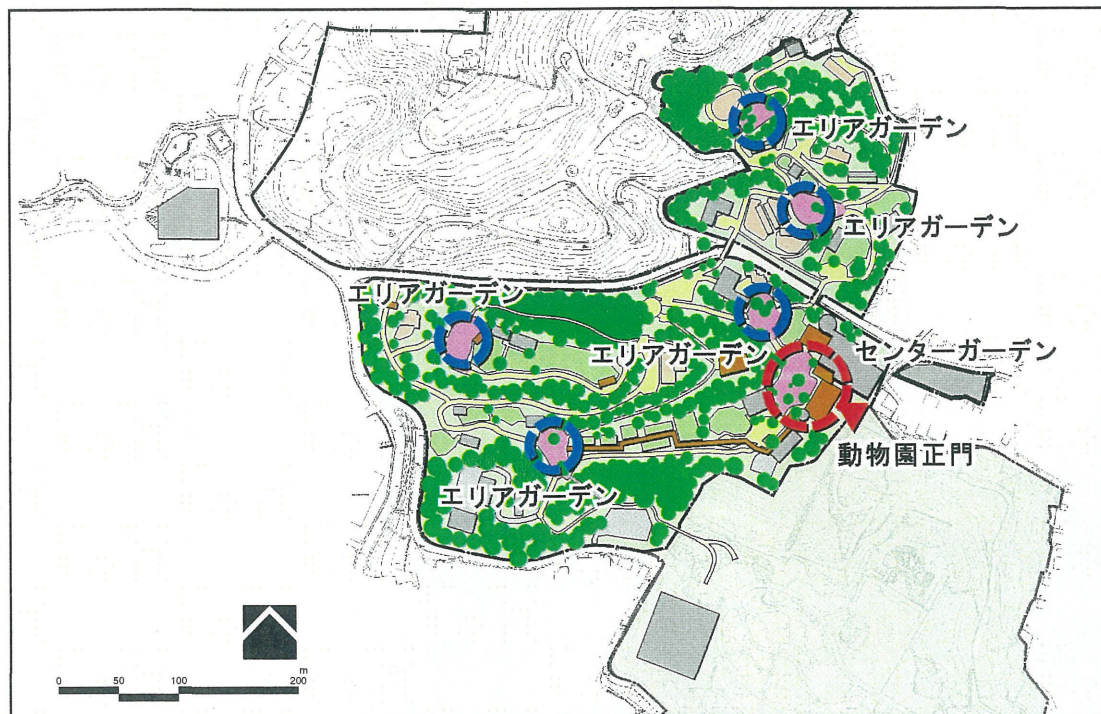
●スポットガーデン

放飼場観覧の途中に設ける、ゆっくり動物を観察したり小休止に活用されるガーデンで、生息地の雰囲気の中の小さな休憩所として、緑陰やベンチ、修景植栽等を行う。また、雨天時の雨宿りの場として利用できるシェルターを適宜設ける。

(小規模：10～15m²程度)



スポットガーデン配置概念図



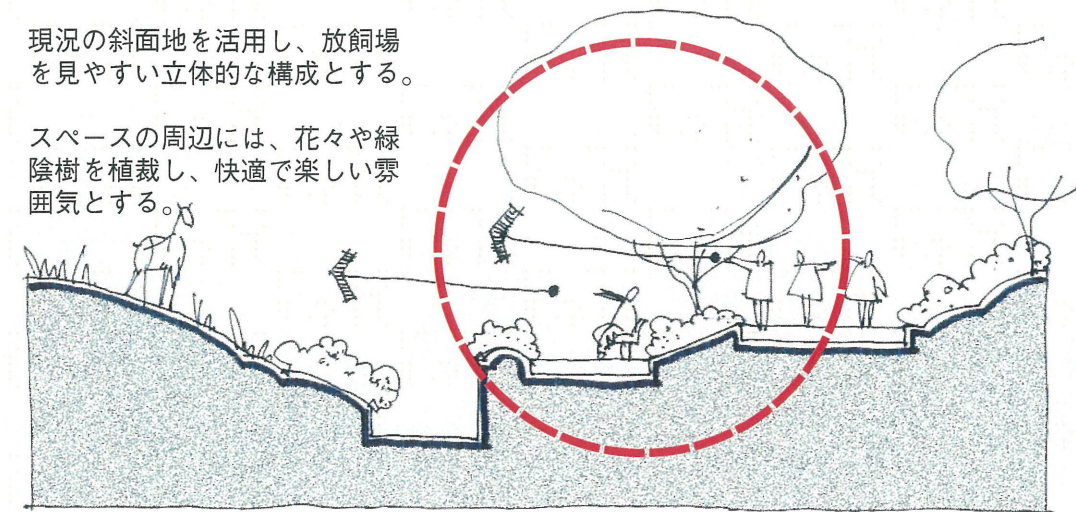
小広場の配置構成

展示イメージ (例)

観覧園路の一部に溜まり空間を設け、緑陰やベンチを備えた中で、動物を近くでゆっくり観覧できる小さなスペースを設ける。

現況の斜面地を活用し、放飼場を見やすい立体的な構成とする。

スペースの周辺には、花々や緑陰樹を植栽し、快適で楽しい雰囲気とする。



展示放飼場

観覧園路

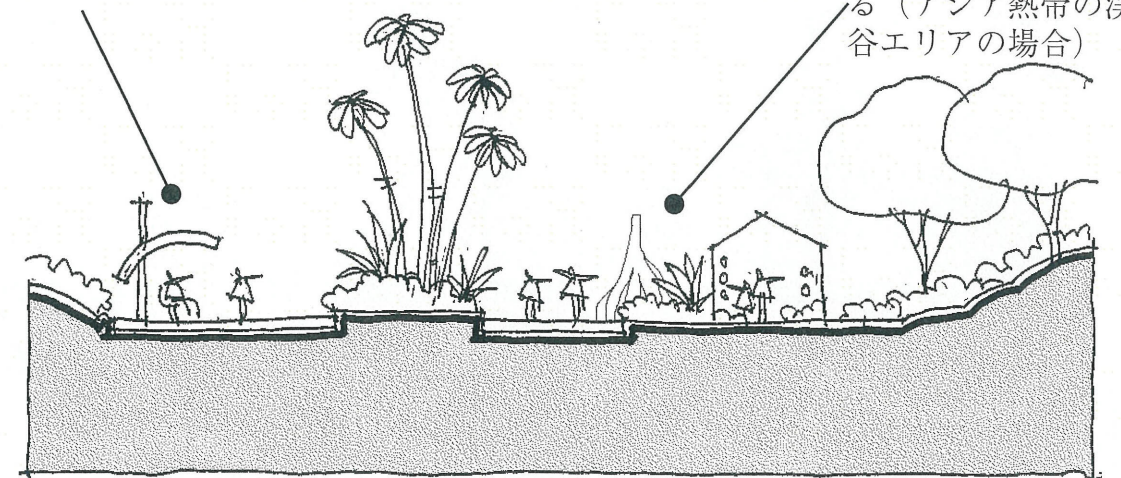
スポットガーデンのイメージ

休憩所

美しい花々を眺めながら休む

エリアテーマに即した植物の紹介

温室や板根のレプリカなどを用い、熱帯特有の植物を紹介する(アジア熱帯の溪谷エリアの場合)

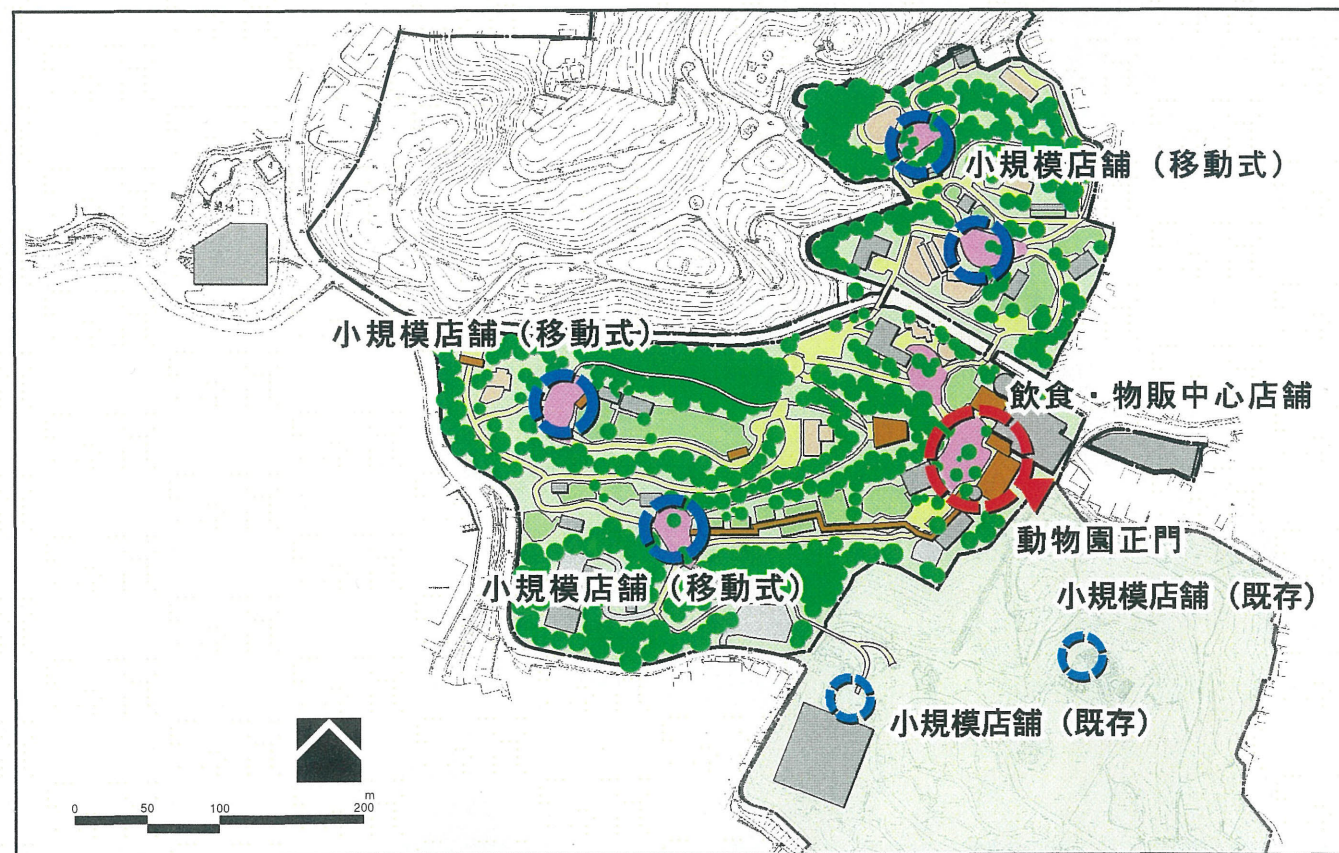


エリアガーデンのイメージ
(アジア熱帯の溪谷エリアの場合)

4. サービス施設

(1) 飲食・物販施設

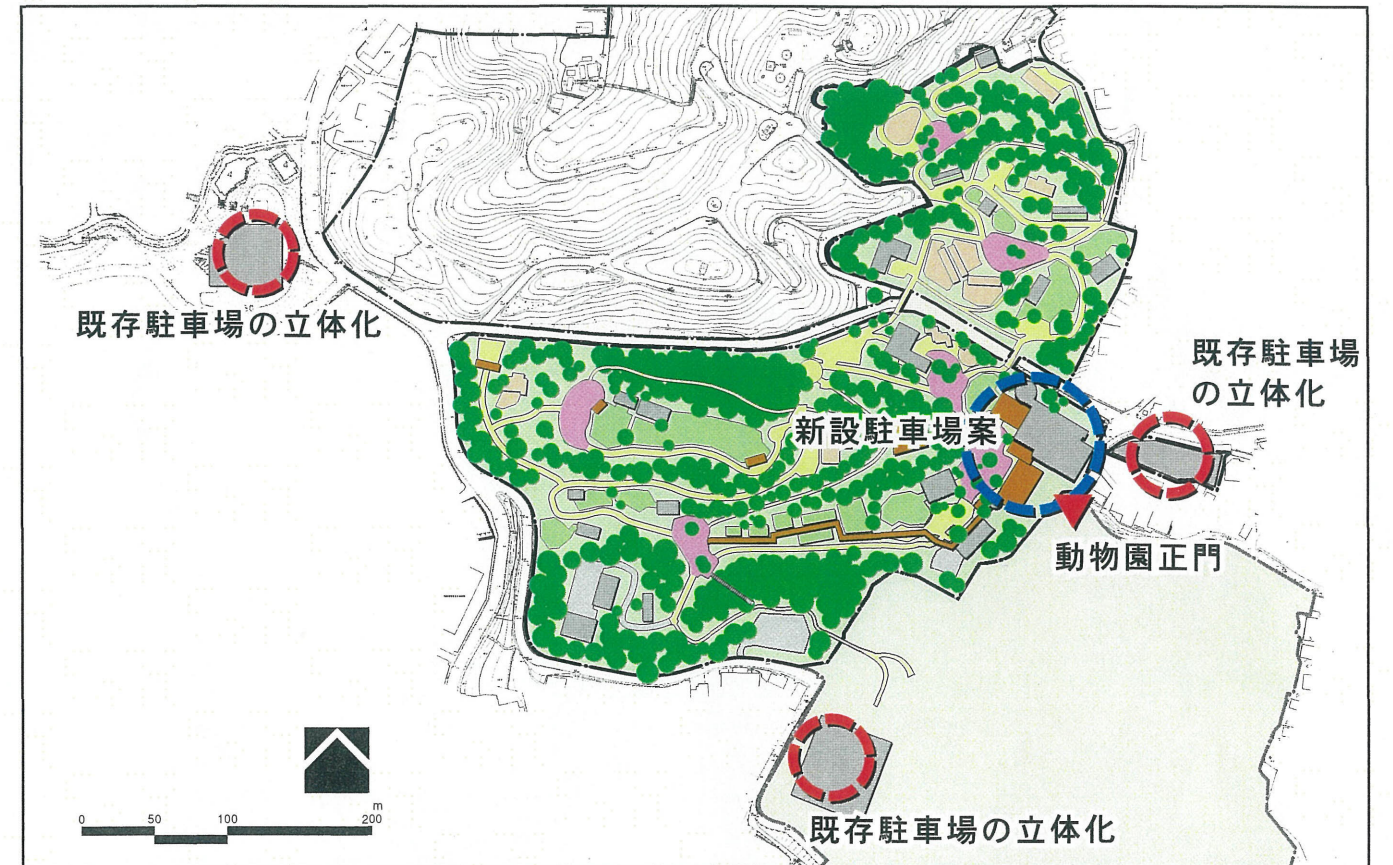
- 中心となる店舗を、利用者が最も集中するセンターゾーンに配置するとともに、園内各所にある小広場（エリアガーデン）に小規模な店舗を設けることにより、利用者の利便性向上を図る。
- 小広場（エリアガーデン）に配置する店舗については、曜日や季節による利用者の増減に柔軟に対応できる様、移動式店舗等を活用したきめ細かいサービスを行う。
- 物販施設における商品構成については、観覧を楽しむ上で便利な雑貨や飲み物などのほか、センターゾーンでは、園内での環境学習等を、帰宅後、再確認できるような、図鑑等、動植物に関わる教育的商品を充実させる。



飲食、物販施設の配置構成

(2) 駐車場

- 現在の駐車場不足を考慮し、費用や敷地が許す範囲内で最大限台数の確保を行う。
- 増設する駐車場の配置等については、周辺の交通状況や、ピーク時の滞留量の把握などを行い、周辺の交通環境に影響を与えないよう配慮する。
- 増設は、3カ所ある現在の駐車場の立体化に加え、新たな駐車場を建設することも含め検討する。また、新設する駐車場については、来園者の利便性を考慮し、できるだけ動線上無理のない配置を検討する。
- 駐車場増設によっても、駐車場は不足するので、公共交通機関の利用促進やシャトルバス等補助的交通機関の導入等、総合的な対策を講じる。



駐車場の配置構成

5. 管理運営施設

- 動植物園の組織の再構築（後述）への対応や、職員の連携強化、来園者サービスの向上をめざすため、現在2カ所に分散している管理事務所を「総合管理センター」として統合する。
- 広い園内をきめ細かく管理する必要上、園内適所に管理拠点（飼育詰所等）を設置する。また、植物園正門付近には、植物園中心の来園者へのサービス向上のため、管理者が常駐する拠点を設ける。
- 希少動物の保護・繁殖や、高度な動物医療、野生動物導入時の感染症等への対応を強化するため、動物病院や入院獣舎、検疫施設等の充実を図る。
- 環境エンリッチメントのための工作や、イベント等のための大道具の準備、管理用車両の保管など、飼育・運営における作業場所となるバックヤード的スペースを確保する。



管理運営施設の配置構成

6. 希少動物の保護・繁殖に関する施設

- 以下の種については、本園で積極的に繁殖を進める動物として設定し、飼育施設や管理の充実を図る。

ツシマヤマネコ (CITES : II): 生息地への野生復帰を行うため、個体数の増大が求められ、本園のみで繁殖の活動が行われている種

- 以下の種については、繁殖を進める候補動物として設定し、飼育施設や管理の充実を図る。 但し、決定にあたっては、国内外の繁殖状況や輸出入規制との調整等、長期的な視野にたって本園での実現性を考慮するものとし、今後検討する。

チュウオウチンパンジー (CITES : I): 他園での飼育例が少なく（またはなく）、本園での活動が日本における種の保存に多大な影響を及ぼす種

※ CITES-I,II: ワシントン条約（絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約）の付属書で、絶滅のおそれのあるものとして示されている種。IIよりIの方が絶滅のおそれが高い。

- 上記の種以外にも、国際的に保護・繁殖のための取り組みが行われており、なおかつ国内での取り組みに協力が求められる種（ニシローランドゴリラ、ボルネオオランウータンなど）については、予備室を設けるなどの対策を図り、他園との連携をとりながら保護・繁殖への取り組みの一翼を担う。

7. 供給処理施設

- 21世紀における人と動植物の共存をめざすことを理念として掲げる社会教育施設として、供給処理施設にあっても、糞や雨水のリサイクルなどについて検討する。

VI. 管理・運営計画の方針

1. 管理・運営の考え方

(1) 誰もが、いつでも・快適に・楽しく利用できる動植物園へ

- サービス意識の向上を図り、幼児からお年寄りまで誰もが、快適に、楽しく利用できる運営を目指す。

(2) 様々な場面で市民参加を受け入れる動植物園へ

- リピーターを増やし、愛着を持って利用してもらう動植物園とするため、市民が気軽に参加できる機会を提供し、毎回異なった楽しみが得られる運営を目指す。(例：定期連続講座、スポットガイド、テーマを定めた園内ツアー 等)
- ガイドボランティアなど運営への参加機会の提供や、市民オーナーシップ制度の創設など、市民が自発的に参加し、自分たちの動植物園として愛着が育まれるような仕組みづくりを目指す。(例：友の会の運営、ガイドボランティアの指導・組織化、動物サポーター制度の導入 等)

(3) 動物の側に立った発想を持った動物園へ

- 身近なところから取り組める動物の飼育環境の改善や、日常的なエンリッチメントの工夫を行い、動物の快適な暮らしを考えた飼育のあり方を目指す。

(4) 地球環境を感じ、考える動植物園へ

- 生きた動植物をテーマとする自然系博物館として、動物、自然、地球環境について、「市民に何を伝えるか」を考え、様々な視点から情報を提供するとともに、環境に優しい管理運営を実践できる動植物園を目指す。
- 市民の様々なレベルの知的欲求に応えられる窓口を設けるとともに、来園者自らが学習を行うための資料や場所の提供を行う。(例：動植物科学館における相談窓口、資料閲覧スペース、解説データベースの構築 等)

(5) 効率的で健全な運営を行う動植物園へ

- 動植物が融合した特色ある展示を展開するため、動物園、植物園の蓄積された資源やノウハウを最大限に活用するとともに、両園の区域を越えた動植物の一体的管理体制づくりを目指す。(動物園区域内の植物についても、植物園区域内の植物と同様の管理レベルを目指す。)
- 動植物園組織の統合や機械化の推進により、効率的かつ効果的な施設の整備・維持、組織の運営を目指す。(例：入園売改札や駐車場入退場の機械化、遠隔カメラによる監視 等)

2. 望ましい組織のあり方

- 動物園、植物園に分かれている現組織を統合し、動植物園全体の管理の一元化を図っていく。
- また、両組織の一元化により業務の効率化を図るとともに、一部の単純業務の外部委託化を図ることによって、今後、新たに取り組むべき幾多の業務に対応できる体制をつくり出す。
- そのうえで、動植物園全域を担当する企画・広報・教育担当などの専門部署を創設し、事業の企画立案、P R、環境学習プログラムの開発・実践や、市内他施設や学校教育との連携などを図る。(例：教育委員会との人材連携 等)
- 加えて、動植物園の目指すべき方向性や各種の方針を、長期的に継続、実現できるような仕組づくりも必要である。

VII. 構想推進のスケジュール

1. 事業スケジュール

- 現動植物園が抱える問題点のうち、社会的要求度の高い課題から順次改善できるよう、次のような事業ステージを設定する。
- 施設整備に頼らず、運営の改善により進められる再生（環境学習の機会増強等）については、事業スケジュールに関わらず、積極的に導入する。

第1段階（概ね10年）

- ・ユニバーサルデザインへの対応（急勾配園路の解消、エスカレータの導入）
- ・来園者の利便性向上（現況駐車場立体化、小広場設置）
- ・飼育環境の改善（老朽獣舎、環境エンリッチメント、管理施設）
- ・処理施設の改善（糞処理施設、排水系統の設置・改善）

第2段階（概ね10年）

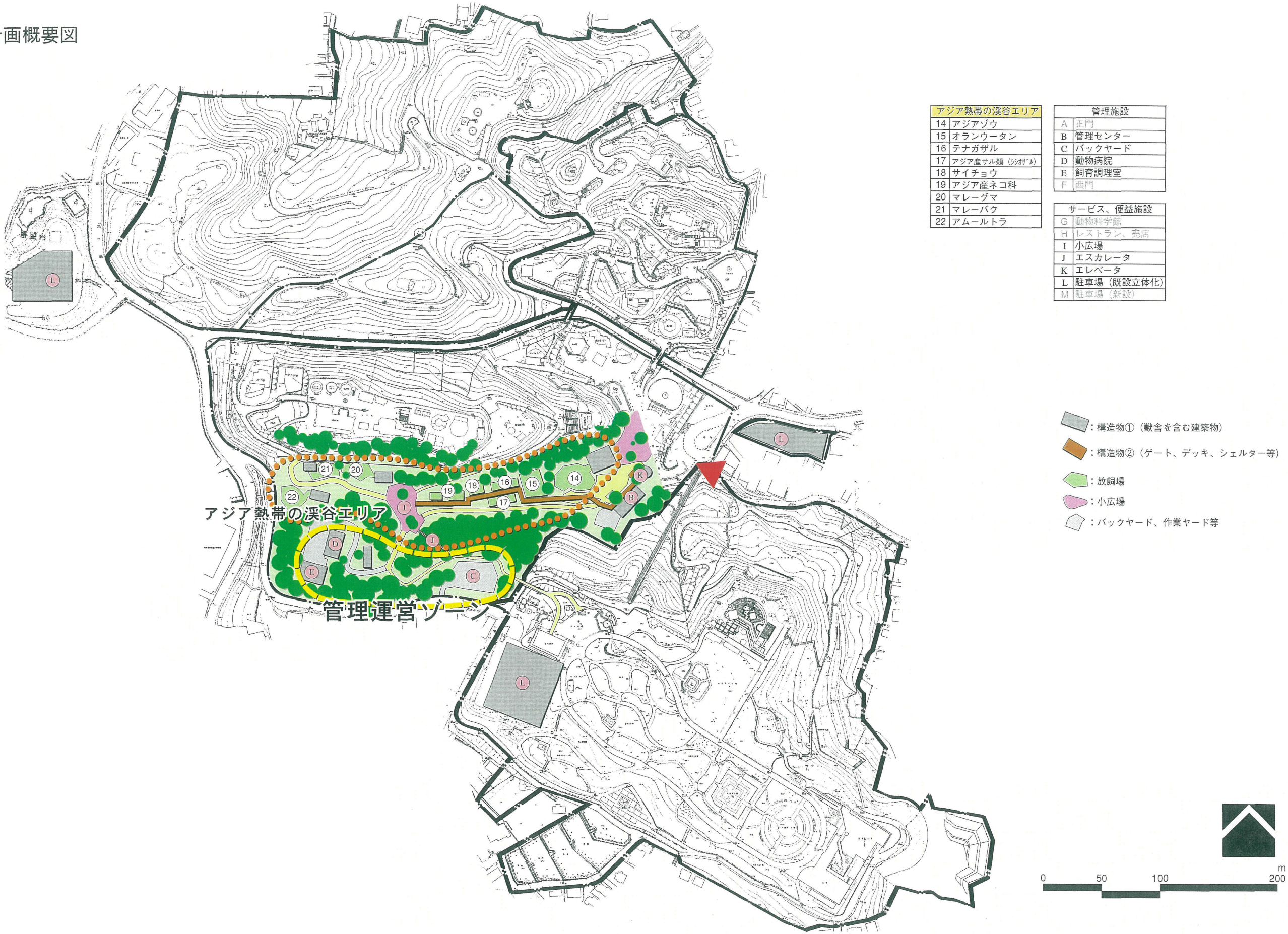
- ・環境学習機能の強化（科学館）
- ・多様な展示手法の導入
- ・希少動物の保護繁殖への取り組み
- ・駐車場の新設
- ・植物園との連携強化（植物園への動物展示導入）

概
ね
2
0
年

2. 第1段階の具体的整備案

- ユニバーサルデザインへの対応： 正門入口部分にエレベータを設置し、水平な空中デッキへと来園者を導く。
動物園区域と植物園区域をつなぐ部分にエスカレータを導入し、連絡を容易にする。
- 来園者の利便性向上： 現況駐車場を立体化し、容量を増大する。
正門入口付近やアジア熱帯の溪谷ゾーン内に小広場を設置し、快適な休憩空間を設ける。
- 飼育環境の改善： 最も古い施設が集中している、アジア熱帯の溪谷ゾーンの動物舎、放飼場を再整備。

3. 第1段階の計画概要図



4. 概算工事費

■動植物園再生事業費（概算工事費）

		(千円)						
エリア		規模	単位	単価	計	第1期整備	第2期整備	備考
センターゾーン	エントランス広場Ⅰ（建築）	180	㎡	300,000	54,000,000	54,000,000		
	〃（造園）	2,220	㎡	30,000	66,600,000	66,600,000		
	エントランス広場Ⅱ（建築）	800	㎡	300,000	240,000,000		240,000,000	
	〃（造園）	950	㎡	30,000	28,500,000		28,500,000	
	科学館	350	㎡	300,000	105,000,000		105,000,000	
	ふれあい広場	1,170	㎡	30,000	35,100,000		35,100,000	
管理ゾーン	管理施設	1,500	㎡	250,000	375,000,000	375,000,000		
展示ゾーン	アジア熱帯の溪谷エリア	11,970	㎡	220,000	2,633,400,000	2,633,400,000		獣舎、バドック、観覧園路含む
	アフリカの草原エリア	10,560	㎡	150,000	1,584,000,000		1,584,000,000	獣舎、バドック、観覧園路含む
	日本の動物エリア	3,630	㎡	150,000	544,500,000		544,500,000	ニホンザルは既存施設改修
	動物行動・適応エリア（爬虫類、ペンギン）	1,500	㎡	500,000	750,000,000		750,000,000	建物内展示、充実した設備が必要
	動物行動・適応エリア（霊長類）	4,420	㎡	150,000	663,000,000		663,000,000	充実した設備が必要 チンパンジー、ヒヒ類は既存施設改修
	バードガーデンエリア	6,600	㎡	60,000	396,000,000		396,000,000	獣舎、観覧園路含む
	駐車場（既存立体化）	7,300	㎡	100,000	730,000,000	730,000,000		
	駐車場（新設）	3,760	㎡	100,000	376,000,000		376,000,000	
	エスカレーター	1	式	100,000,000	100,000,000	100,000,000		約40m
	その他（園路、広場）Ⅰ	1,600	㎡	30,000	48,000,000	48,000,000		
	その他（園路、広場）Ⅱ	9,750	㎡	30,000	292,500,000		292,500,000	
整備費（工事費）					9,021,600,000	4,007,000,000	5,014,600,000	

第1期整備

第2期整備

VIII. 参考資料

1. 自然動物公園構想の概要	資－1
2. 動物園の飼育・展示動物	資－1
3. 動植物園の利用動向	資－4
4. 動植物園の経営状況	資－5
5. 動植物園の管理運営組織	資－5
6. 動植物園の催事	資－6
7. 利用者アンケート	資－7
8. 動物園の歴史	資－1 2
9. 現況動線と計画動線の比較	資－1 3
10. 展示施設イメージ	資－1 4
11. 学習・解説計画	資－2 1
12. 検討委員会	資－2 3

参 1. 自然動物園構想の概要

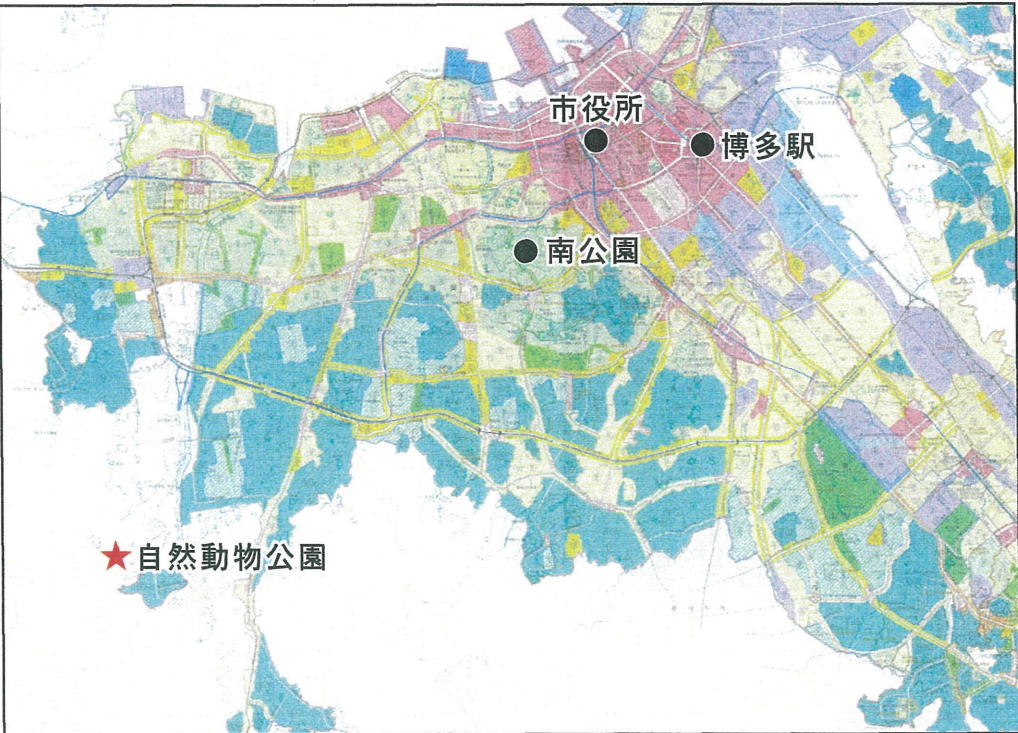
福岡市自然動物園構想は、世界的な環境保護の潮流や、それに伴う動物園のあり方、またアジアの交流拠点都市をめざす福岡市の動物園の役割、現動物園が抱える課題等を踏まえ、下記のような目的及び内容の新しい動物園として、平成4年にその基本構想が策定された。しかし、財政上の観点や既存資源の有効活用などの観点から見直しが行われ、平成14年8月にこれを中止することとなった。

目的

施設の老朽化、生育環境の狭隘化などにより施設の改善が急務となっている現動物園に代わり、動物の生育環境の再現を図り、野生に近い状態で飼育・展示し、環境学習機能、野生動物の保護・繁殖機能を有する新たな動物園整備を構想したもの。

事業内容

基本理念： 21世紀・人と動植物の共存をめざして
 役割： 生息地環境を再現し、環境学習と自然体験ができる場
 アジア地域の動物の保護・繁殖の場
 国際交流・情報発信の場
 広域的レクリエーションの場
 場所： 西区金武地区
 面積： 約50ha
 動物種数： 200種、1,000点
 総事業費： 約450億円



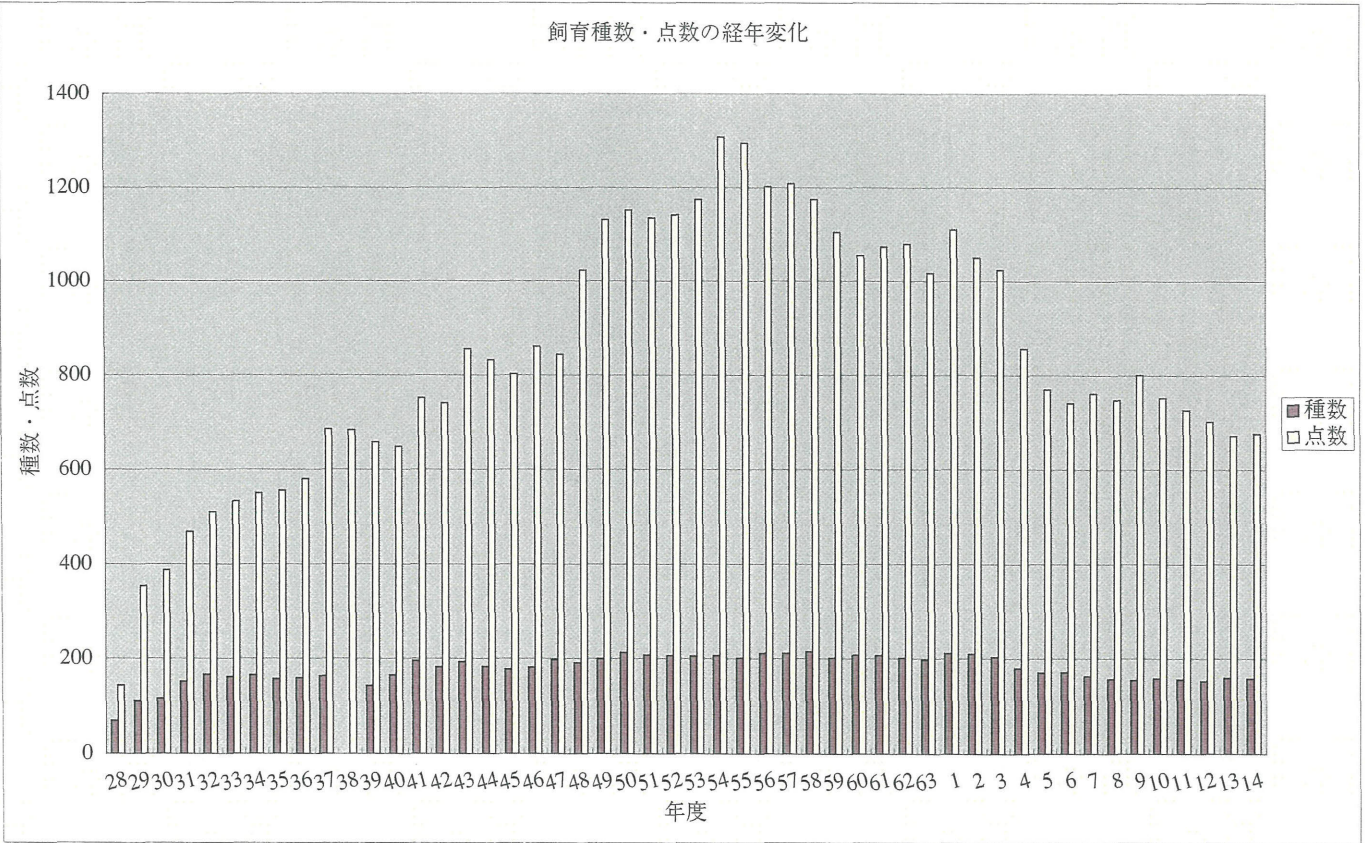
自然動物公園の計画位置図

参 2. 動物園の飼育・展示動物

平成15年5月末現在、動物園では160種672点の動物が飼育・展示されている。

分類	動物数	種数	点数
哺乳類		49	259
鳥類		89	324
は虫類		22	89
合計		160	672

また、開園以来の種数・点数の経年的変化を見ると、種数に大きな変化は見られないが、点数では、昭和54年の1,307点をピークに減少傾向にあり、近年は700点前後で安定した値となっている。

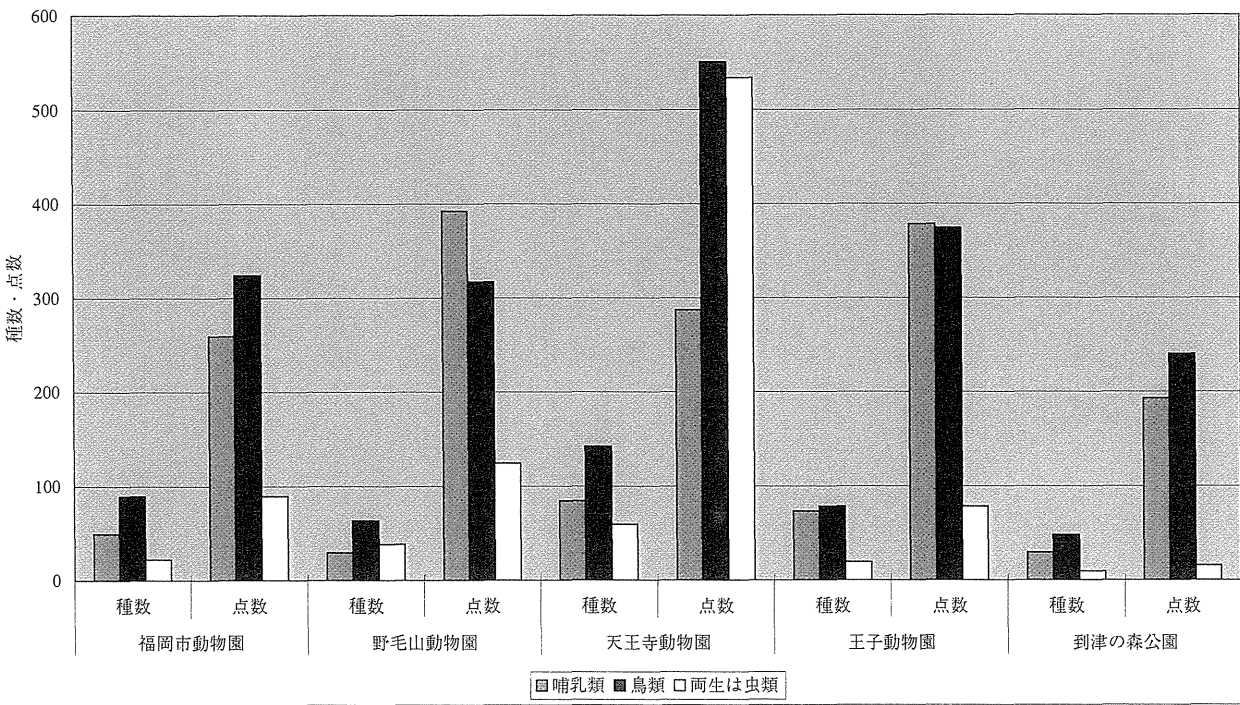


福岡市動物園同様、都市型動物園であり同程度の規模のものを対象に、他園との比較を行った。種数・点数においては、目立った特徴は見られないが、種数構成においては、霊長目がやや多い傾向にある事が伺える。

種数、点数の他園との比較

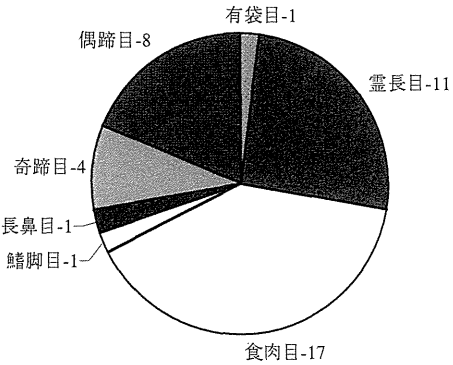
動物数 分類	福岡市動物園		野毛山動物園		天王寺動物園		王子動物園		到津の森公園	
	種数	点数	種数	点数	種数	点数	種数	点数	種数	点数
哺乳類	49	259	29	392	84	287	73	378	29	193
鳥類	89	324	63	317	142	551	78	374	48	240
両生は虫類	22	89	38	124	59	534	19	78	9	15
合計	160	672	130	833	285	1372	170	830	86	448
面積 (ha)	10.3		10.6		11.0		8.1		10.6	

種数、点数の他園との比較

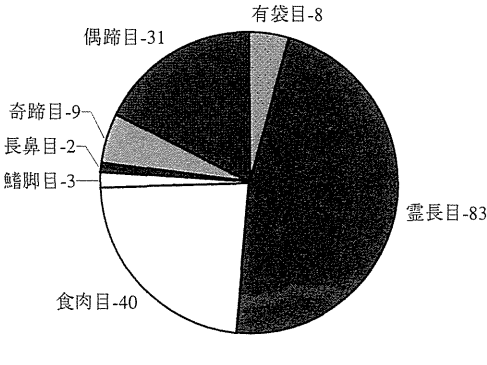


福岡市動物園

種数の構成



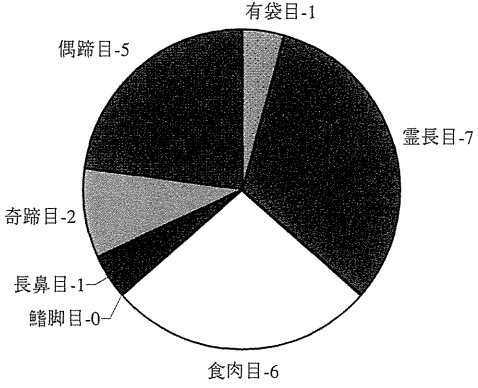
点数の構成



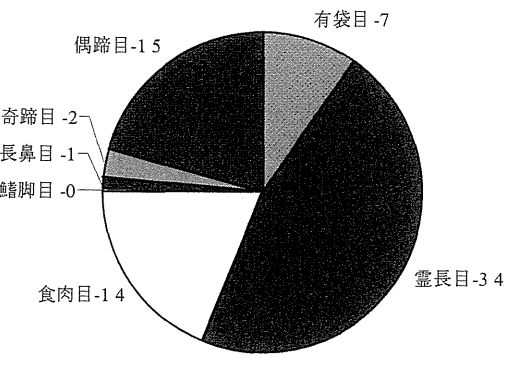
哺乳類、種数・点数の目別構成（中～大型動物のみ、数値はそれぞれ種・点数を表す）

野毛山動物園

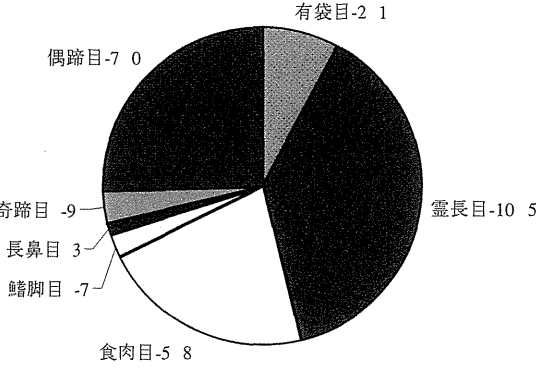
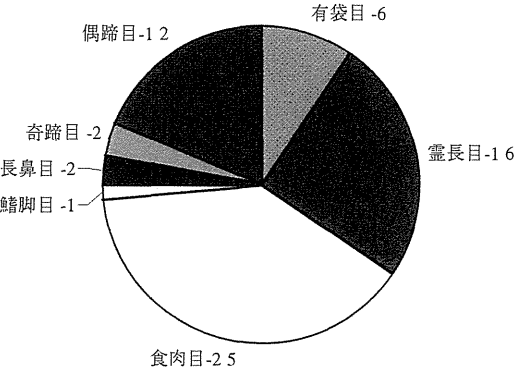
種数の構成



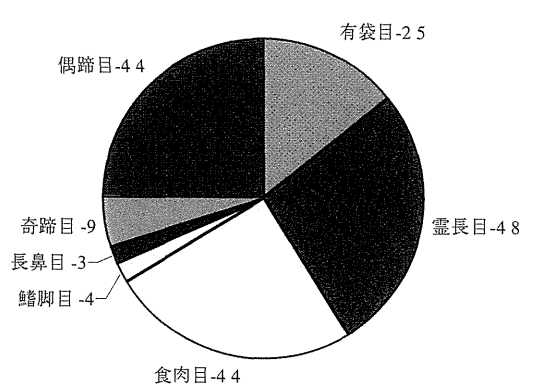
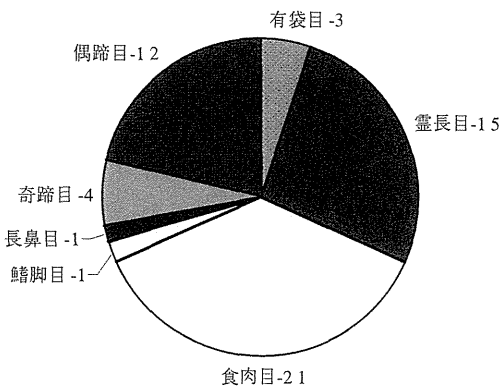
点数の構成



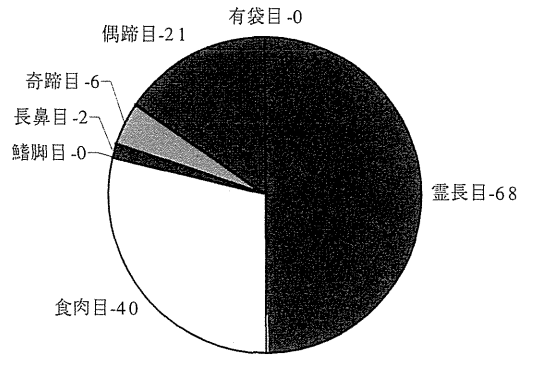
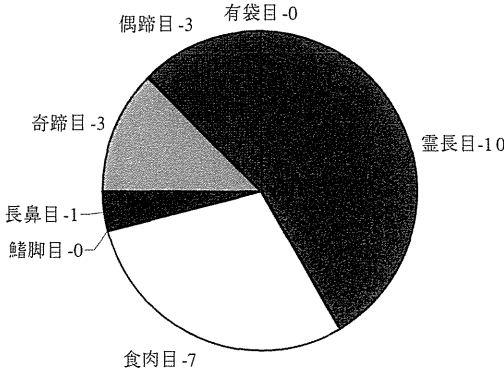
天王寺動物園



王子動物園



到津の森公園



他園の哺乳類、種数・点数の目別構成（中～大型動物のみ、数値はそれぞれ種・点数を表す）

飼育・展示動物リスト（平成15年5月末現在）

哺乳類

	分類	動物名	♂	♀	?	計	
有袋目	カンガルー科	アカカンガルー	2	6	0	8	
翼手目	オコウモリ科	デマレルーセツオコウモ	16	10	3	29	
霊長目	オマキサル科	クロクモサル	2	1	0	3	
		ホンドサル	1	8	37	46	
		シシオサル	1	1	0	2	
		マントヒヒ	4	4	0	8	
		マントリル	0	1	0	1	
		タイアナモンキー	3	1	0	4	
		ブラザサングエノン	4	2	1	7	
		シロチチナカサル	2	1	0	3	
	ショウジヨウ科	ホルネオランウータン	1	1	0	2	
		チンパンジー	2	3	0	5	
		ニシローランドコリラ	2	0	0	2	
兎目	ウサギ科	カイウサギ	5	5	10	20	
齧歯目	ヤマアラシ科	アラリカタチカミヤマアラシ	2	1	0	3	
	テングクネズミ科	テングクネズミ	5	5	10	20	
	リス科	キタリス	0	1	0	1	
	ハクネズミ科	ハクネズミ	2	3	5	10	
食肉目	イヌ科	ホンドキツネ	0	1	0	1	
		ホンドタヌキ	0	3	0	3	
	イタチ科	ニッポニアナグマ	1	0	0	1	
		ニッポンツキノワグマ	1	1	0	2	
		ホッキョクグマ	0	1	0	1	
		マレーグマ	0	1	0	1	
	アライグマ科	ハナシロハナグマ	0	1	0	1	
		シセンレッサーハナグマ	2	1	0	3	
	シヤコウネコ科	ビントロンク	1	1	0	2	
	ネコ科	カラカル	1	0	0	1	
		ビューマ	1	1	0	2	
		アムールトラ	1	1	0	2	
		クロヒョウ	1	1	0	2	
		ライオン	1	1	0	2	
		ベンガルヤマネコ	3	1	0	4	
		シバリアオオヤマネコ	1	1	0	2	
		フシヤマネコ	4	6	0	10	
	鯨脚目	アシカ科	オタリア	1	2	0	3
長鼻目	ゾウ科	アジアゾウ	0	2	0	2	
奇蹄目	ウマ科	トカラウマ	0	1	0	1	
		グランドシマウマ	2	1	0	3	
	バク科	マレーバク	2	1	0	3	
		サイ科	ミナミシロサイ	1	1	0	2
偶蹄目	カバ科	カバ	2	1	0	3	
		ラクタ科	1	0	0	1	
	シカ科	キョン	1	2	0	3	
		フシマジカ	5	4	1	10	
	ウシ科	アラビアオリックス	0	2	0	2	
		シバヤキ	1	1	0	2	
		ハーバリーシェープ	3	4	1	8	
		ヒツジ	1	1	0	2	
合計			92	99	68	259	種数

鳥類

	分類	動物名	♂	♀	?	計
タチチョウ目	タチチョウ科	タチチョウ	1	2	0	3
ヒクイトリ目	ヒクイトリ科	ヒクイトリ	1	1	0	2
	エミュー科	エミュー	1	1	0	2
シキタチチョウ目	シキタチチョウ科	カンムリシキタチチョウ	1	1	0	2
ペンギン目	ペンギン科	オウサマペンギン	1	2	0	3
		フクロトビペンギン	4	5	0	9
カイツブリ目	カイツブリ科	カンムリカイツブリ	0	0	1	1
ペリカン目	ウ科	ウミウ	0	0	1	1
	ペリカン科	モモイロペリカン	0	1	0	1
	コウノトリ科	ニホンコウノトリ	1	1	0	2
	トキ科	ジュハシコウ	1	3	0	4
ショウシヨウトキ		2	1	2	5	
ホオアカトキ		1	1	0	2	
ハラサキ		0	0	3	3	
フタミヅコ目	フタミヅコ科	ペニロフタミヅコ	0	0	11	11
		ヨーロッパフタミヅコ	0	0	4	4
		チリーフタミヅコ	0	0	19	19
		コブラミヅコ	0	0	5	5
タカ目	コンドル科	コンドル	1	3	0	4
	タカ科	オオタカ	1	1	0	2
		シロガシラトビ	1	0	0	1
		オシロワシ	1	1	0	2
		オオワシ	1	0	0	1
ハヤブサ科	カラカラ	1	0	0	1	
カモ目	カモ科	リュウキュウカモ	1	2	0	3
		コクチョウ	2	0	0	2
		コブハクチョウ	1	1	1	3
		クロエリハクチョウ	1	1	0	2
		ハイロカシ	0	1	0	1
		イントカシ	1	0	0	1
		オオカナタカシ	1	0	0	1
		ツクシカモ	0	0	3	3
		オシトリ	5	8	0	13
		ヒトリカモ	1	0	0	1
		マカモ	5	3	0	8
		カルカモ	3	3	0	6
		オナカカモ	0	1	0	1
		アカハシハシロ	3	4	0	7
		ホシハシロ	3	1	0	4
		キンクロハシロ	1	1	0	2
		アヒル	2	2	0	4
		アカリュウキュウカモ	0	0	2	2
		ヨシカモ	1	0	0	1
		ニシキシ	1	1	0	2
キン目	キン科	オシロコシアカキシ	1	1	0	2
		セイラン	0	1	0	1
		ホロホロチヨウ（家禽型）	5	2	0	7
		イントクシヤク	2	8	13	23
		ハラワソコクシヤク	1	1	0	2
		ハツガン	0	1	0	1
ツル目	ツル科	シロエリオオツル	1	1	0	2
		アネハツル	0	0	2	2
		ホオシロカンムリツル	1	1	1	3
	クイナ科	ヒクイナ	0	0	1	1
		ハシ	0	0	9	9
	チドリ目	シキ科	チュウシヤクシキ	0	0	1
カモメ科		セグロカモメ	0	0	2	2
	キンカモメ	0	0	8	8	
	ユリカモメ	0	0	3	3	

ハト目	ハト科	オウキハト	1	2	1	4	
		キンハト	1	1	0	2	
		キンミノハト	1	1	6	8	
		ツデクワロハト	0	0	34	34	
		アオハト	0	0	1	1	
オウム目	ヒヨコ科	ショウジョウインコ	1	1	0	2	
	オウム科	キハタン	2	0	0	2	
		オオハタン	1	1	0	2	
		シロビタイミジオウム	3	2	0	5	
	インコ科	オオハナインコ	0	1	0	1	
		ルリコンゴウインコ	1	1	0	2	
		ミドリコンゴウインコ	0	0	2	2	
		オナカアカホウインコ	0	0	1	1	
		ナナクサインコ	3	3	0	6	
		アカムラサキインコ	1	0	0	1	
		オカメインコ	0	1	0	1	
		コサクラインコ	1	1	0	2	
		セキセイインコ	1	2	0	3	
		ホウタンインコ	0	1	0	1	
フクロウ目		フクロウ科	ワシミズク	1	1	0	2
	フクロウ		1	1	0	2	
	シロフクロウ		1	1	0	2	
ブッポウオウム目	カワセミ科	ワライカワセミ	1	2	0	3	
	サイチョウ科	カササキサイチョウ	1	1	0	2	
		シワコブサイチョウ	1	1	0	2	
スズメ目	ヒタキ科	トラツグミ	0	0	2	2	
		シロハラ	0	0	1	1	
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	0	0	1	1	
	レンジャク科	ヒレンジャク	0	0	1	1	
	フウチョウ科	アカサリアフウチョウ	1	1	0	2	
	合計			87	95	142	324

は虫類	分類	動物名	♂	♀	?	計	
カメ目	スマカメ科	クサカメ	0	1	10	11	
		アンボイナハコカメ	1	0	0	1	
		リュウキュウヤマガメ	1	0	0	1	
		ニホンイシカメ	0	0	2	2	
		ミナミイシカメ	1	1	0	2	
		アカミミカメ	0	0	4	4	
	リクカメ科	インドホシカメ	8	10	0	18	
		アルダブラゾウカメ	1	0	0	1	
		ケヅメリクカメ	0	2	0	2	
ワニ目	アリゲーター科	メカネカイマン	2	0	0	2	
有鱗目							
トカゲ亜目	ヤモリ科	ヒョウモントカゲモドキ	1	3	8	12	
	イクアナ科	クレーンイクアナ	1	1	0	2	
ヘビ亜目	ボア科	コロンビアレインボーマホ	1	0	0	1	
		ケニアスナボア	1	2	6	9	
		ヒロニシキヘビ	1	9	0	10	
		ホーランドニシキヘビ	1	1	0	2	
		アミメニシキヘビ	2	1	0	3	
		ヒルマニシキヘビ	1	1	0	2	
		アフリカニシキヘビ	1	0	0	1	
		ナミヘビ科	スカーレットキングヘビ	0	0	1	1
	シマヘビ		0	0	1	1	
	マムシ科	ニホンマムシ	0	0	1	1	
合計			24	32	33	89	種数

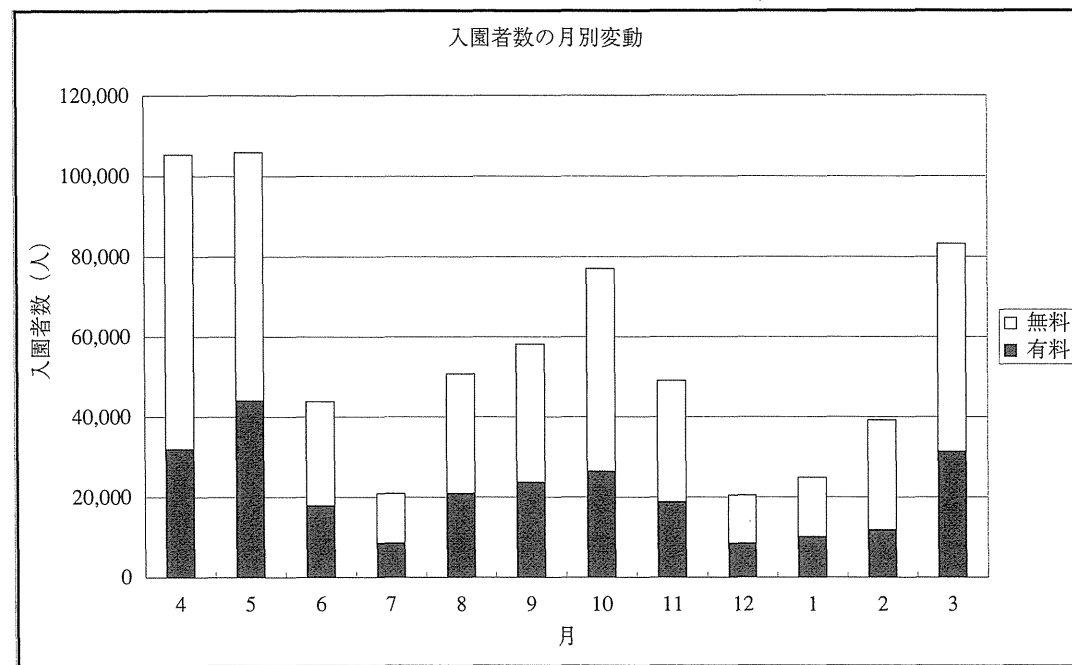
	♂	♀	?	計	種数
哺乳類	92	99	68	259	49
鳥類	87	95	142	324	89
は虫類	24	32	33	89	22
総計	203	226	243	672	160

参 3. 動植物園の利用動向

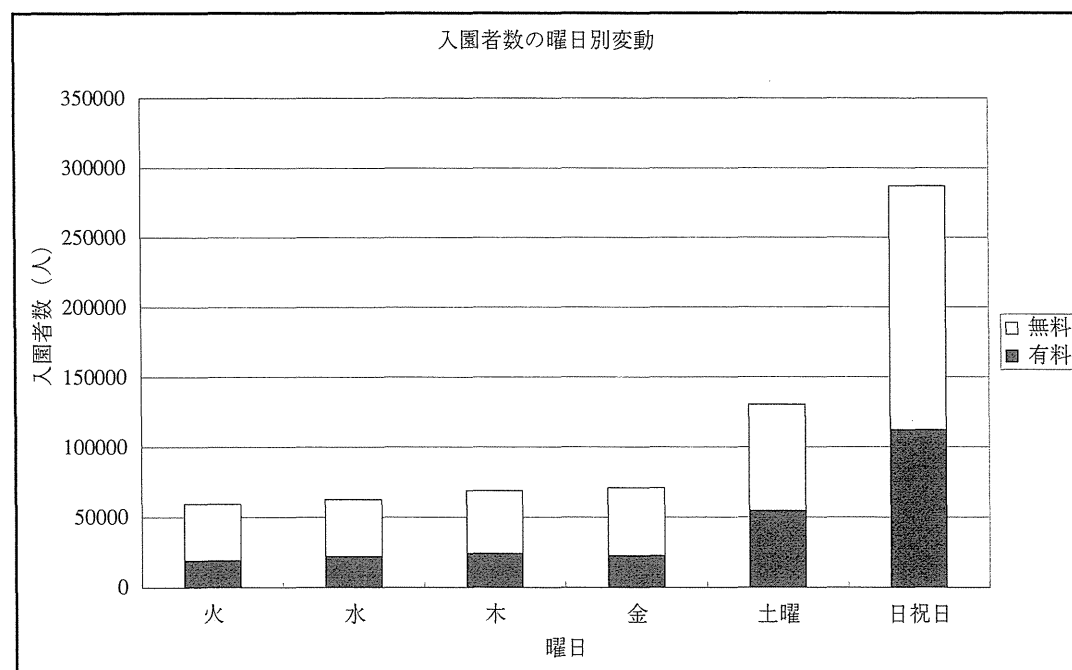
平成14年度の動植物園利用者数は、679,021人（うち有料入園者253,771人、無料入園者425,250人）となっている。

これを、月別に見ると5月（年間の15.6%）が最も多く、次いで4月（15.5%）、3月（12.3%）となっている。逆に最も少ない月は12月（3.0%）で、次いで7月（3.1%）、1月（3.7%）となっており、春と秋に来園者が集中する2期型の利用パターンとなっている。また、曜日別に見ると、日曜日が圧倒的に多く（33.5%）次いで土曜日（19.2%）となっており、休日に集中する利用形態となっている。

なお、中学生以下等無料入園者は、全体の約63%を占めている。

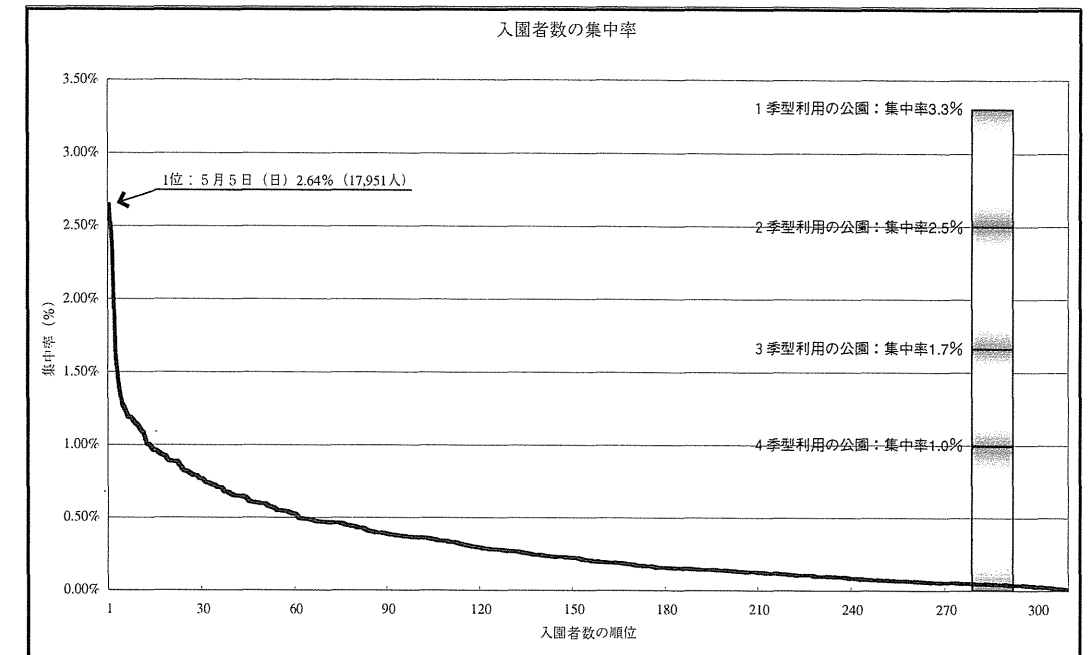


入園者数の月別変動



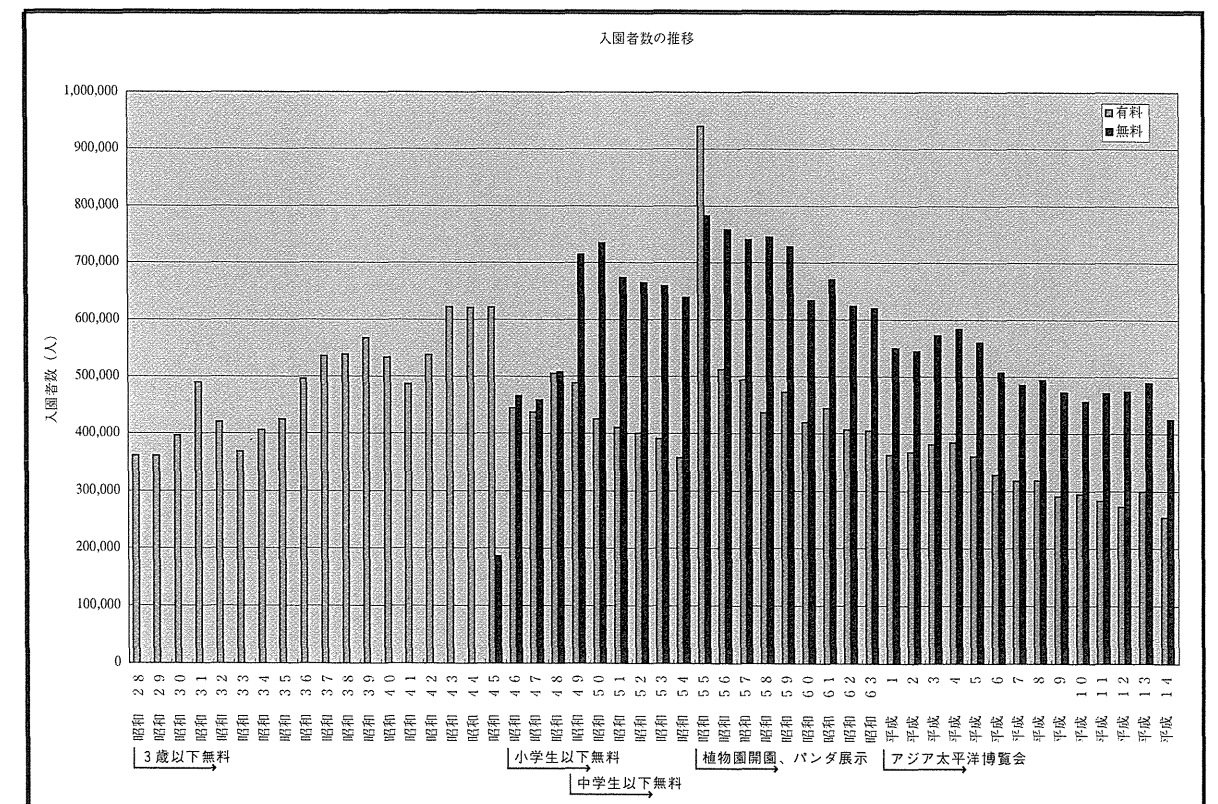
入園者数

このように、福岡市動植物園の利用パターンは集中率の高いものとなっており、日利用者数の集中率は2.64%（5月5日）となっている。



入園者数の集中度

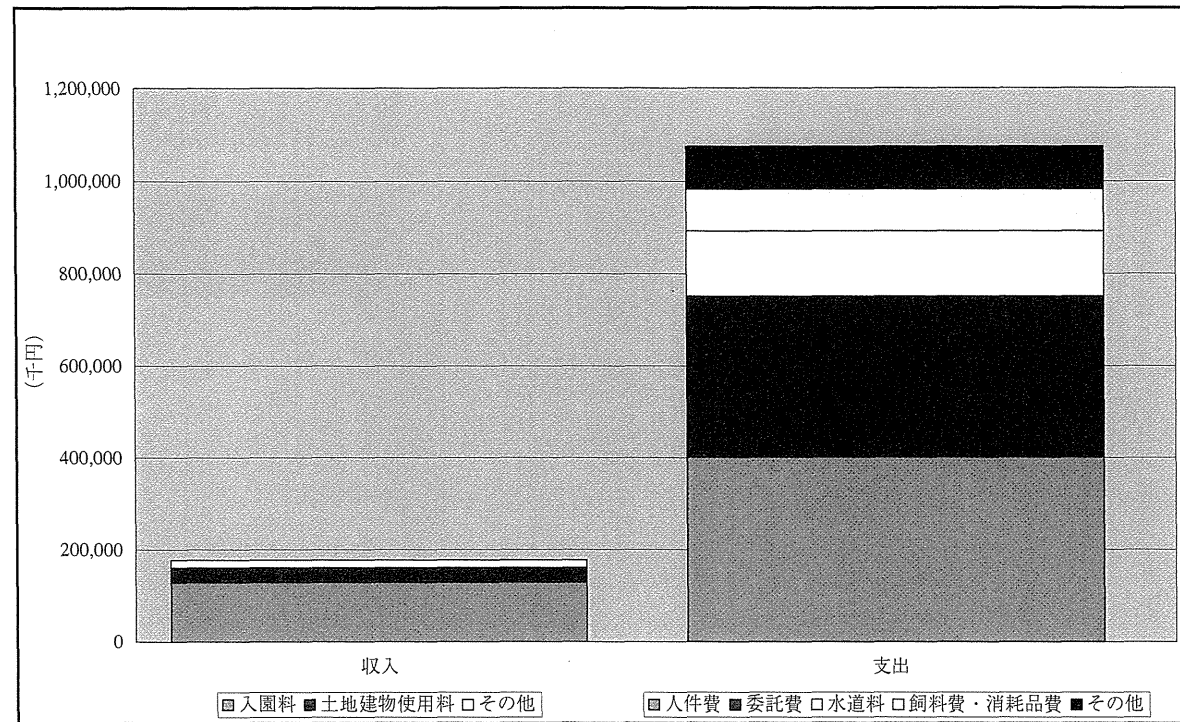
年間入園者数の推移を見ると、植物園開園とパンダの展示が重なった昭和55年をピークに下降傾向が止まらず推移している。



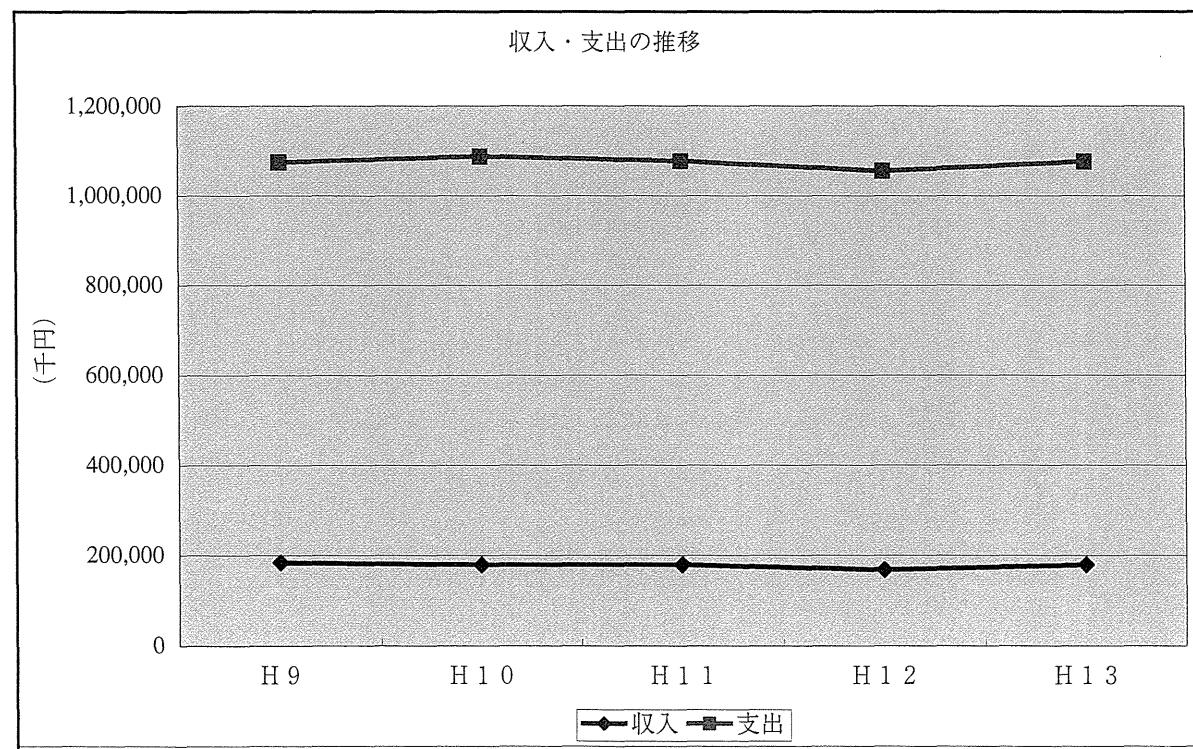
入園者数の推移

参 4. 動植物園の経営状況

動植物園の経営状況は、慢性的に悪い状況にあり、新規施設の建設費等の臨時支出を除いた収支は、毎年 9 億弱の赤字となっている。(H 9～13 年度の収支率平均＝0.165) 収入の内訳で最も多いのは入園料で、全体の 7 割以上を占めている。また、支出の内訳では人件費(臨時職員含む)が 4 割程度を占めている。

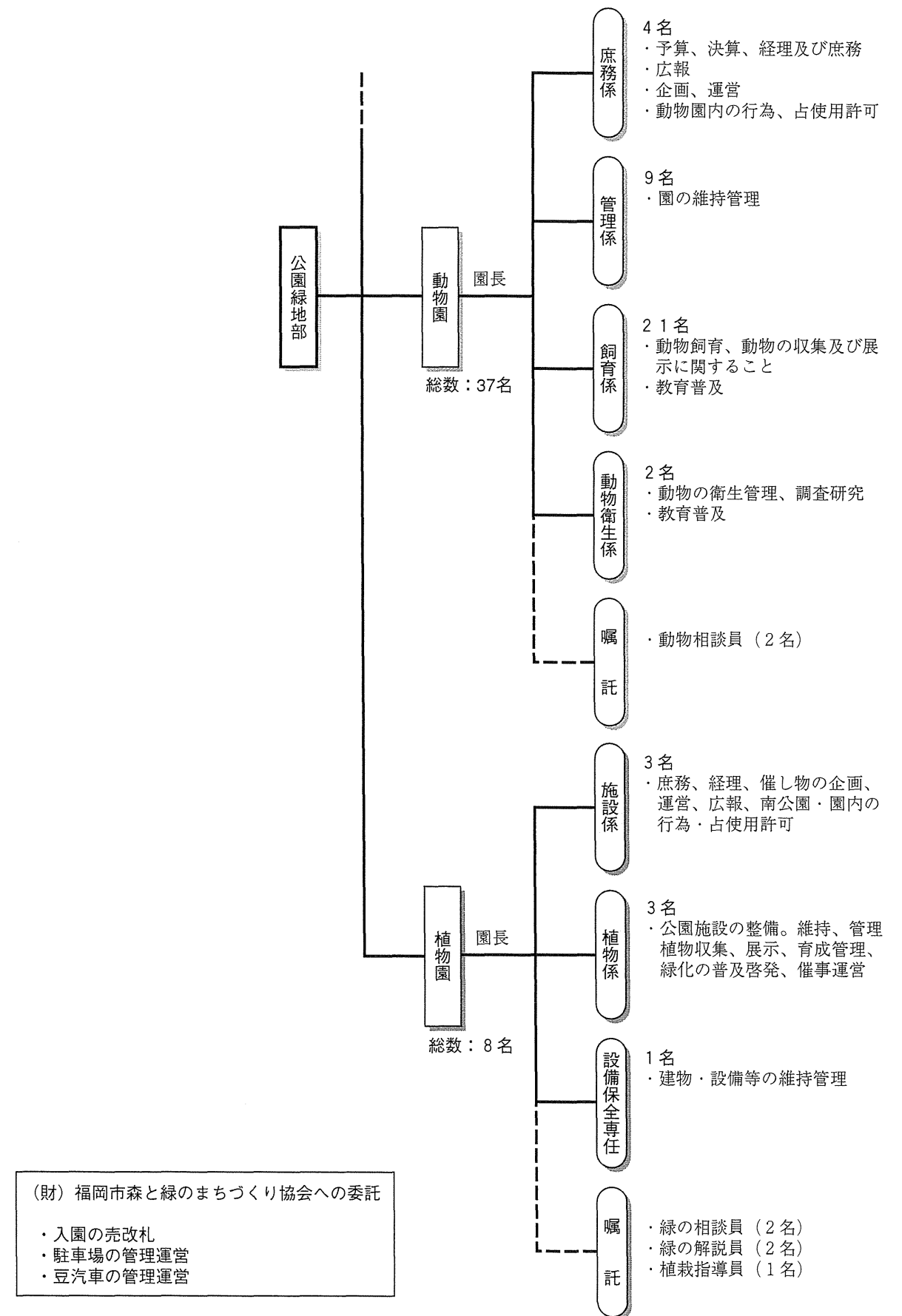


動植物園の経営状況 (H 9～13 年の平均)



参 5. 動植物園の管理運営組織

平成 1 5 年現在の福岡市動植物園の管理運営組織は下図のとおりである。



参 6. 動植物園の催事

現在、動植物園で行なわれている催し事は次のとおりである。

[動物園]

4 月	無料開園（みどりの日） メンヨウの毛刈り
5 月	こどもの日プレゼント
7 月	夏休みこども体験教室
7 ～ 8 月	動物画コンクール作品募集 氷のプレゼント
8 月	夜の動植物園（毎土曜）
9 月	動物慰霊祭
9 ～ 10 月	中学生飼育体験学習
10 月	無料開園（都市緑化月間）
10 ～ 11 月	写真コンテスト作品募集
1 月	新春福引大会
3 月	粘土で遊ぼう

[植物園]

4 月	花見の茶会（春の野点） 親子グリーンウォーク 無料開園（みどりの日）
5 月	こどもの日プレゼント
6 月	月下美人鑑賞会
7 月	夏休みこども体験教室
8 月	夜の動植物園（毎土曜） 七夕祭り
10 月	秋の花鉢祭り 緑のセミナー グリーントレッキング 無料開園（都市緑化月間） 親子グリーン教室
11 月	菊の茶会（秋の野点）
1 月	お年玉プレゼント 春の七草粥
通年	植物観察会、展示会、園芸講座

参7. 利用者アンケート

(1) アンケートの概要

[目的]

福岡市動植物園の利用状況、現在の施設内容及び運営に対する利用者の意見・要望を把握し、福岡市動植物園再生基本構想の検討に活用する。

[調査内容]

Q 1. 利用者のフェースシート

- ・性別
- ・年齢 [性別、年齢やグループ構成の違いによる傾向把握のため]
- ・グループ構成
- ・居住地
- ・移動時間 [移動時間、手段の違いによる傾向把握のため]
- ・利用交通機関

Q 2. 動植物園の利用状況

- ・来園目的 (複数回答)
- ・年間利用頻度 [動植物園の利用状況の把握]
- ・動植物園の利用頻度
- ・滞在時間

Q 3、Q 4. 動植物園への意見・要望

- ・良いと思う点 (複数回答)
- ・好きな動物・施設 (複数回答) [整備、運営について検討する際の参考とするため、
- ・悪いと思う点 (複数回答) 利用者の意見・要望の把握]

Q 5. 自由意見

[調査日]

平成 15 年 5 月 20 日 (火) ～ 5 月 25 日 (日) の 6 日間

[調査方法]

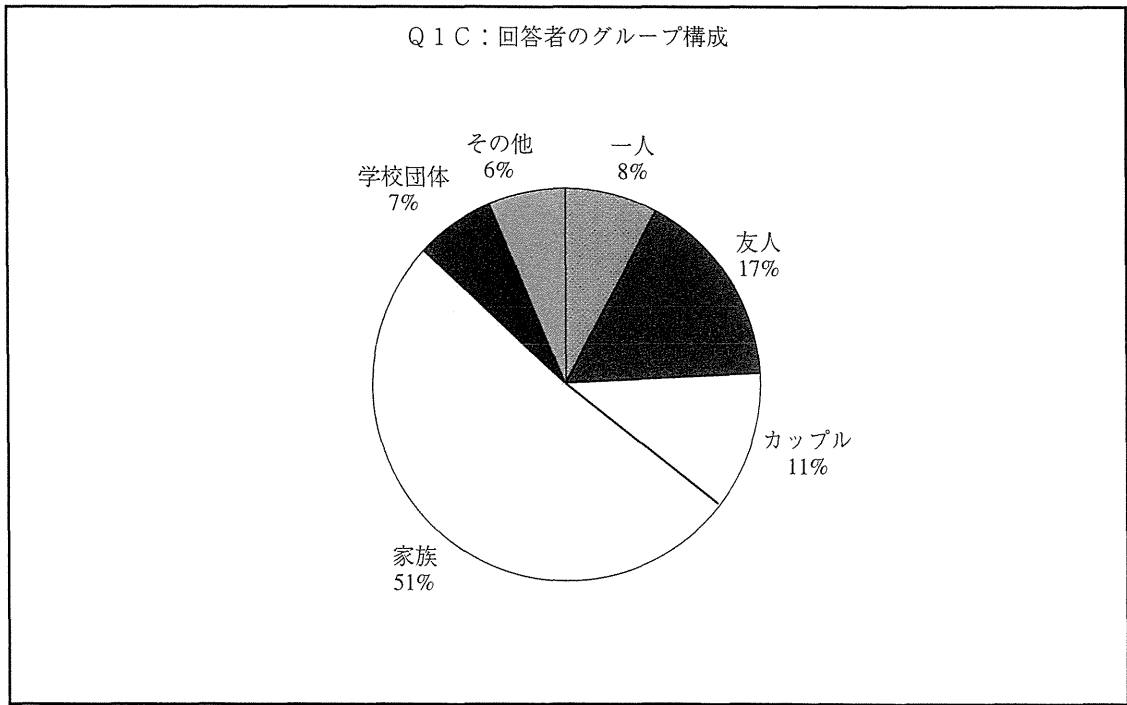
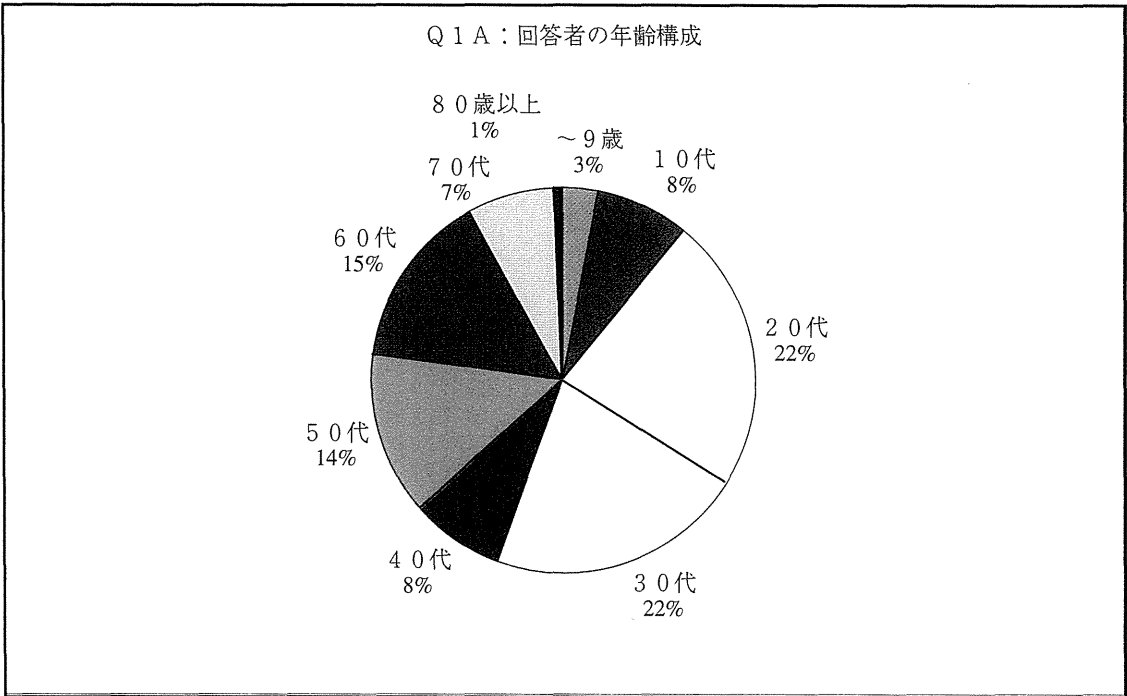
- ・退園ゲート (動物園正門、植物園正門) 前で、調査員がアンケート用紙を手渡しヒアリング行う。
- ・ゲート前には、筆記用の机、鉛筆等を用意、記入しアンケート用紙を提出した人には、もれなく記念品 (ツシマヤマネコの絵はがき、植物の絵はがき等) を渡す。
- ・アンケート配布はデータ重複を避けるため、1 グループ 1 枚とする。
- ・調査人員は各ゲート土日 3 名 (計 6 名)、平日 2 名 (計 4 名) とする。

[収集結果]

	20日 (火)	21日 (水)	22日 (木)	23日 (金)	24日 (土)	25日 (日)	総計
植物園	83	90	60	66	142	117	558
動物園	99	96	95	68	210	100	668
合計	182	186	155	134	352	217	1226

(2) 利用者属性

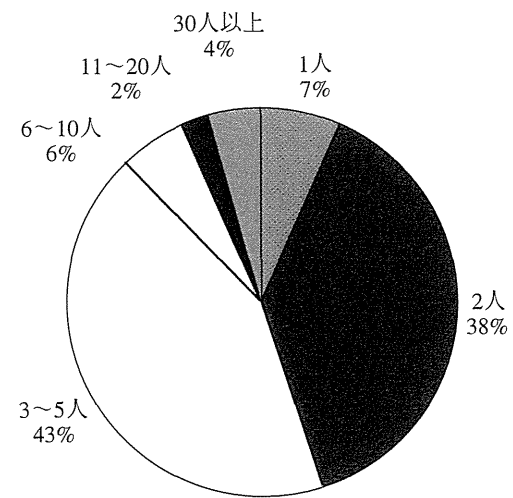
- ・年齢構成とグループ構成より、回答者の約半数は親子連れの家族となっている。
- ・家族連れやカップルを構成する 20 代、30 代の利用 (それぞれ 22%) が多い。
- ・60 代以上のシニア世代 (23%) は、20 代、30 代と同程度の利用となっている。



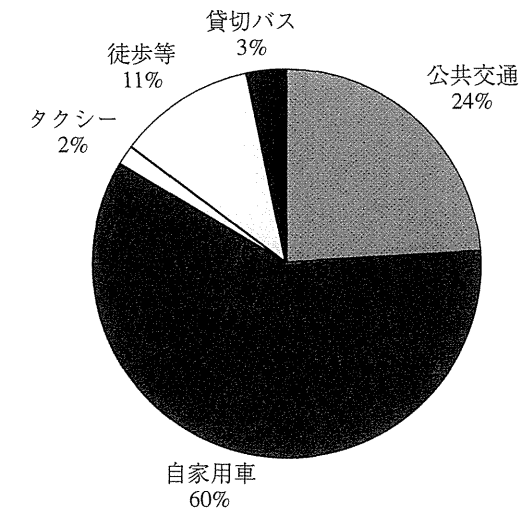
- ・ グループの構成人数は、2～5人がほとんどを占め（81%）、小グループでの利用が大半を占めている。
- ・ 市内、近郊区からの利用が大半を占め（82%）、身近な動植物園としての利用が中心となっている。

- ・ 自家用車による来園（60%）が中心となっている。
- ・ 徒歩等による来園（徒歩、自転車、バイク：11%）が目立ち、近隣からの利用が一定量存在する事がわかる。
- ・ 到達時間は、1時間以内が大半を占め（78%）、近隣からの利用は多いことを裏付けている。

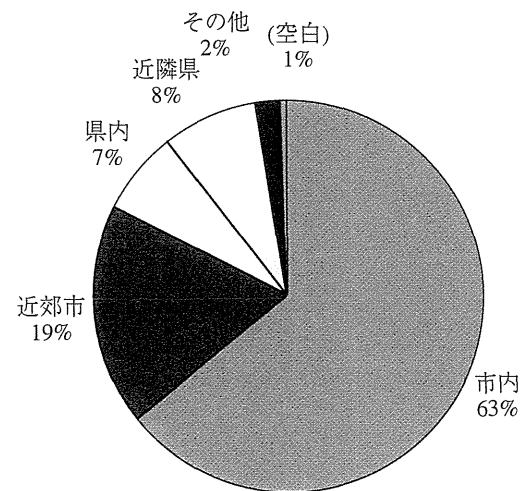
Q 1 C-2：グループ人数の構成



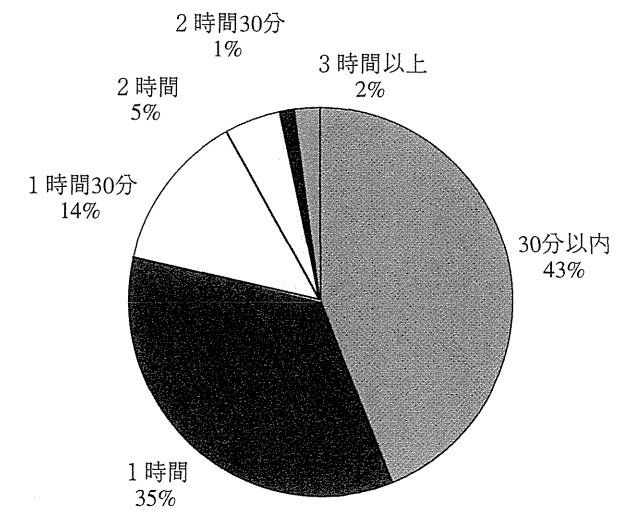
Q 1 E：利用交通機関



Q 1 D：起点



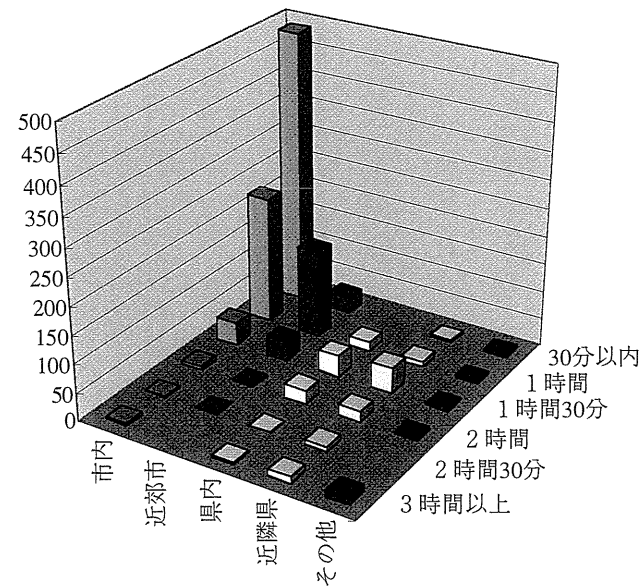
Q 1 F：到達時間



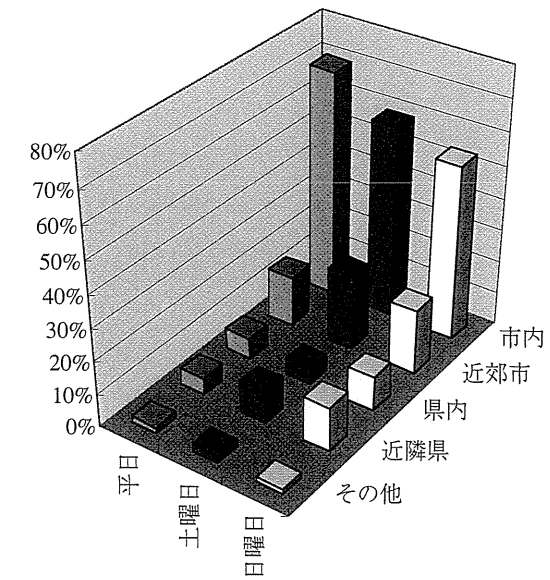
- ・ 到達時間と起点の相関を見ると、利用者の大半は近郊より1時間以内の時間をかけて来園していることがわかる。
- ・ 利用交通機関と起点の相関を見ると、遠方ほど自家用車の利用率が上がっている。

- ・ 起点と曜日の相関を見ると、休日は遠方からの利用が若干多くなるが、大きな変化はなく、やはり近隣からの利用が中心となっている事がわかる。
- ・ 交通機関と曜日の相関を見ると、休日では自家用車の利用率が上がっている。

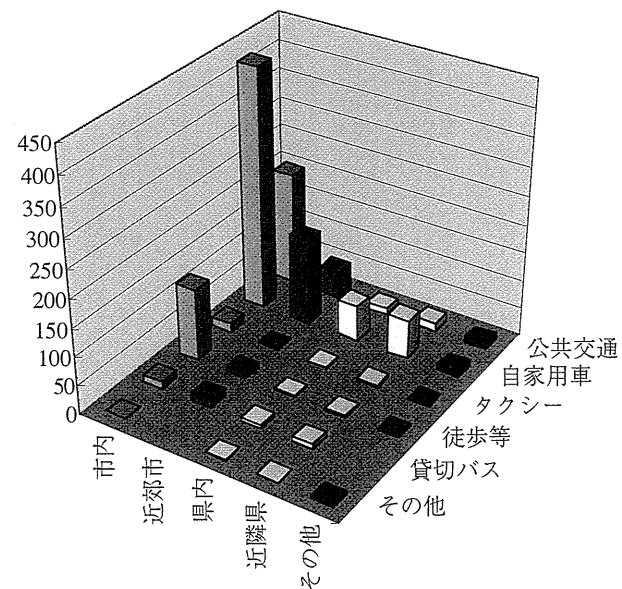
Q 1：到達時間と起点との相関



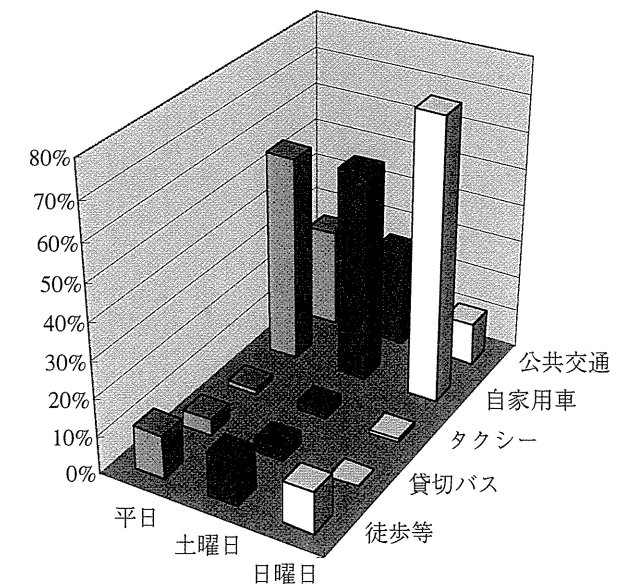
Q 1：起点と曜日の相関



Q 1：利用交通機関と起点との相関



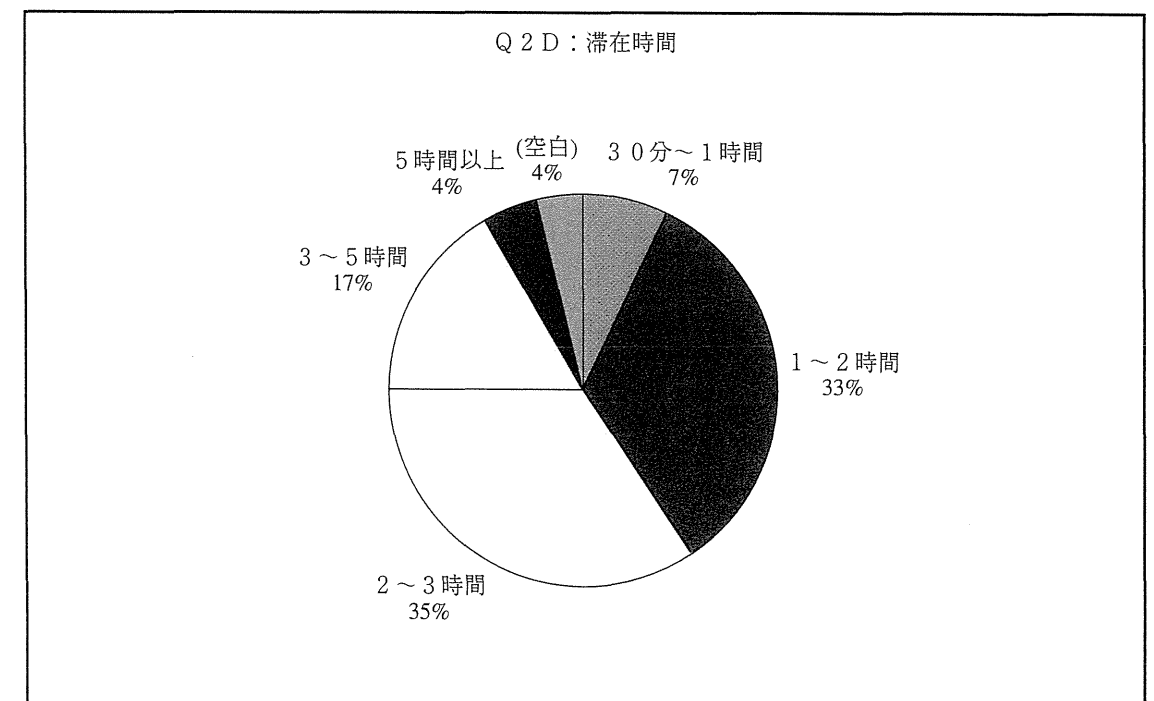
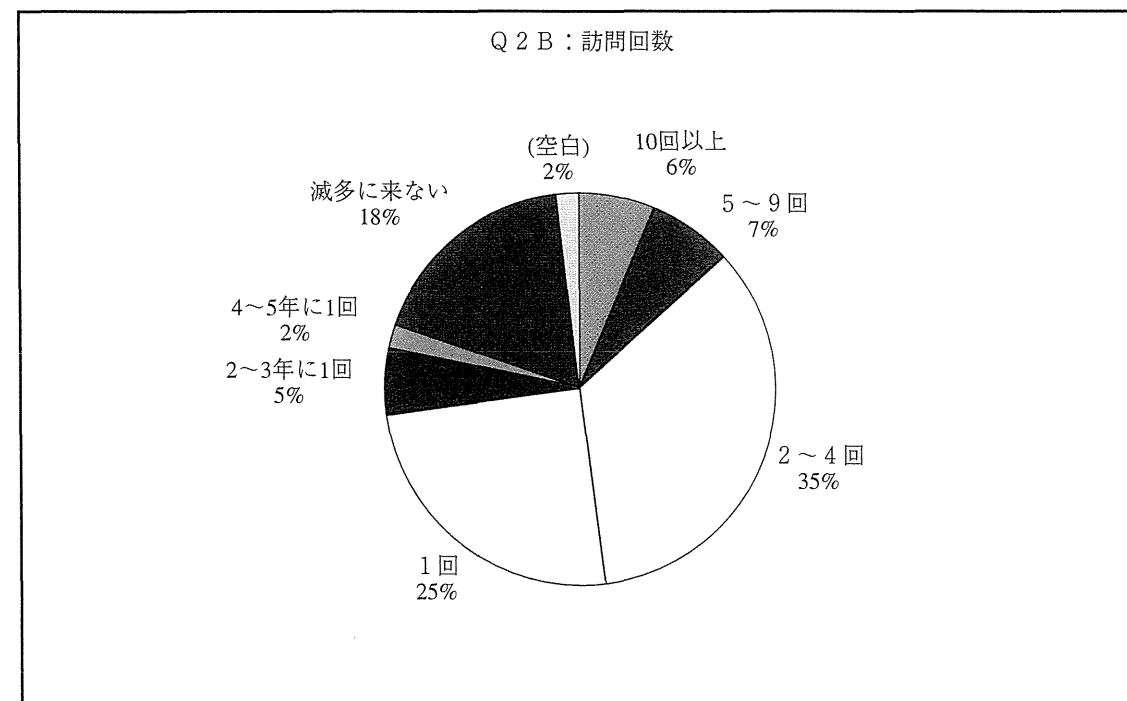
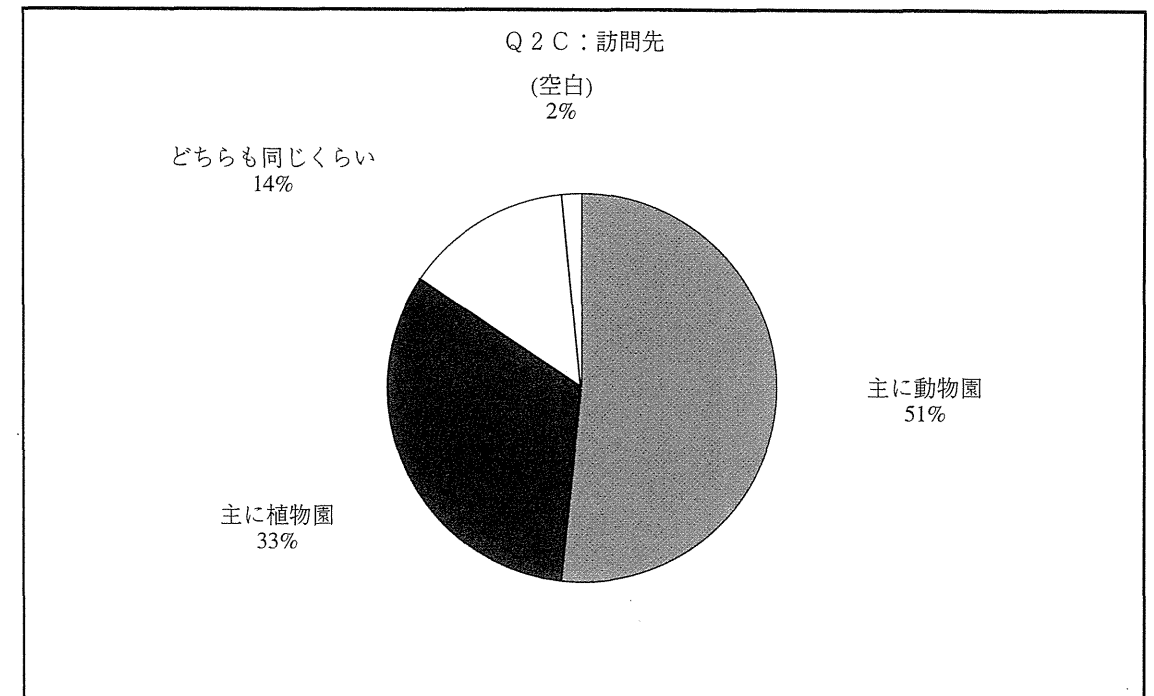
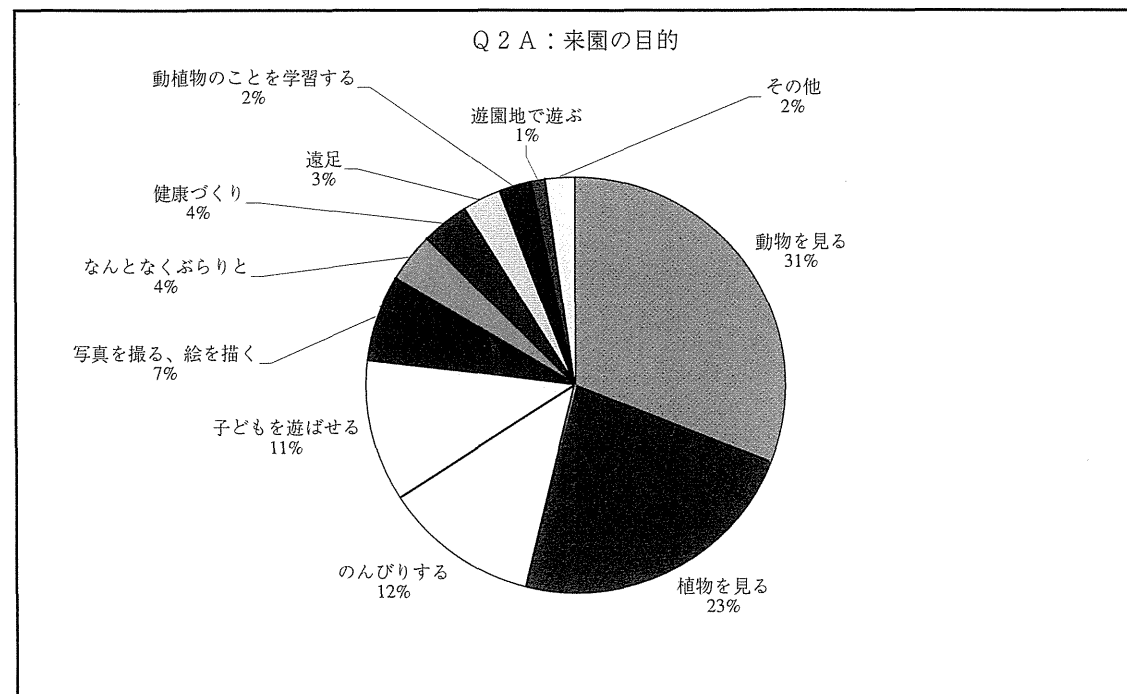
Q 1：交通機関と曜日の相関



(3) 動植物園の利用状況

- ・ 来園の目的は、動植物を見ることとしている人が約半数（54％）を占め、「動植物園」としての利用が中心となっている。また、のんびりする、なんとなくぶらりと、健康づくり、など公園的な利用をしている人々の比率（20％）も多い。
- ・ 遊園地を来園の目的としている人は少なく（1％）、計画地に来園する上での目的施設とはなっていない。
- ・ リピーターの数が多く（年1回以上：73％）、このことから近郊利用型の動植物園であることがうかがえる。

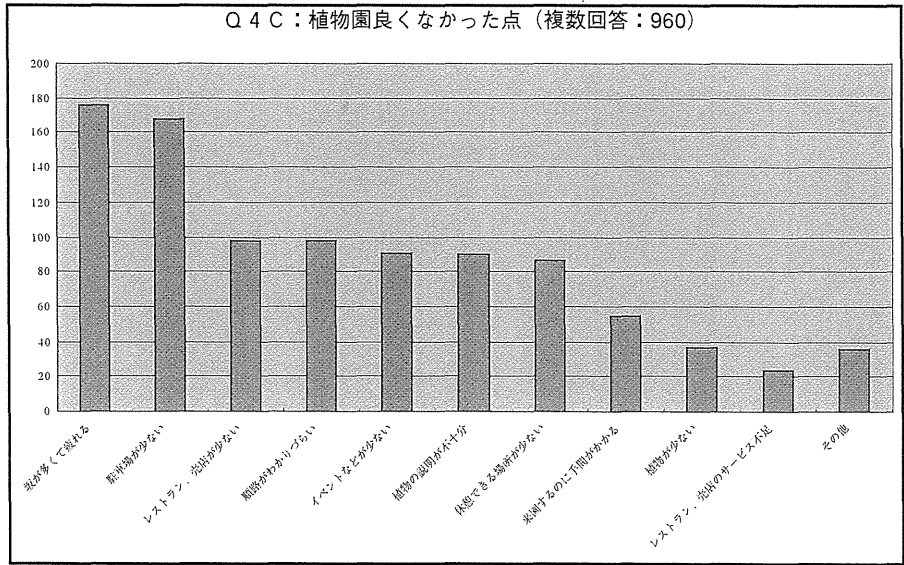
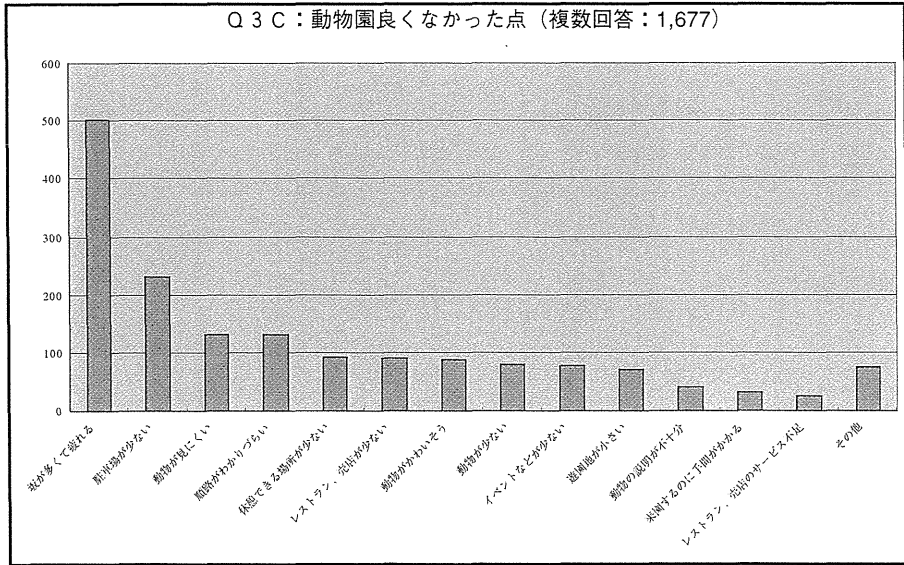
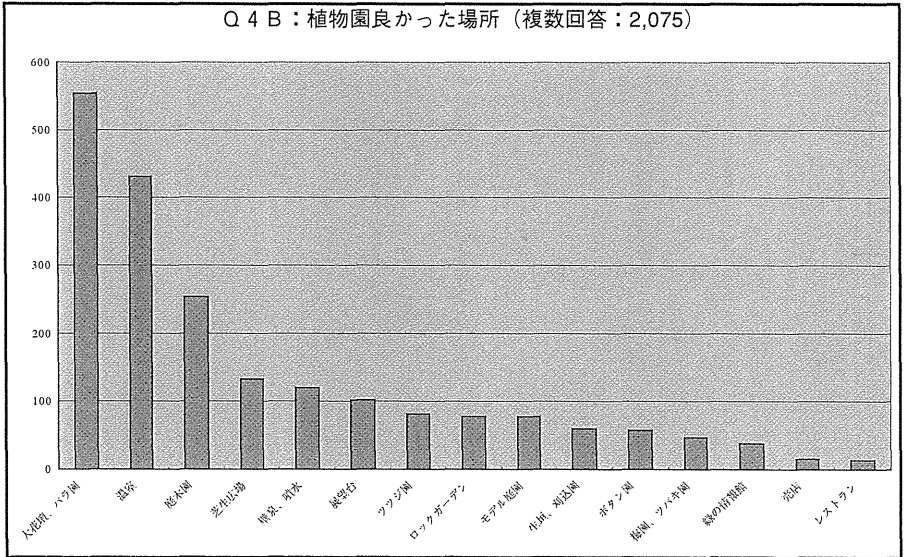
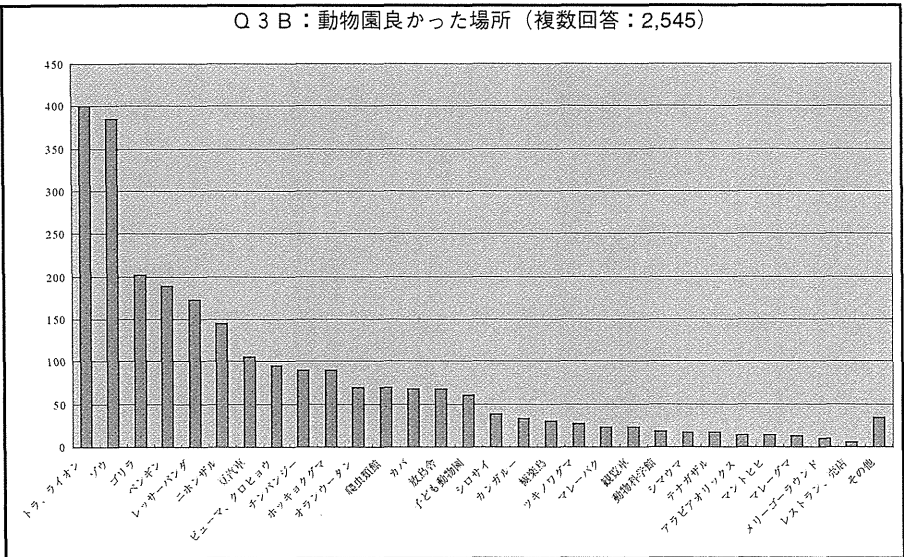
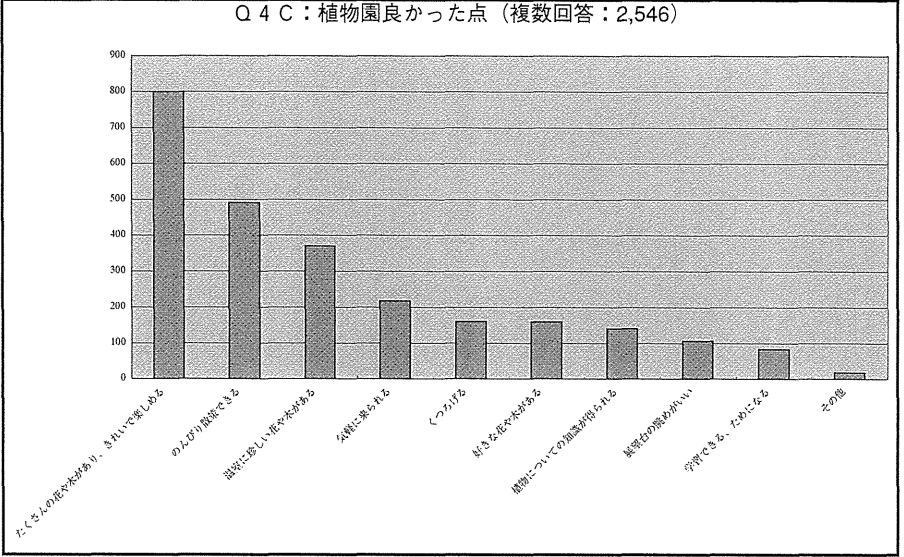
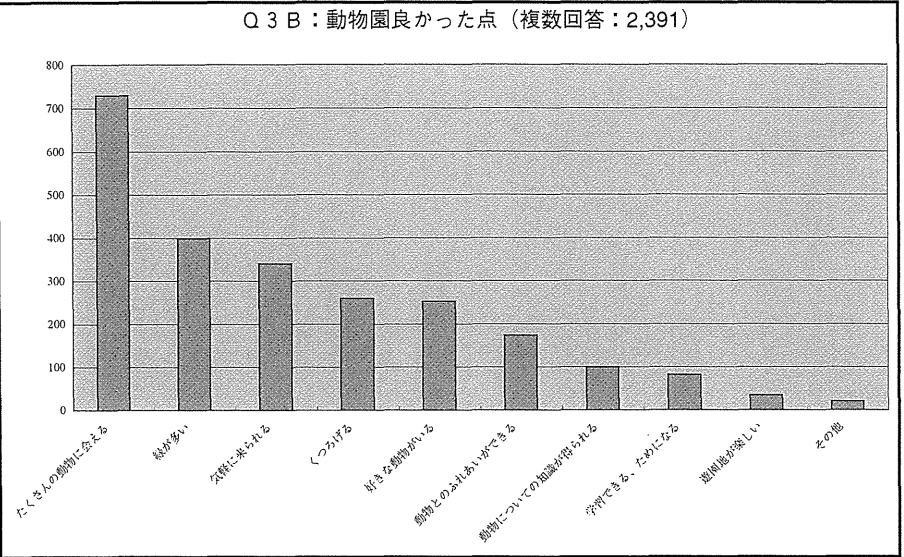
- ・ 訪問先地として、動物園を上げる人が若干多く、動植物園を満遍なく利用している人の比率が低い（14％）。
- ・ 滞在時間は、3時間までの人が大半を占めている（75％）。



(4) 動植物園への意見・要望

- ・ 動物園の良かった点として、一般的な人気動物を上げる人が多く、動物園の一般的傾向を示している。
また、豆汽車（第7位）以外の遊具は、総じて人気が低い。
- ・ 動物園の良くない点として、急坂と駐車場の少なさを上げている。

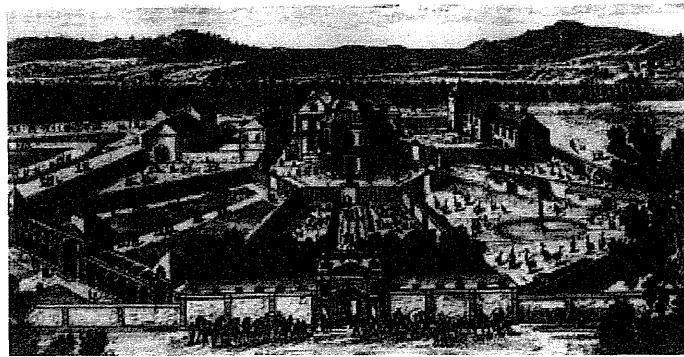
- ・ 植物園の良かった点として、主要施設となる大花壇、バラ園や温室、庭木園を上げる人が多い。
- ・ 植物園の良くなかった点としては、動物園同様の結果が出ているが、地形条件の違いから、急坂の比率が下がっている。



参 8. 動物園の歴史

〔起源〕

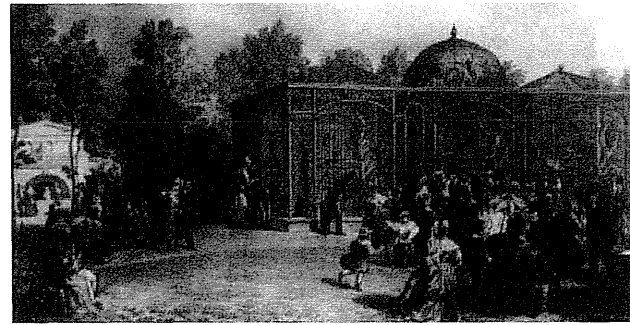
- 古い記録では、紀元前 1000 年頃、エジプト、インド、中国などの王侯貴族による動物コレクションの存在が知られている。しかしながらこれらコレクションは、王侯貴族の富と権力の誇示や趣味の範疇として発展してきた。この時代の動物園（メナジェリーと呼ばれる）の現存例としてウィーンに近いシェンブルン動物園（1752 年設立）がある。



ベルサイユのメナジェリー
（中央の屋敷中心の幾何学的な配置となっている）

〔近代動物園の始まり〕

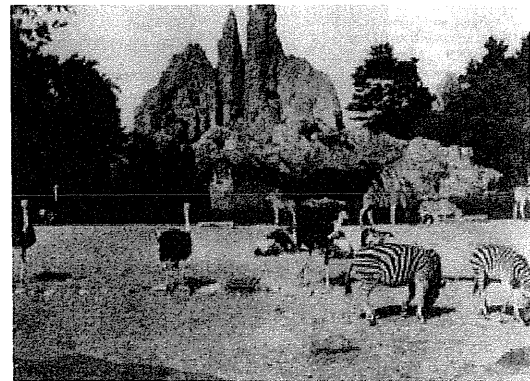
- 自然科学、教育の場としての一般市民との関わりを持った動物園は、ロンドン動物園（1828 年創立）が契機となっており、その後、ヨーロッパや米国の各都市に次々と動物園が設立された。



初期のロンドン動物園（サル舎）

〔動物展示の発展〕

- 動物展示の大きな変化は、モートや近景と遠景との関連性を重視したパノラマ式の展示を取り入れたドイツのハーゲンバック動物園（1907 年設立）が最初とされ、今までの檻や柵に囲まれた展示からの脱却が図られた。
- 現在は、生息地を含めた動物の姿を展示することや、動物の行動を積極的に見せることをめざした展示など、様々な試みが行われている。



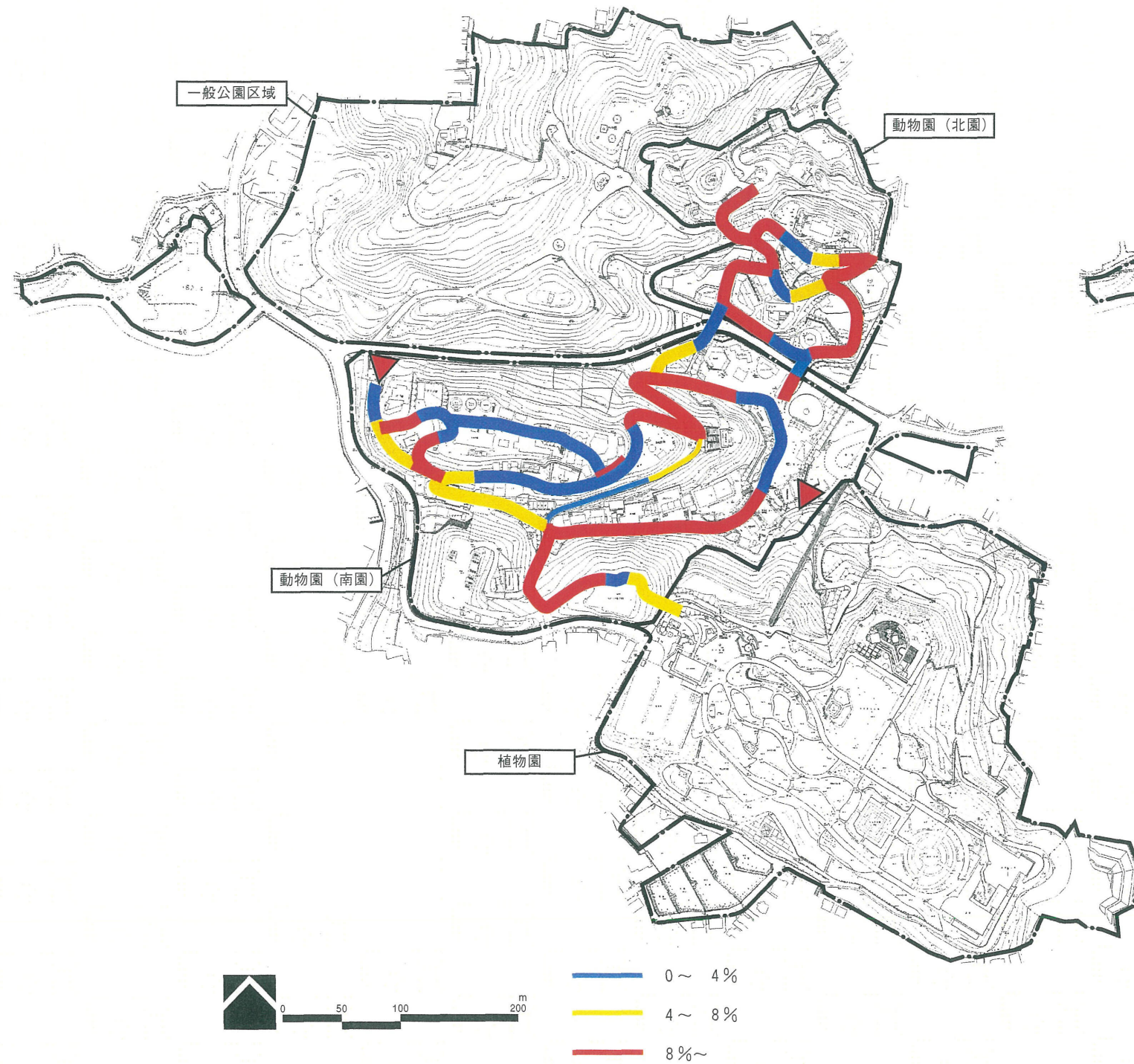
ハーゲンバック動物園（アフリカ展示）

〔日本における動物園の始まり〕

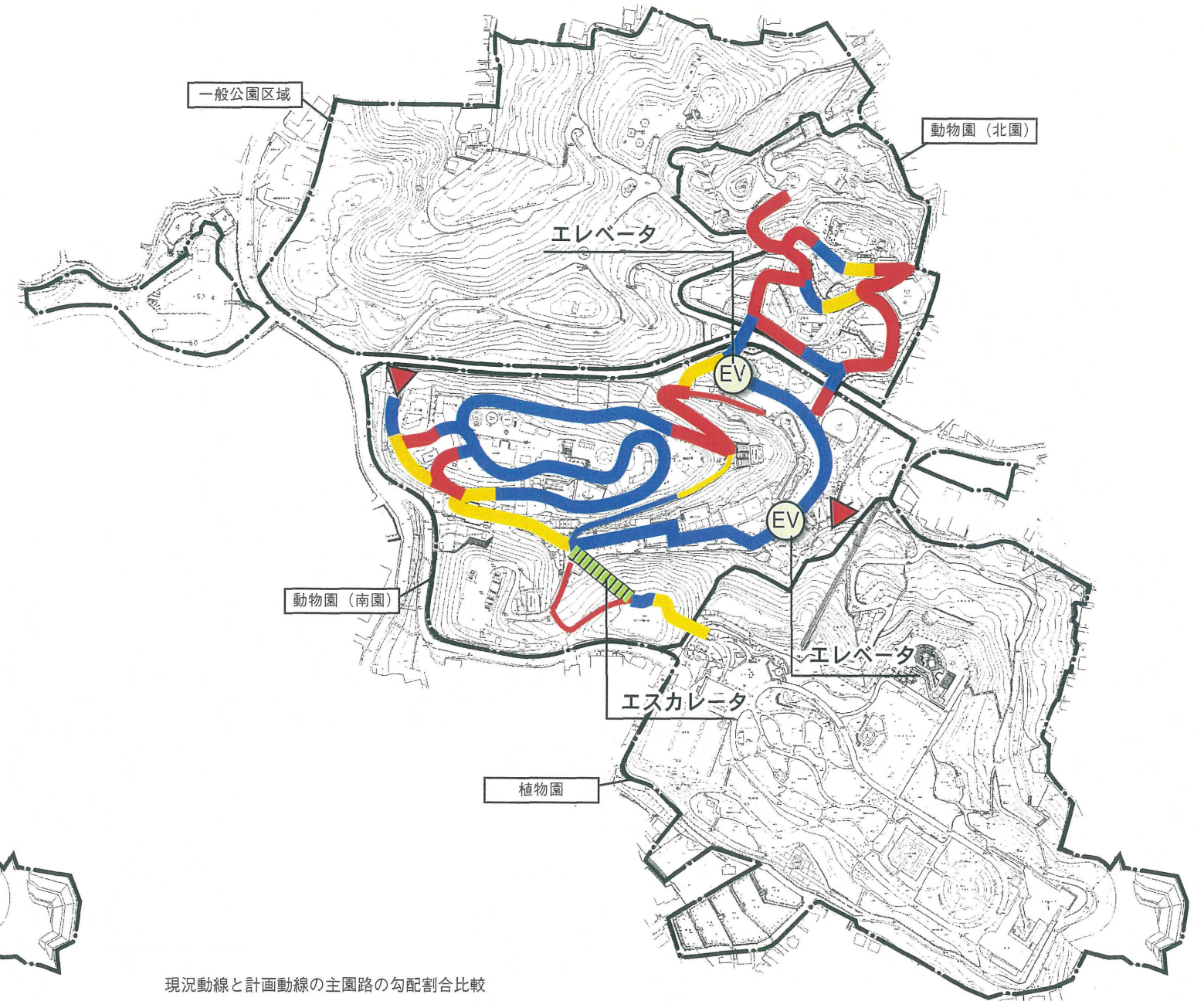
- 日本では、1882 年に農商務省博物局により現在の上野動物園が設立されており、その後、京都、鹿児島、大阪などに設立された。

参9. 現況動線と計画動線の比較

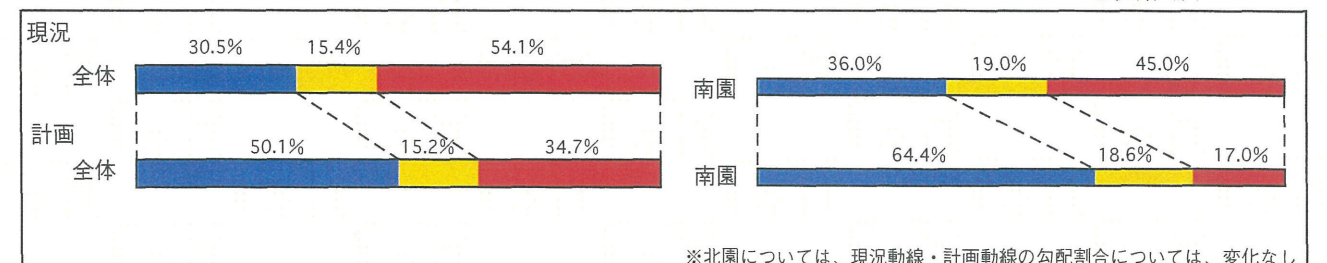
現 況



計 画



現況動線と計画動線の主園路の勾配割合比較



参 10. 展示施設イメージ

(1) アジア熱帯の溪谷エリア

1) テーマ

アジアの自然環境とそこで生息する動物を知り・学ぶための展示として、生物の多様性に富み、特徴的な動物が多く生息する最も魅力的な環境の一つである“熱帯雨林”をテーマとして取り上げる。

2) 展示方法

「アジアの熱帯雨林」の環境の多様性、そこで生息する動物の行動特性（樹上生活等）等を的確に伝えるため、生息地環境再現型の展示方法を取り入れる。また、樹上の動物との棲み分けや多様な植物環境を伝えるため、水辺の展示も行う。環境再現においては、緑量感を出す常緑樹やヤシ類、ツル性植物等の特徴的な植物を導入し、演出を図る。

3) 配置

緑豊かな森林であり、樹上で生活する動物が豊富に生息する熱帯雨林の環境を表現するため、本園の敷地特性である豊かな樹林や敷地の高低差を最大限活用できる正門西側の谷状地に配置する。

4) 展示動物例

樹上生活：オランウータン、テナガザル、ネコ科動物、サイチョウ 等

水辺： アジアゾウ、トラ、マレーバク 等

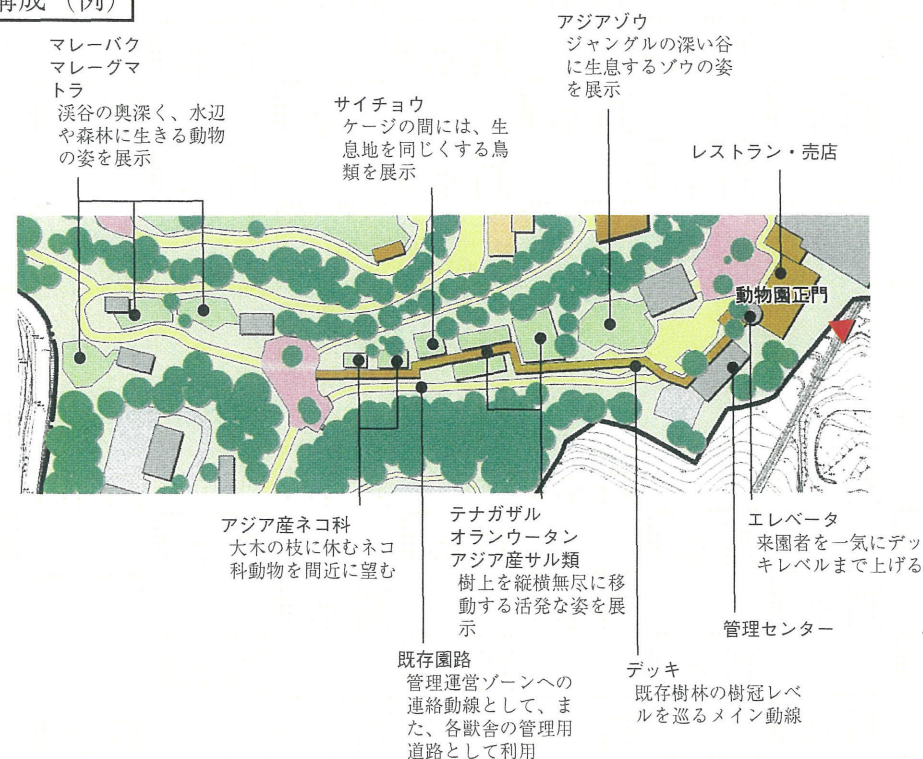
5) 展示植物例

樹上生活：（骨格となる現況樹）クスノキ、カシ類

（生息地の雰囲気を作る植栽樹）バショウ類、アメリカデイゴ、ツル性植物 等

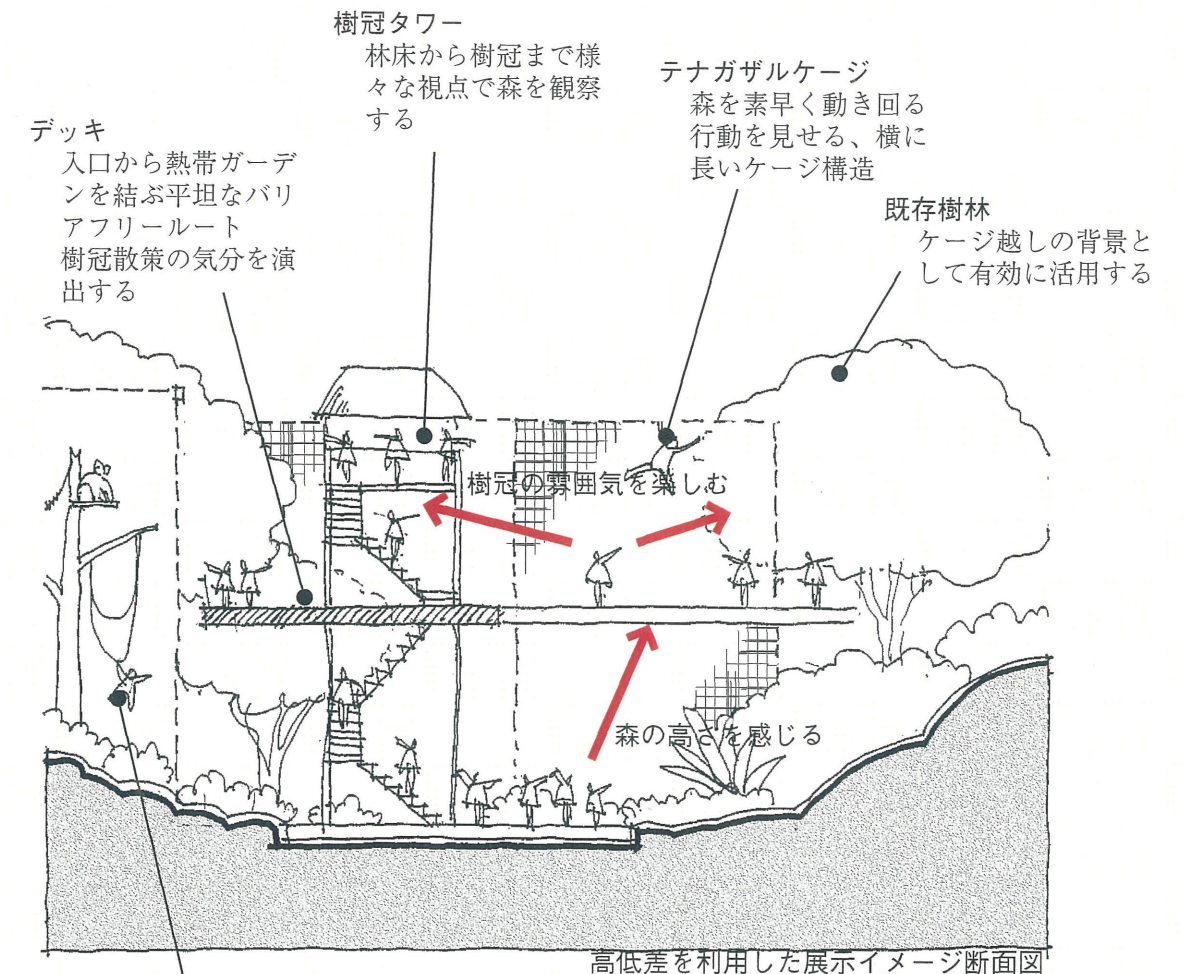
水辺： カンナ、ジンジャー、シュロカヤツリ、ツル性植物 等

展示構成（例）



アジア熱帯の溪谷エリア
展示構成イメージ図

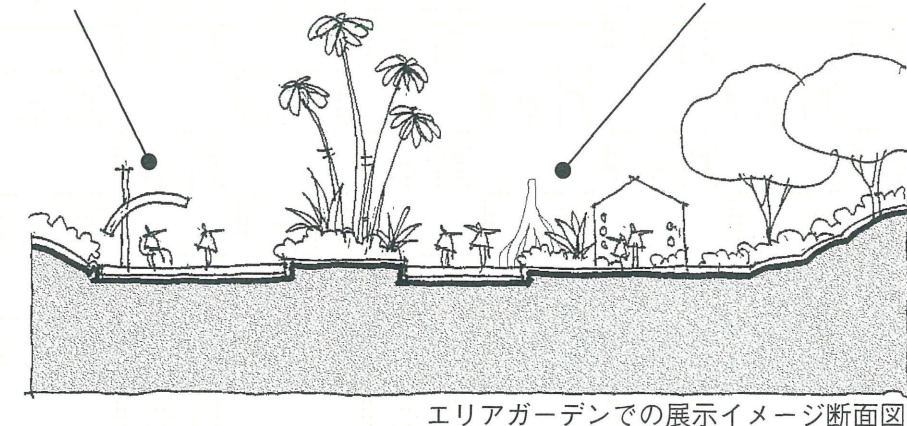
展示イメージ（例）



オランウータンケージ
地上から樹冠まで自由に行き来できる擬木等の遊具

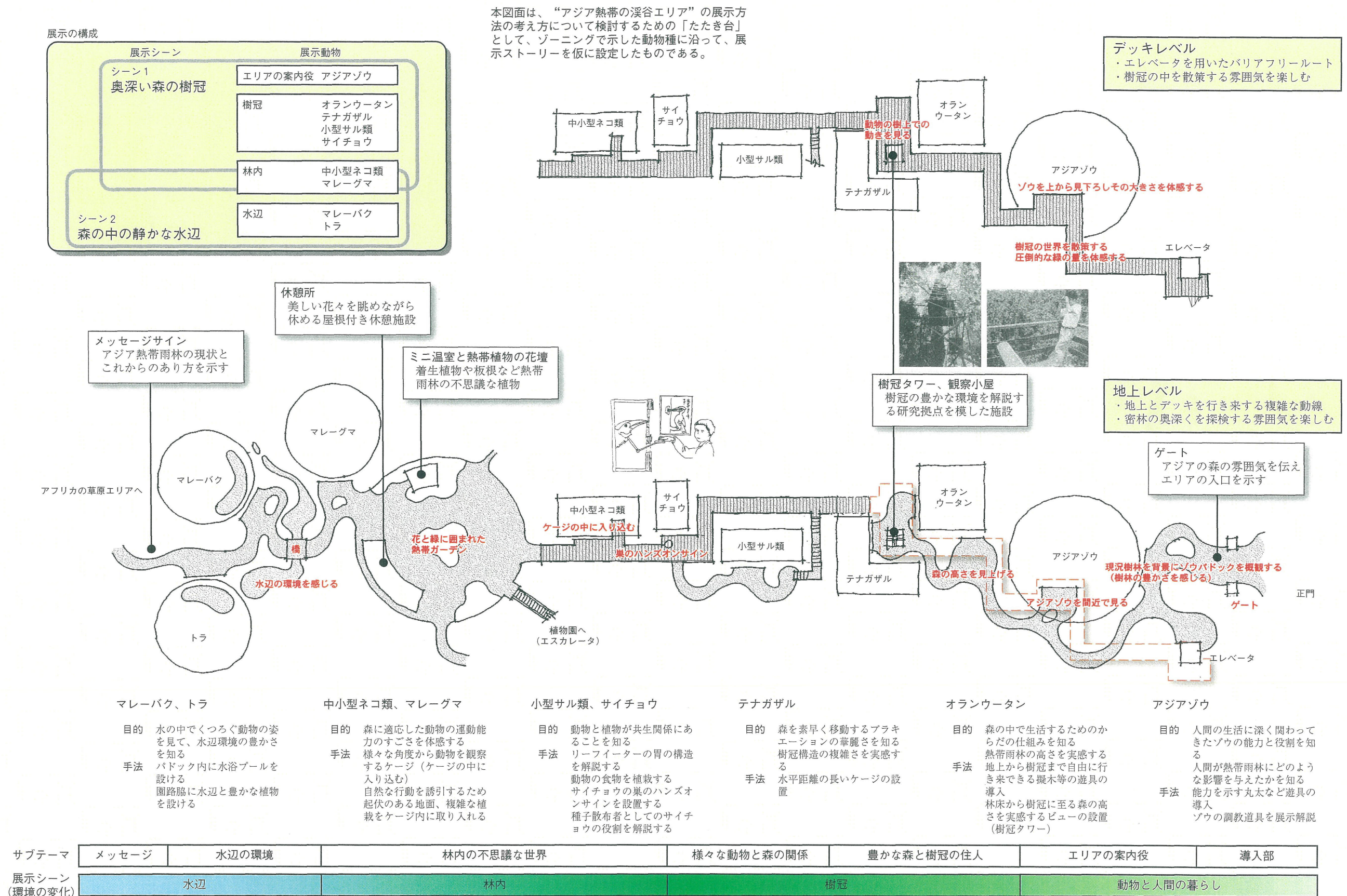
休憩所
美しい花々を眺めながら休む

熱帯植物の紹介
温室や板根のレプリカなどを用い、熱帯特有の植物を紹介する



エリアガーデンでの展示イメージ断面図

[参考] アジア熱帯の溪谷エリア・展示ストーリー（例）



(2) アフリカの草原エリア

1) テーマ

人気動物が集中しているアフリカ産動物を集約し、その種と環境との関わりを表現するためサバンナをテーマとして取り上げる。

2) 展示方法

「熱帯アジアの溪谷ゾーン」とまったく異なる自然環境であるサバンナエリアを、「熱帯アジアの溪谷ゾーン」と比較しながら体感してもらうため、ここでも生息地環境再現型の展示方法を取り入れる。生息地環境再現においては、マメ科の木本やイネ科の草類を中心に導入し、サバンナの乾燥した雰囲気 연출する。

3) 配置

最も平坦地が確保できる現こども園付近にサバンナを配置する。

4) 展示動物例

キリン、シマウマ、ダチョウ、ライオン、カバ 等

5) 展示植物例

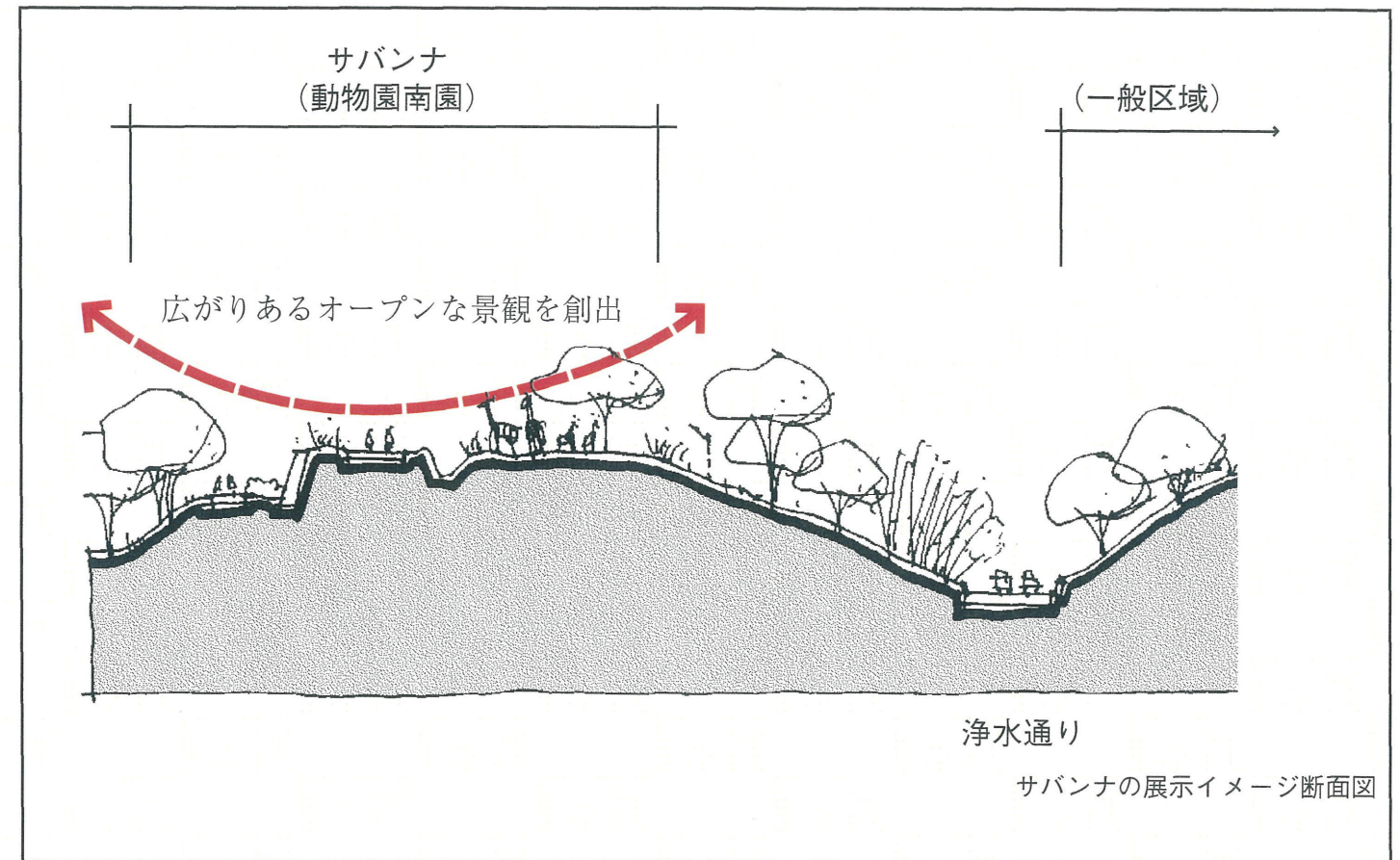
(生息地の雰囲気を作る植栽樹) アカシア、トネリコ、エンジュ、ネムノキ、イネ科草本 等

展示構成 (例)



アフリカの草原エリア展示構成イメージ図

展示イメージ (例)



(3) 日本の自然エリア

1) テーマ

ツシマヤマネコをシンボルとして、郷土の自然とそこで生息している動物との関わりを展示することにより、身近な自然環境の大切さ、それを守る上での動物園の役割などを伝えることをテーマとして取り上げる。

2) 展示方法

ここでは、生息地環境を体感するよりも身近な自然の大切さを直接的に訴えかけることを重視し、人による解説やパネル等による説明を、動物展示とともに重点的に取り入れる。

3) 配置

現在、ツシマヤマネコ繁殖施設があり、比較的静かで人為的影響の受けにくい北園北側に配置する。

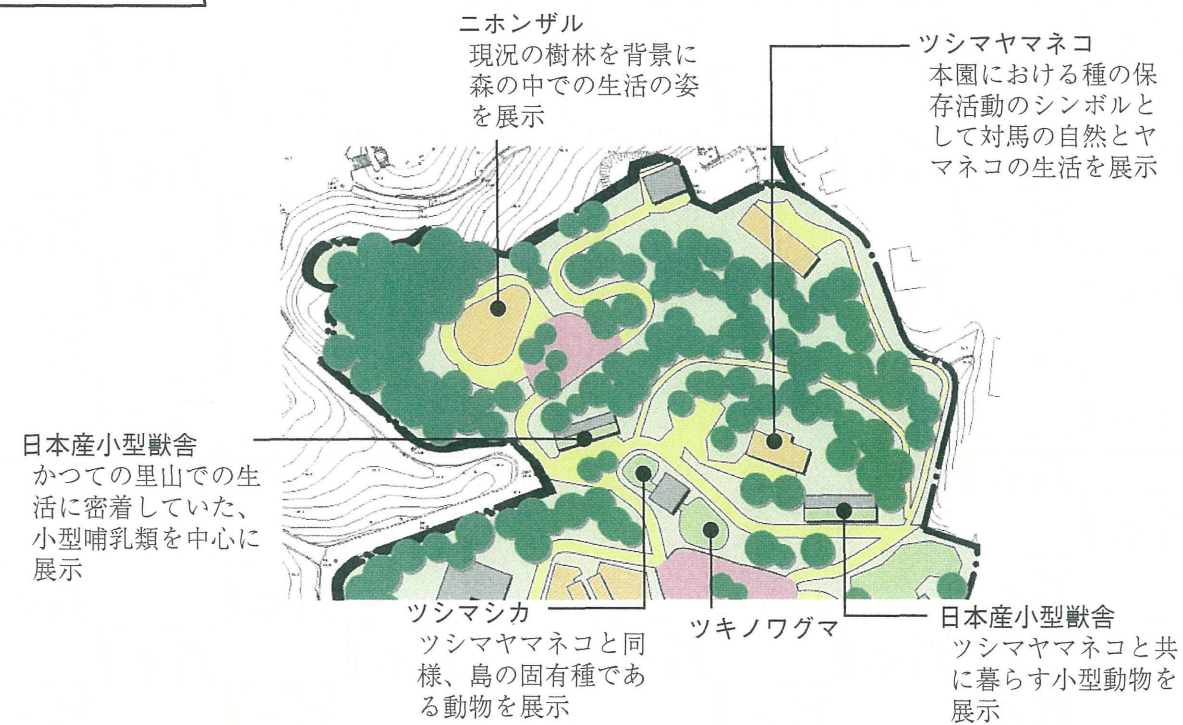
4) 展示動物例

ツシマヤマネコ、ツシマシカ、ニホンザル 等

5) 展示植物例

(骨格となる現況樹) クスノキ、カシ類、ツバキ類 (花木)

展示構成 (例)



日本の自然エリア展示構成イメージ図

(4) 動物行動、環境への適応エリア

1) テーマ

野生動物の運動能力や環境への適応力、形態や行動の特性などを来園者にわかりやすく伝えることをテーマとして取り上げる。

2) 展示方法

動物の行動特性を考慮し、かつ環境エンリッチメントに配慮した遊具や、様々な適応の姿を解説的に比較しながら展示する方法を取り入れる。

3) 配置

生息地環境再現型の様にまとまったエリアが必要でないため、高低差が大きくまとまった敷地が確保しにくい北園とそこに接する南園北側を中心に配置する。

4) 展示動物例

動物行動：チンパンジー、ペンギン 等

環境適応：は虫類 等

展示構成 (例)

小型サル類
ゴリラ
ヒヒ類
チンパンジー
様々な霊長類を展示し
それぞれの行動特性を
紹介する

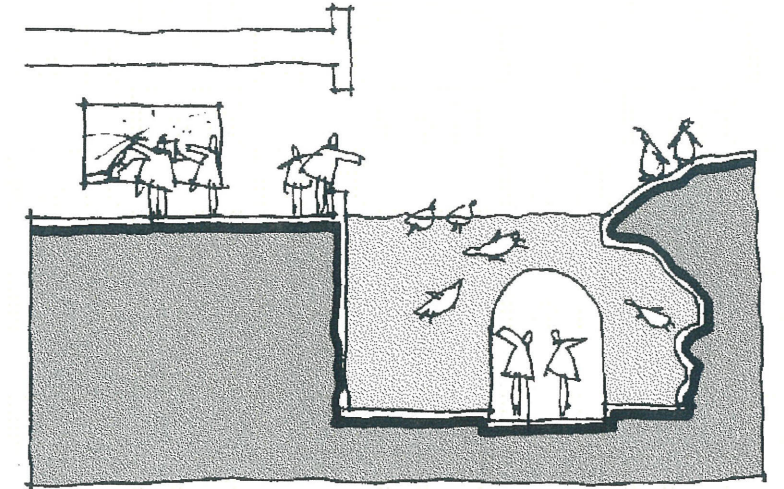


は虫類、ペンギン (屋内施設)
地球上の様々な環境に適応しているは虫類や水中に適応した鳥類であるペンギンなどの動物と生息地環境を展示し、環境と動物の関係を説明する

レッサーパンダ
木登り名人

動物行動・環境への適応エリア展示構成イメージ図

展示イメージ (例)



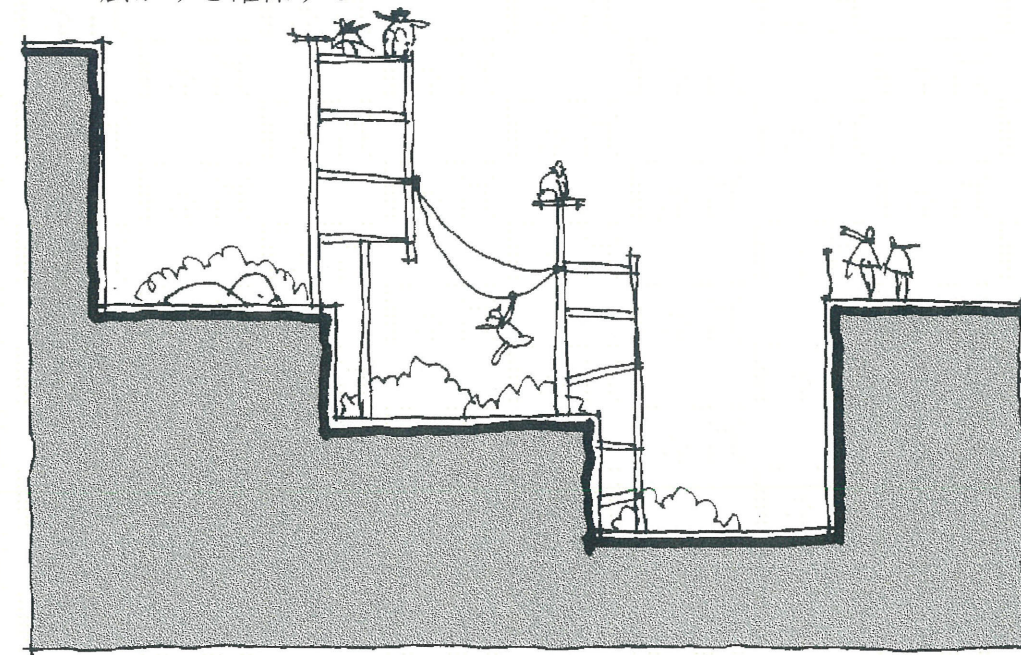
ペンギンプール

地上や水面と水中でのペンギンの
行動の違いを観察するプール

水域で生活する動物の展示イメージ断面図

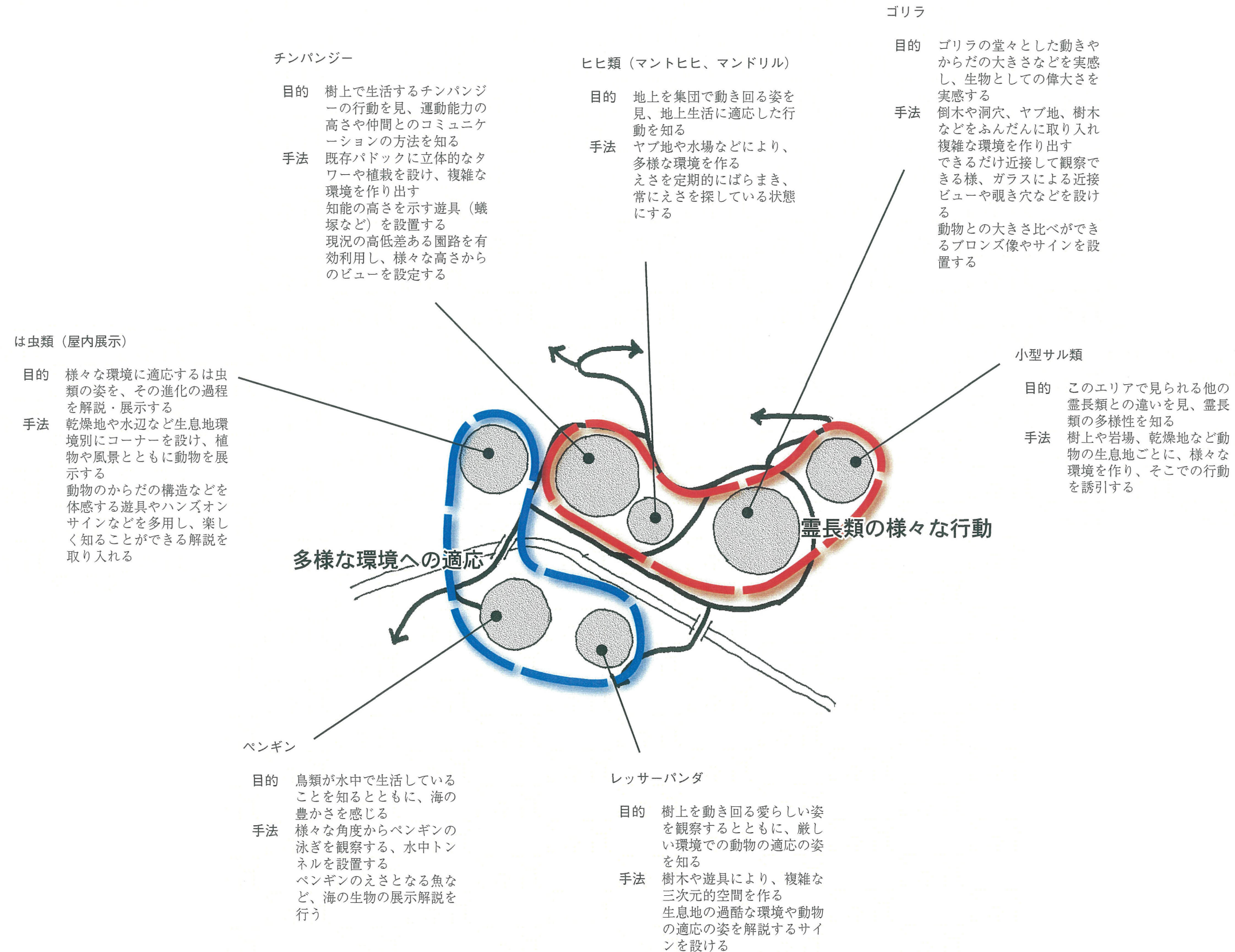
チンパンジータワー

既存の展示施設を活用し、ジャングルでのチンパンジーの行動パターンを引き出す、人工的なタワーを設置することにより垂直方向の広がり確保する



人工的な装置を導入した展示イメージ断面図

〔参考〕 動物行動、環境への適応エリア・展示ストーリー（例）



(5) バードガーデン

1) テーマ

植物園における展示をベースに、美しい鳥類と季節の花々、美しい樹林などにより自然の美しさを強調する。

2) 展示方法

生息地の環境をモチーフとして、造園修景の技術を凝らしたガーデンとしての演出を行うとともに、鳥が生活している自然な姿を観察できるような展示を行う。

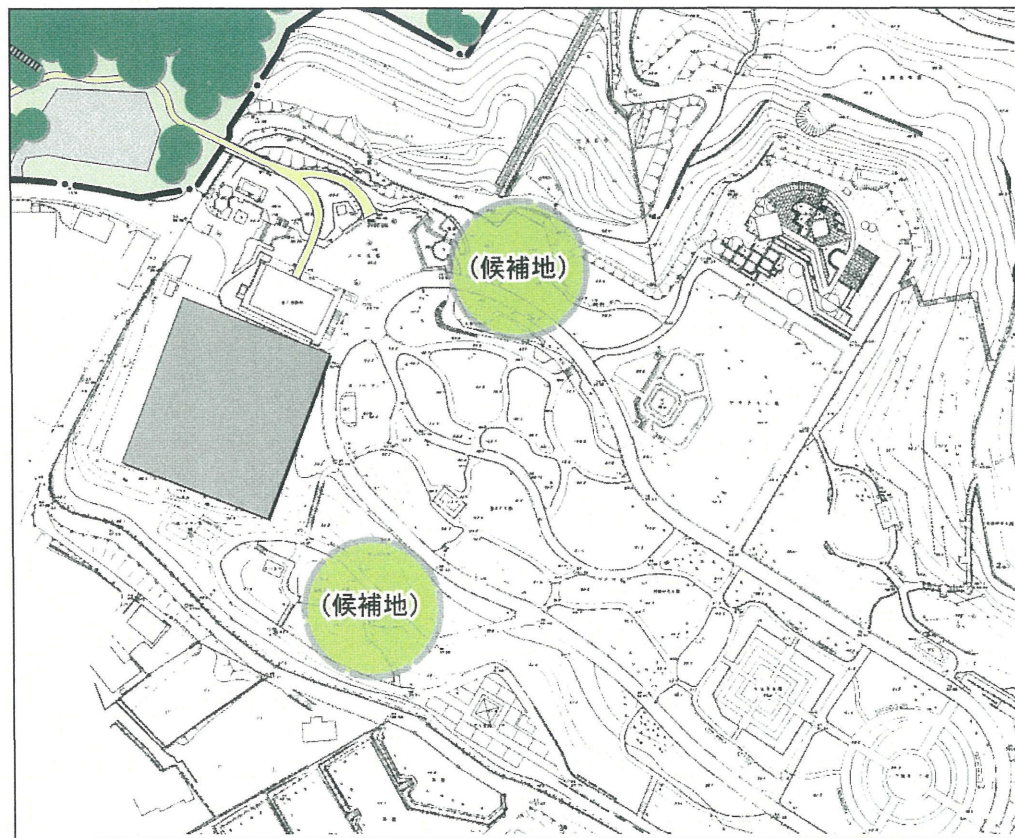
3) 配置

新しい市民ニーズに合わせて、今後、植物園全体のあり方を見直すなかで、下図の候補地などから、動物（鳥類）展示の取り入れ方及び配置を、以下のような視点で検討する。

- ① 植物と動物（鳥類）が融和した展示ができる
- ② 植物園の機能を維持・向上できる
- ③ 動物園からの観覧動線上連続性を持てる
- ④ 観覧園路のバリアフリー対応が可能である

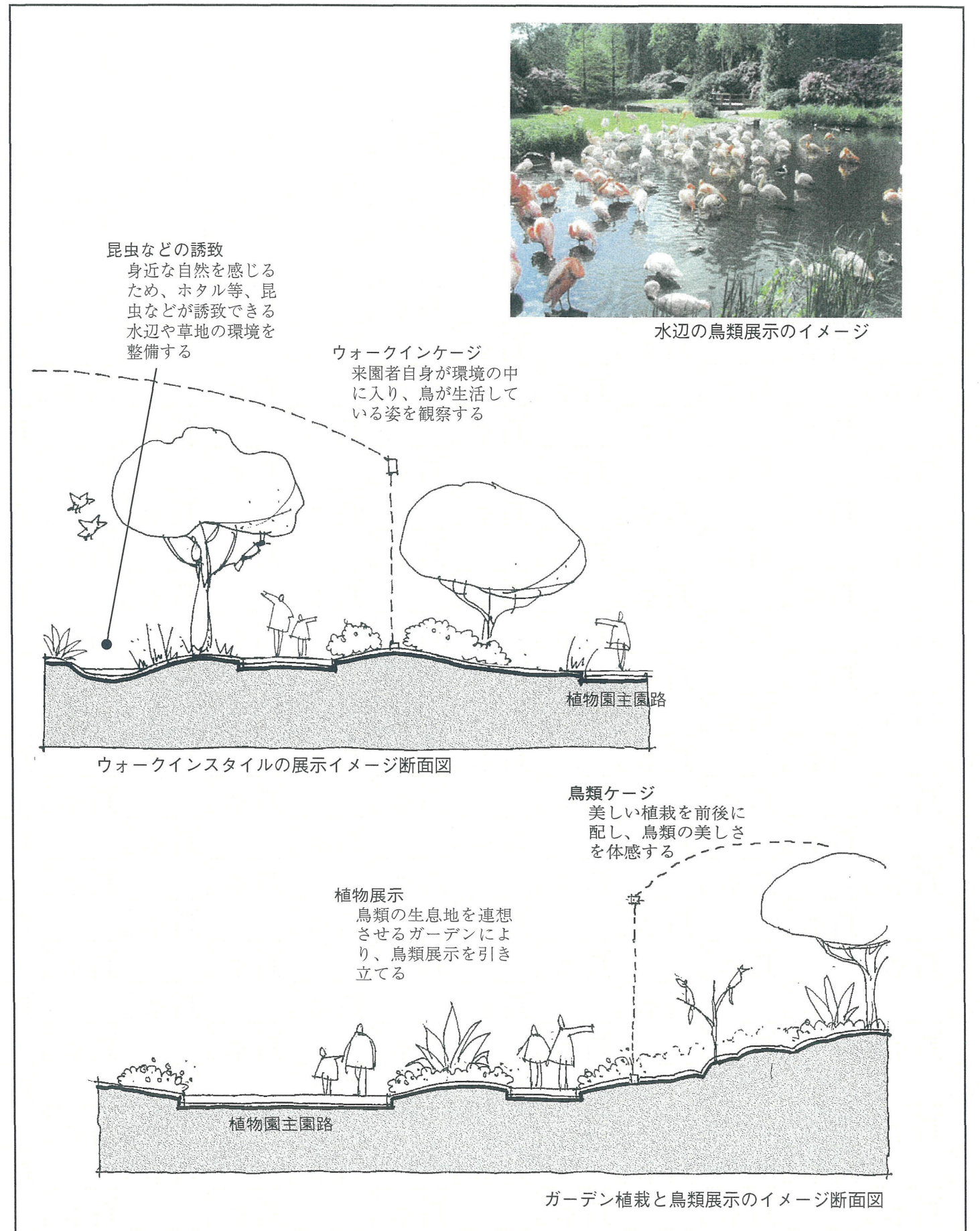
4) 展示動物例

極楽鳥、クジャク、インコ類、水禽類 等



動物（鳥類）の移転を検討する候補地

展示イメージ（例）



参 11. 学習・解説計画

(1) 基本的考え方

- 動植物園における、学習・教育機能は、動植物とのふれあいを通して、市民へ学習の場や機会を提供するものとして、以下の3つ機能を担うものとする。

環境学習の場

現代の動植物を取巻く野生生物の減少、種の絶滅、環境破壊等の様々な問題を通して、生態系、環境共生等について学べる場をつくる

情操教育の場

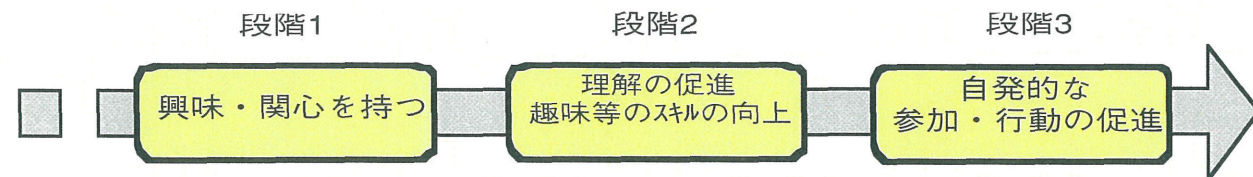
生き物の温もりを肌で感じたり、生きていくために発達した様々な能力や行動を知ること、生命のすごさや尊さ、また他の生き物や人を思いやる気持ちを育むことができる場をつくる

生涯学習の場

趣味や教養を深める場、ボランティア活動等の機会を提供し、子供のためだけでなく、大人の知的欲求や社会参加の意欲を満たす場をつくる

- 学習、解説機能を展開する上では、利用者の興味レベル、理解レベルに応じたプログラムを提供する。

興味レベルに応じた学習目標



(2) 学習・解説の手法及びプログラムの構成（例）

学習・解説の手法としては、セルフガイド及びガイドツアーを中心として、福岡市動植物園にふさわしい学習のテーマを設定しながら展開する。その他、リピーターでも楽しめる様々な企画イベントの提供や、動物園の運営等にも参加意欲のある利用者に対して、ボランティアとして活動頂くための養成プログラムも併せて提供する。

※ ここでいうプログラムとは、動物園で行う学習のために計画的に用意する、各種教室やイベント等の総称として用いている。

セルフガイドプログラム

利用者が自分のペースやレベルに応じて自由に観覧。
解説サインやリーフレット、ガイドブック等を頼りに学習。

ガイドツアープログラム

インタープリターの引率のもと、観覧や体験を実施。
インタープリターの解説を基に、リアルタイムで柔軟な対応が得られる学習。
事前のレクチャーや事後のフォローによる、より分かりやすい学習。

キッズツアー
スクールツアー
アジアの動植物ツアー
希少動物見学ツアー
バックヤード見学ツアー
夜の動植物園ツアー 等々

イベントプログラム

動植物に関わる様々なテーマの企画への参加、体験。

スポットガイド
子供飼育体験教室
動植物画コンテスト
動植物写真コンテスト
春、秋の野点
グリーンウォーク
春の七草粥 等々

ボランティア養成プログラム

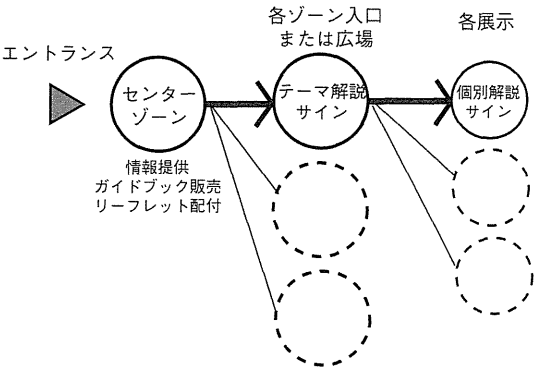
「我々の動植物園」として、積極的に動植物園の運営に参加する人材を育成

インタープリター養成講座
プログラム開発講座
広報、情報誌作成講座
動植物の健康管理講座 等々

(3) 学習プログラムの展開例

○セルフガイドのしくみ

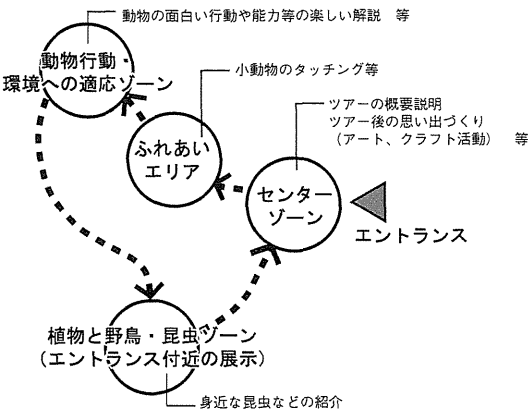
セルフガイドは、利用者の興味や年齢等に応じて複数のテーマのガイドブックやリーフレットをセンターゾーンで配付し、各ゾーンの入口や広場に設けた解説サイン等を頼りに、園内を巡り観覧する。



○ガイドツアーの展開（例）

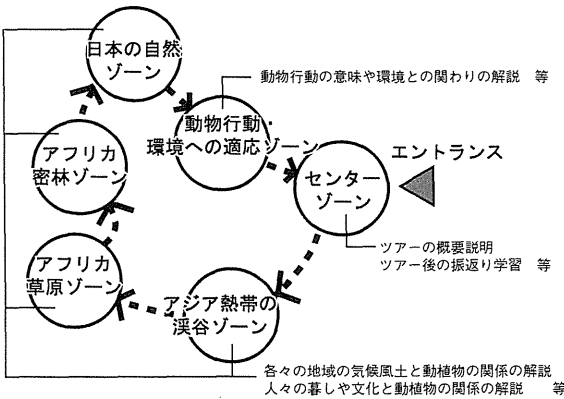
＜キッズツアー＞

幼児から小学校低学年、またその家族を対象に、生き物への愛情や興味を育む事を中心にしたツアー



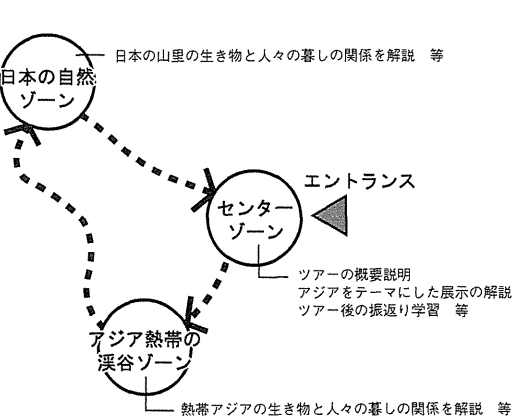
＜スクールツアー＞

小学校高学年～中学生を対象に、園内を一巡しながら、動植物とその環境、人々の関わりまでをトータルに解説するツアー



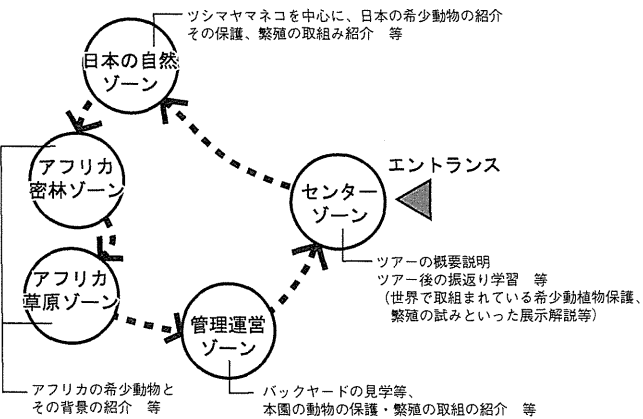
＜アジアの動植物ツアー＞

アジアの動植物を中心に、生き物と環境、人の関わりを解説するツアー（スクールツアーのコンパクト型）



＜希少動物見学ツアー＞

動物園のもつ、希少動物の保護繁殖の取組を紹介しながら、世界で起こっている野生生物の減少や環境問題等について解説するツアー



(4) 主要学習施設の機能

主要学習施設の機能一覧

動植物科学館

学習・教育機能	備 考
情報提供機能	・プログラム、イベント情報の提供 ・ガイドブック販売、リーフレット配付 等
展示機能	・常設展示：（セルフガイド等の出発点として） 例）世界で起こっている動植物の様々な問題 例）世界の希少動物の保護繁殖の取組 例）アジアの動植物と人々の暮らし等の紹介 等 ・特別（イベント）展示： 例）動植物に関わる季節展示 例）動植物に関わるアート作品展示（絵画、写真、工作等）
レクチャー機能	・ガイドツアー等の事前及び事後レクチャー ・動植物に関わる講演 ・工作等の作業
自由学習機能	・情報検索 ・資料、図書利用 ・緑の相談、動物相談窓口
管理・運営拠点機能	・スタッフルーム ・ボランティアルーム

こども園

学習・教育機能	備 考
タッチング機能	・小動物とのふれあい ・ペットとのつきあい方を体験学習
生命の誕生機能	・生命の誕生に立ち会う感動を得る 例）孵卵器、赤ちゃん動物の展示

参 12. 検討委員会

福岡市動植物園再生基本構想検討委員会設置要綱

(名称)

第1条 この委員会は、「福岡市動植物園再生基本構想検討委員会」（以下「委員会」という。）と称する。

(趣旨・目的)

第2条 福岡市動物園は、平成15年8月に開園50周年を迎えるが、施設の老朽化や、動物の飼育・展示環境の狭隘性、駐車場不足、園路が急なこと、サービス機能が不十分なこと、などの課題を抱えている。一方、動物の飼育・展示環境の改善や、環境学習機能、絶滅の危機に瀕している希少動物の保護・繁殖など、これからの動物園に求められる役割を十分果たしきれていない。

委員会は、市民ニーズや時代の要求に対応しきれなくなっている動物園の状況を踏まえ、諸課題の改善や新たな役割への対応を図り、市民がより親しみ楽しめる、新しい時代にふさわしい動物園へと再生するため、その整備・運営のあり方について検討し、再生基本構想を策定することを目的とする。

(所掌事務)

第3条 委員会は、福岡市動植物園再生構想の策定に際し、次に掲げる事項について検討するものとする。

- (1) 福岡市動植物園再生構想の基本理念と基本方針に関すること
- (2) 福岡市動物園の整備・運営のあり方に関すること
- (3) その他、福岡市動植物園再生構想に関すること

(組織)

第4条 委員会は、委員10名以内をもって組織する。

(委員)

第5条 委員は、次の各号に掲げる者のうちから、市長が委嘱する。

- (1) 学識経験者
- (2) 市民代表
- (3) 関係行政職員
- (4) 市職員

(委員の補欠)

第6条 委員に欠員が生じた場合、その他委員が必要と認めるときは、市長は新たな委員を委嘱することができる。

(委員長、副委員長)

第7条 委員会に、委員長1名、副委員長1名を置く。

- 2 委員長、副委員長は、委員の互選により選任する。
- 3 委員長に事故あるときは、副委員長がその職務を代行する。

(委員会の開催)

第8条 委員会は委員長が召集する。

- 2 委員会の議長は、委員長が務める。

(意見の聴取)

第9条 委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(専門部会)

第10条 委員会に、必要に応じて専門部会を置くことができる。

- 2 専門部会には、委員以外の臨時委員を選任することができる。
- 3 専門部会に属すべき委員及び臨時委員は、委員長が指名する。
- 4 専門部会に部会長、副部会長を置き、専門部会委員の互選により選任する。
- 5 部会長に事故あるときは、副部会長がその職務を代行する。

(専門部会の開催)

第11条 専門部会は部会長が召集する。

- 2 専門部会の議長は、部会長が務める。

(庶務)

第12条 委員会及び専門部会の庶務は、福岡市都市整備局公園緑地部公園計画課において処理する。

(設置期間)

第13条 委員会の設置期間は、平成17年3月31日までとする。

(平成16年3月2日一部改訂)

(補足)

第14条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

この要綱は、平成15年6月16日から施行する。

附 則(平成16年3月2日)

この要綱は、平成16年4月1日から施行する。

「福岡市動植物園再生基本構想検討委員会」委員名簿

所属・役職等	氏 名	備 考	
神戸芸術工科大学芸術工学部環境デザイン学科教授 九州芸術工科大学名誉教授	すぎもとまさみ 杉本正美	委員長	学識 経験者 (4)
茨城県自然博物館長 (財) 日本動物愛護協会理事長 (財) 日本博物館協会長	なががわしろう 中川志郎	副委員長	
よこはま動物園「ズーラシア」園長 兵庫県豊岡市コウノトリの郷公園長	ますいみつこ 増井光子		
市民 z o o ネットワーク代表	おちあいともみ 落合知美		
南公園の動物園と緑を愛する会代表	いのうえふみこ 井上富美子	市民代表 (1)	
国土交通省九州地方整備局 国営海の中道海浜公園事務所長	たむらゆたか 田村隆	関係機関 (1)	
福岡市総務企画局長	たかたひろゆき 高田洋征	市職員 (2)	
福岡市都市整備局長	かのいたる 鹿野至		

福岡市動植物園再生基本構想検討委員会運営要領

(平成 15 年 8 月 4 日付け委員会議決)

(趣旨)

第 1 条 この要領は、福岡市情報公開条例（平成 14 年福岡市条例第 3 号。以下「条例」という。）第 34 条の規定に基づき、福岡市動植物園再生基本構想検討委員会（以下「委員会」という。）の運営に関し必要な事項を定める。

(会議の公開)

第 2 条 委員会の会議は公開とする。ただし、会議が条例第 26 条第 4 項又は第 38 条ただし書の規定に該当するときは、非公開とする。

2 委員会の会議の傍聴に係る手続その他会議の傍聴に関して必要な事項は、別に委員会が定める。

(議事録)

第 3 条 委員会の議事録は、会議の議題又は論点ごとの議事経過を明らかにした要点筆記とする。

2 議事録は、会議に出席した委員の承認を得て確定する。

附 則

この要領は、平成 15 年 8 月 4 日から施行する。

福岡市動植物園再生基本構想検討委員会傍聴要領

(平成 15 年 8 月 4 日付け委員会議決)

(趣旨)

第 1 条 この要領は、福岡市動植物園再生基本構想検討委員会運営要領第 2 条第 2 項の規定に基づき、福岡市動植物園再生基本構想検討委員会（以下「委員会」という。）の会議の傍聴に関し、必要な事項を定める。

(受付)

第 2 条 委員会の会議の傍聴を希望する者（以下「傍聴希望者」という。）は、会議の開催の 1 5 分前までに、自己の氏名及び住所を傍聴希望者受付簿（様式第 1 号）に記入し、整理番号票（様式第 2 号）の交付を受けなければならない。

(定員)

第 3 条 委員会の会議を傍聴する者（以下「傍聴人」という。）の定員は、あらかじめ委員会の委員長（以下「委員長」という。）が定めるものとする。

2 傍聴希望者が定員を超えるときには、申込先着順によって傍聴人を決するものとする。

(会議場に入ることができない者)

第 4 条 ポスター、ビラ、拡声器その他会議若しくは傍聴を妨害するおそれがあると認められる物品を携帯する者又は会議を妨害し、若しくは人に迷惑を及ぼすおそれがあると認められる者は、委員会の会議場（以下「会議場」という。）に入場することができない。

(傍聴人が守るべき事項)

第 5 条 傍聴人は、委員会の会議を傍聴するにあたり、次の事項を守らなければならない。

- (1) 会議場における発言に対して、拍手その他の方法により賛否を表明しないこと。
- (2) 会議場において発言しないこと。
- (3) みだりに席を離れないこと。
- (4) 飲食又は喫煙をしないこと。
- (5) 携帯電話、パソコン等の情報通信機器の電源を切ること。
- (6) たすきを着用し、又はプラカードを掲げる等の示威的行為をしないこと。
- (7) 他の傍聴人の迷惑になるような行為をしないこと。
- (8) 前各号に定めるもののほか、会議場の秩序を乱し、又は会議の妨げとなるような行為をしないこと。

(撮影、録音等の禁止)

第 6 条 会議場において撮影、録音その他これらに類する行為をしないこと。ただし、委員長が認めた場合は、この限りでない。

(傍聴人の退場)

第 7 条 傍聴人は、委員会が傍聴を認めない議題に関する議事等を行おうとするときは、速かに会場から退場しなければならない。

(傍聴人への指示)

第 8 条 委員長は、会議の平穏な進行を確保するため、傍聴人に対して必要な指示を行うことができる。

(違反に対する措置)

第9条 傍聴人が、この要領の規定に違反したときは、委員長は、傍聴人に対して必要な措置を命ずることができる。

2 傍聴人が前項の規定による命令又は前条の指示に従わないときは、委員長は、その者に対して会議場からの退場を命ずることができる。

(委任)

第10条 この要領に定めるもののほか、委員会の会議の傍聴に関し必要な事項は、その都度委員長が決するものとする。

附 則

この要領は、平成15年8月4日から施行する。

様式第1号

年 月 日 福岡市動植物園再生基本構想検討委員会 傍聴希望者受付簿		
NO.	氏 名	住 所

様式第2号

年 月 日 福岡市動植物園再生基本構想検討委員会 整理番号票

NO.

傍聴人は、会議の開催中この整理票を携行し、係員の求めに応じて提示してください。

福岡市動植物園再生基本構想検討委員会の議事内容と開催経緯

1. 議事内容

議事内容（案）		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
I. 構想の前提	1. 再生基本構想策定までの経緯					
	2. 「福岡市動植物園再生基本構想」の目的					
	3. 「福岡市動植物園再生基本構想」の計画期間					
	4. 南公園、福岡市動植物園の現状					
	5. 福岡市動物園の問題点					
	6. 利用者の声（利用者アンケート等による）					
	7. 動物園の歴史と今後の方向性					
II. 動植物園再生の基本理念						
III. 動植物園再生の方向性	1. 福岡市動植物園の基本的方向性					
	2. 3つの方向性と7つのアクションプラン（再生の方向性）					
IV. 動植物園再生基本構想	1. 導入ゾーンの設定					
	2. 展示動物選定の考え方					
	3. 展示テーマの設定					
	4. 展示方法の考え方					
	5. 展示におけるストーリーの考え方					
V. 施設整備構想	1. ゾーニング、動線					
	2. 展示施設					
	3. サービス施設					
	4. 管理運営施設					
	5. 希少動物の保護・繁殖に関する施設					
	6. 供給処理施設					
VI. 管理・運営計画の考え方	1. 管理・運営の考え方					
	2. 望ましい組織のあり方					
VII. 構想推進のスケジュール	1. 事業スケジュール					
	2. 第1段階の具体的整備案					
	3. 第1段階の計画概要図					

2. 開催経緯

	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
検討委員会	★ ①委員会 8/4		★ ②委員会 10/27			★ ③委員会 1/9		★ ④委員会 3/2	★ ⑤委員会 4/5	
市民意見聴取				市民アンケート 11初旬～12/5						

第1回委員会での検討ポイント

1. 「動物園」という施設の性格について

(1) 基本的な考えの整理が必要

- 何のため誰のための施設か。
- 有料公園施設と捉えるのか、自然系博物館（文教施設）と捉えるのか。

(2) 収支構造について

- 独立採算までは追求せず、経営の方向性・考え方を整理する。
- 友の会や愛好会など企業や市民によるサポート制度、食堂・売店の収入を繰り込む方法など、様々な方法による収入向上の検討を行う。

2. 福岡市動植物園のあり方について

(1) 目指すべき方向性の絞り込みについて

- 網羅的に整理してある課題について、福岡市のあの場所に立地している動物園として、どういう動物園にすべきか、重み付け、強弱の付け方を考えることによって、福岡市動物園としての特徴や地域性を出していく。
- 市民が福岡市動物園に求めているものは何か、福岡市が動物園に期待するものは何か、立地条件、地域性、財源や人員などから、できることは何かを明らかにして、再生の目的を絞り込む必要がある。

(2) 検討範囲について

- 現動物園区域だけでの再生はあり得ないなかで、植物園が現在どういう役割を果たしており、今後どういう役割を果たしていくのかを押さえ、「動物園」のみならず「動植物園」として捉え検討していく。
- また、一般区域には豊かな植生があるなかで、一般区域、植物園区域に広げていく時に、どのような展示手法を採用するのか、検討する必要がある。

(3) 飼育展示手法の考え方及び動植物園の融合について

- 動植物の融合を図る上でも、立地条件にふさわしい動物種を選定する必要がある。
- 動植物が渾然一体となった環境を創り出す「バイオーム型展示」という手法もある。
- 福岡市動物園動物園で「ランドスケープイマージョン型展示」という手法を採用するかどうかは、よく検討する方がよい。
- 飼育・展示施設内に植物を共存させる方法は、動物種の組み合わせ、広さ、数など、色々工夫はできる。
- 飼育・展示施設内だけでなく、将来的には園全体の動植物が融合した展示を目指すべき。
- 高齢化社会を迎え、子どもだけの動物園ではなく、万人のための動物園であるべきだが、どの年代を中心に置くかを検討しなければならない。

第2回委員会での検討ポイント

1. テーマ及び事業計画について

(1) 市民に再整備の内容及わかりやすく伝わるよう配慮する

- 市民に理解してもらえる様、テーマには、新しい動物園のイメージが伝わるような分かりやすいサブタイトルが必要。
- 本構想に、どの程度の費用と時間を要するのか、市民に具体的に示した方がよい。

(2) 整備の優先順位、運営上の戦略を視野に入れた事業計画

- ゾーン毎に整備を行っていくことは必要だが、ユニバーサルデザインへの対応など、市民ニーズの観点から優先度の高いものを選択し、先行的に解決すべき。
- 動物園には、これで完成というもの無く、展示も経常的にリニューアルしていくことが入場者数を確保する上で有効。

2. 施設整備について

(1) より積極的な動植物の融合を図る

- 福岡市の動植物園再生構想の目玉は、動物園と植物園が一緒にあること。もう少し積極的に融合を図り、「動植物園」であることを全面に打ち出しても良いのでは。
- 現在の植物園の都市緑化の啓発という役割は今日でも必要なのか疑問。植物園の空いている所に動物を配置するだけで良いのか疑問。人と動植物の共生を考えた場合、里山的なスペースを設けることも必要では。

(2) 景観づくりに重点を置いた動植物の共存を目指す

- 動植物の共存については、気候風土が異なる中で、生息地の生態を再現することは非常に難しい。景観面づくり、雰囲気づくりという点に重点をおいた方が良い。また、お客さんに安らげる心地よい環境を提供する上でも、同様。
- 人と動物の共生を見る側が感じとれることは難しい。景観づくりやシステムづくり、解説員の補助など、ひと工夫いる。
- 水族館が別世界をみせているように、現代的なニーズでは視覚的にきれいで楽しい動物園であることが大切。福岡市なら、季節の草花と動物と一緒に観賞させること等も可能では。

(3) ソフト面、運営面を伴った施設展開を行う

- センターゾーン等の箱物施設については、ソフト面、運営面を考慮した上でその必要性を検討する。
- 動植物の融合においても、ハード面のみでなく、ソフト面を伴った展開が必要。

3. 動物種について

(1) 市民ニーズ、地域性（アジア）、福岡市動物園の役割（種の保存等）を考慮

- 市民に人気のある動物等、市民ニーズを配慮した通俗的な展示を行うことも重要。例えば、アジア各国の国鳥や国花を展示することも考えられる。
- 福岡市の地域性を考慮すると、アジアの視点はあった方がよい。
- 福岡市動物園のチンパンジーは、全ての亜種が揃っており、そのような動物園は他に無い亜種レベルでの福岡らしさを出すことも可能。
- 飼育環境や獣舎が良くなると繁殖の成功率も高くなる。福岡市動植物園として繁殖させる種を決め、その種については、十分なバックヤードを確保する等の対応が必要。また、ひとつの園で完結することは不可能であり、他園との連携も図る必要がある。

第3回委員会での検討ポイント

1. 動植物園再生のテーマ、基本的考え方について

(1) 動植物園が一緒にある福岡市動植物園の資源を活かして特徴としていくべき

- 福岡市動物園にはあり、他園にはない資源は、「動物園」と「植物園」が隣接して併存していること。この資源を活かし、福岡市動植物園の特徴として前面に打出していくべき。
- 基本構想の実現課程において、多少の変更が生じることはやむを得ないが、変えてはならないのは、「動物園と植物園の融合」という考え方である。
- 施設面、組織面において「動植物園の融合」を図るべき。

2. 「動植物の融合」のあり方について

(1) A：ガーデンの中にある美しく快適な動物園（舎）として融合を図る

- 広場や園路には、手入れの行き届いた素晴らしい植物環境があり、花畑の中に動物がいるような、綺麗で心豊かになれる、憩い・楽しみの場である動物園を目指しては。
- パドック内への植物の導入は、気候風土やスペースの問題があり難しいが、パドック外での植物の導入ならば、積極的に図ることができる。

(2) B：動物の生息地の“雰囲気”をつくり出す融合を図る

- 動物展示周辺やパドック内が一体となって、動物の生息地の“雰囲気”をつくり出すことが必要では。
- 動物舎内への植物の導入は、維持管理に経費がかかるが、そのことが見た目を良くし、リピーターの確保にもつながってくると考えられる。
- パドック内に植物があることで、動物の環境エンリッチメントになる。研究も進み、パドック内に導入可能な種も分かりつつある。植物の専門家が維持管理に協力できる点もメリットが大きい。』

3. 「動植物の融合」に伴う敷地の拡張について

(1) A：植物園の果たす役割を尊重し、植物園エリアへの本格的拡張は慎重にすべき

- 植物園を侵略するのではなく、動植物園の融合という点からも、お互いのコンビネーションによって存在意義を高め合うことができる。そのための植物園への拡張であれば、市民にも認められるのでは。

(2) B：現在の植物園の果たす役割を疑問視。一般区域ではなく植物園へ拡張すべき

- 一般区域へ橋を架けてまで張り出さなくても、大型動物を植物園へ移動して、飼育舎等の拡張に必要な敷地の余裕を生み出せば良いのでは。(植物園内芝生広場部分にサバンナ展示を設ける等)
- 植物園へ拡張した上で、さらに必要であれば、一般区域へ張り出すべきではないか。

4. 展示動物設定の扱いについて

(1) 再生における動物の種数、点数の目標値を定める必要がある

- 再整備後の動物種数、点数を想定した上で、敷地拡張の必要性を議論すべきである。

(2) 保護、繁殖を図る種は、絞り込む必要がある

- 福岡市動物園の規模では、ツシマヤマネコのみで十分ではないか。

(3) 既存施設を利用する場合は、適正な飼育が可能か、検討が必要

- 既存施設の有効利用も大切だが、適正な飼育が可能かどうかを検討した上で、引き続き利用する施設を決める必要がある。

第4回委員会での検討ポイント

1. 動物園再生の方向性について

(1) 理念と方向性の流れを再整理し、分かりやすくまとめる必要がある

- これまでの議論が、「独創性」「地域性」「慰楽性」という3つの方向性に集約されたことはよいこと。今後、それらの組み合わせ方を考えていかなければならない。「独創性」「地域性」「慰楽性」の説明もあるとよい。

2. 展示ゾーンについて

(1) 生息地の雰囲気づくり、環境エンリッチメントは共に観客、動物、両方の視点から考えて大切

- 野生に比べ圧倒的に狭い動物園内では、生息地環境の再現を図っても飼育環境のエンリッチメントとしての効果には限界があるので、人工物を用いて動物の自然な行動を引き出すことを重視したエリアと、観客に生息地の景観を見せることを重視したエリアという分け方は、コストに考慮し、どちらを重視するかによって、設けられたものと理解できる。しかし、観客の視覚も考慮し、学習的機能を持たせるために、野生に近い景観を創り出すこと、動物の精神的なエンリッチメントを図るために、人工物を含む様々な工夫をこらすこと、観客、動物、両方の視点から飼育・展示環境づくりを行う必要がある。

3. 展示施設について

(1) 動物の習性を考慮した展示施設を検討すべきで、その考え方を構想に盛り込む

- 展示ストーリー（参考）の中で、動物の習性のポイントが書かれていない。計画段階では動物の習性に合わせた造り方を検討すべきであり、基本構想でも、動物の適正な飼育・展示のために必要なものとして、獣舎・パドックの面積だけでなく、動物の習性を考慮した生活に必要な最低限のアイテムについて、基本的な考え方を記述しておく必要がある。

4. 園路・広場について

(1) 広場の機能と目的を明確にすべき

- 小広場の機能と規模と配置について、考え方が明確でない。
- 何度来ても楽しいという雰囲気づくりのためには、身近に使えるガーデン的な場所も必要。

5. 動物種の選定・希少種の保護・繁殖について

(1) 動物種選定においては、「将来に渡って確保可能」という視点も大切

- 10年～20年計画で再生が行われるのであれば、動物種選定の考え方については、他動物園での飼育状況、本園での飼育技術など、「将来に渡って確保可能か」という視点も加えた方がよい。

(2) 動物園と野生フィールドが一体となった希少動物保護、繁殖のモデルケースを

- 動物園には、希少種を飼育下で繁殖させ、野生への復帰を目指すという役割もあるが、その前提となる、「動物の生育が可能な自然環境」そのものが貧しくなっている。ツシマヤマネコについては、動物園スタッフと対馬の野生研究家が連携をとり、動物園とフィールドワークが一体となった、希少動物の保護・繁殖のモデルケースとなるような取組ができるとよい。

第5回委員会での検討ポイント

1. 動物園再生の方向性について

- 普通には見られない動物の生態を映像機器を用いて見せることや、ショー的な見せ方、いつも新しい情報やメッセージの発信など、「いかに楽しく利用していただくか、いかに情報を発信するか」という考え方について、施設面のみならず組織を含む運営面からも、方向性の中に触れておいた方が良い。
- 3つの基本的方向性の中で、「Originality」＝「動植物園の一体化」は、最優先項目であり、再生する大きな意味はここにある。
- バードガーデンの計画が少し後退しているように感じられる。動植物園の相互交流というもっとも重要な基本的方向性を具体化したもののひとつであり、後退させることなく進めてほしい。
- 対馬と福岡の近接性を考慮したツシマヤマネコの保護・繁殖の取組みを「福岡らしさ」として、中心に据えても良いのでは。

2. 園路・広場について

- エントランス部のセンターガーデンでは、動物園が変わったという印象を与えるような空間が求められることや、動物園という異空間へビジターを誘導する導入部としての雰囲気づくりなどの観点から、もう少し広さを確保し、緑も増やすべき。

3. 希少種の保護・繁殖について

(1) 繁殖を進める動物種として中央チンパンジーを選定することについて

- 中央チンパンジーの保護・繁殖を行うには、群飼いのための空間確保や、2～3代目の繁殖の組み合わせのための国際的なネットワークの構築などの課題もあり、困難と考えられるが、福岡市の施設規模でも、環境の質や複雑さなどを整え、亜種チンパンジーへの理解を持って、将来を見据えた方針を打ち出せるのであれば、繁殖を目指すことも不可能ではないとも考えられる。
- その取り組み方としては、「自らの園で繁殖させて、種の保存に責任を持つ」という方法と、「国際的なネットワークのなかで、種の保存に協力する（他園に出す）」という方法が考えられるので、本委員会では「希少種の保護・繁殖にプライオリティを置く」という方向性までを示し、具体的な手段としてどちらを選択するかは市の判断とする。

(2) ツシマヤマネコの保護・繁殖に係る動物園技術者とフィールド研究者の連携等について

- 本当の意味での動物保護のためには、動物園技術者とフィールド研究者が、繁殖の目的（生息環境の保全、野生への復帰など）を明確にして、両者が連携して継続的に取り組んでいくことが非常に重要である。
- 生息現地（対馬）と福岡市動物園が共存していく関係づくりも必要である。

(3) 市民への訴えかけ方について

- 希少動物の保護・繁殖への取組みに対して、市民の理解やサポートを得るためには、「何故、保護・繁殖をしなければならないのか」をPRしていく必要がある。
- そのためには、展示において、動物の生活環境を守ることと、見る側が楽しめるショー的な見せ方との折り合いを考えていく必要がある。その際、映像等の技術を用いれば、動物の生活環境を乱さずに、お客さんの満足を得ることも可能である。

4. 管理・運営計画について

- 動植物園の整備～管理・運営においては、希少種の保護・繁殖という継続性が極めて重要となる取り組みもあることから、基本構想で示した内容や方向性を、後世に継続し共有していくための仕組みについて、考え方を記述する必要がある。